
ゼロの使い魔～ガリア王家に転生！～

量産型ボンタ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜ガリア王家に転生！〜

【Nコード】

N4847T

【作者名】

量産型ボンタ君

【あらすじ】

事故にあいかけた女の子を助けて変わりに死んでしまった主人公が目が覚めると助けた女の子がいてチートな力を付けられ転生させられた。

この話しは転生先のガリア王家で主人公が頑張っていく話です。

プロローグ（前書き）

初めまして、量産型ボンタ君です。初めて小説書くので間違いだらけだと思いますがよろしくお願いします。

ブローグ

ブローグ

目を開けると辺り一面真っ白な世界で何も無かった。

目の前で頭を下げ

「ごめんなさい」

と謝る女の子以外は。

俺はごく普通のサラリーマンだった。変わった所と言えばライトノベルや小説が好きな所だ。暇があればいつでも読んでた。歳は25で彼女いない暦〃年齢といった感じで女とはあまり縁の無い生活をしてた。大卒で働き始めていて仕事が上手くいきボーナスをもらって意気揚々と友達と飲みに行った帰りだった。14〃5歳の女の子が本を読みながら工事中のビルの横を歩いてた。

だが、そこに工事中のビルから鉄柱が上から落ちてきた。女の子はそれにきずいて無いようでそのまま歩いている。気づいたときには走っていた。

友達の驚いた声が聞こえるが無視して女の子のもとに行き突き飛ばした。

そこから自分も逃げようとするが、飲み過ぎで足が絡まってしまい倒れた。

そこに鉄柱が落ちてきて俺は潰された。

友達の呼び声と女の子の鳴き声を聞きながら俺は意識を失った。

「いめんなさい」

の声を聞いて今までを思い出していた俺は意識を女の子へと向けた。

「えーと、君はさっきの」

「はい、あなたに助けて頂いた者です」

「あー、色々聞きたいがまず一つ。ここどこ？」

俺は辺りを見回しながら女の子に聞いた。
周りには何も無く真っ白な世界だった。

「あつ、ここはあなたの精神世界です。あなたは死んでしまったのでお話しをしながらあなたを精神世界にお呼びしました」

女の子に聞くと普通返された。普通はそんな事できないはずなんだがな〜と思いながら

「じゃあ、俺の精神世界にいるあんたは誰なんだ？」

と、聞くと

「私は神様です！」

と、飛びっきりの笑顔を返された。

うわゝゝ、笑顔が眩しい。

神様発言の後女の子に今までの事を聞いた。

彼女は天界の神様でかなり上の地位に居る事。

世界は一つでは無く色々な世界が有る事。

アニメやライトノベルといったものが好きで暇な時はよく読んでいる事。

仕事が一段落着いたので久しぶりに休暇を取り本を買いに行っていた事。

その帰り道にガマン出来ずに新しく買った本を読みながら歩いていった事。

落ちて来る鉄柱にきずかなかった事。

目の前で俺が潰された事。

死んでしまった俺と話すために俺の魂の中の精神世界に来た事。

「あー、大体の事はわかった。で君は俺に何を話し来たのかな？」

「あなたは本来あそこ死ぬ人間じゃないんです。本当はもっと長生きするはずだったのにあたしというイレギュラーのせいであなたは死んでしまいました。あたしはその謝罪をしに来ました。ごめんなさい！！」

と、彼女は申し訳なさそうに謝って来た。

「
いいよ」

「
「こんな謝って許される事じゃ無いってわかってるんですけどや
っ」だから、いいよって」ぱりちゃんと謝らないとって・・・え！
？」

「
いや、だからもういいよって」

「
えーと、いいんですか。あたしのせいであなたは死んだんですよ。
本当ならあたし何されても仕方ないんですよ。」

彼女は涙目でこちらを見て来た。
可愛いな。と思いつつ

「別にわざとじゃないんですよ。なら仕方ないかな？って思ってた、
って大丈夫か！？」

泣きそうになってた彼女はついに泣いてしまっていた。

「ありがとうございます。あたしのせいで死なせてしまったので何
されても仕方ないと思ったのにこんなに優しく許してくれると思っ
てなくて…」

泣き出した彼女は言ってきた。

もともと俺は誰かを見捨てて笑って生きて行けるほどさっぱりした
性格じゃない。

目の前で死にかけてる人をほうって置ける人間でも無い。
これは自己満足のためにやった事で感謝される事でも無い。
だからそんなに怒ってなかった。

「あー、そろそろ泣き止んでくれ。これは自己満足の為にやった
だけだ。だからそんなに謝らなくていい。そろそろ話しを進めよう。
」

彼女は鼻をすすりながら

「ありがとうございます。」

といつて来た。

「気にするな。で、俺はこれからどうしたらいいんだ？」

と聞くと彼女は微笑みながら

「はい。あなたには転生してもらいます。」

と言われた。俺はその笑顔が綺麗だと思った。

「あー、転生って言うとなんか？赤ちゃんからやり直させてやつ？」

「はい！！」

元気よく頷かれた。

赤ちゃんからってあれだろ一人じゃあろくに動けないんだろ。言葉も上手く喋れないから意志を伝えるのも無理だろ。

つまりはトイレにも行けずに漏らさなきゃいけないんだろ。

つまりは俺は大事な所を色んな奴に見られるんだろ。・・・

「勘弁して下さい！」

俺はすぐさまそこに跪ひざまづいた。

いわゆるD O G E Z A と言っやつだ。

みつともない？しるか！

誰が好き好んで他人に見られなきゃいけないんだよ！

そんなん恥ずかし過ぎて死ねるぞー！！

「えっと、どうしたんですか、急に」

彼女はあたふたしながら聞いてきた。

「何とかして元に戻るか何とか出来ませんか？転生以外で！」

俺は彼女にしがみついた。

「えーと、あの、言い難いんですけど無理です。

あなたはあの世界は既に死んだんですよ。

そんな所にあなたを戻す事は出来ないんです。

ごめんなさい、あたしのせいで。」

彼女は涙目になりもう今すぐにも泣きそうである。なんだか申し訳ない。

「いや、いいんだよ。どうしようも無いなら。だから泣かないで、な！」

俺が慌てて言うと

「ごめんなさい」

と、彼女は謝って泣き止んだ。

良かった。泣いてる彼女を見てるところで悲しくなりからな。

「あの、お詫びと言うか罪滅ぼしと言うか何と言うか、あなたの好きな力を幾つか付けていただきます。」

「何でもいいの、アニメの力とか」

「はい！」

何でも良いと言われると逆に迷うな。

あーとあれとかで良いかな？

「それじゃー、風の聖痕の精霊魔術とレンタルマギカやとある魔術

の禁書目録の魔術、伝説の勇者の伝説の忘却欠片、ルールフラグメD・Gray・デュー・グレイマンmanのノアの力を使えるようにしてくれ」

「わかりました。後、いろんな知識を付けときます。」

「えつと、ありがとう」

正直に言えば今言ったのがすべてOKが出るとは思わなかった。良
いのか？かなりチートだぞ。

「後、あなたの容姿はどうしますか？」

容姿か、何でも良いんだが・・・

「じゃ、D・Gray・デュー・グレイマンmanのティキ・ミックにしてくれ」

特に理由ない。あえて言えばあのキャラが好きだからだ。

「はい。では行き先はゼロの使い魔です」

「え？それは決まってるの」

「はい。こればかりは変えられません」

「えーと、何で？」

ゼロの使い魔と言えば戦争してたり、
平民を人として見なかったり、
もの凄い危ない宗教が有ったり
普通に人が死んだりとかかなり危ない所だと思っただけど。

「それは私が好きだからです！」

平均点な胸を張っていった。

「さようか」

これしか言えなかった。

と色々決まって所で

「じゃ、そろそろ行ってきて下さい!」

「わかったよ。あつと、そういえば君の名前は?」

俺は彼女に聞いた。今まで忘れてた。

「あたしは、アテナです。それでは、がんばって来て下さい。●●

●●さん!」銀髪銀眼、160センチほどの小柄な彼女、アテナは微笑みながら言ってきた。

「行ってきます」

隣に現れた光に飲まれながら自然と口から漏れていた。

主人公説明

ティキ・ド・ガリア

前世でアニメやライトノベルが好きなサラリーマン。

歳は25で彼女いない暦Ⅱ年齢と女性と縁が無い生活をしていた。ボーナスの出た日に友人と飲みに行きその帰りに女の子に鉄柱が落ちる所を助け死んでしまう。

助けた女の子が神様のアテナでゼロの使い魔の世界へと転生させられた。

容姿

ティ・グレイマン

D・gray・manのティキ・ミックをそのまま子供の姿で髪と眼がガリア王家の青色である。

能力

風の聖痕の精霊魔術

とある魔術の禁書目録とレンタルマジカのすべての魔術
フルフラグメ
伝説の勇者の伝説の魔法と忘却欠片

D・gray・manのノアの能力

アテナ

ティキに助けられた女の子。本当は女神のアテナ。アニメやライトノベルが好きである。

ティキに助けられた時はゼロの使い魔をよんでいて周りが見えて

いなかった。

自分のせいで死んでしまったティキに力を与えてゼロの使い魔の世界へと転生させた。

容姿

銀髪銀眼で160センチ弱で平均的な胸で15〜6歳の見た目である。

カンピオーネ！のアテナの乙女と少女の姿

第1話

第1話 王家に生まれた

眼を閉じていると声が聞こえてきた。

「生まれたか！」

「慌てなくても逃げたりしませんよ。」

眼を開けようとするが中々開かない仕方ないので話を聞くことにした。

「この子か俺の子は！」

「ええ、可愛いでしょう」

「ああ、お前に似てな！」

男性と女性の声が聞こえてきた。男の方は結構歳を取ってるようだ。何とか眼を開けるとそこには青髪青眼のおじさんがいた。30代前半の用に見える。

その横には20代後半の女性がいた。こちらも青髪青眼の綺麗なおねーさんといった感じだった。

「おお！眼開けたぞ！」

おそらく両親だろう二人は何か喜んでいた。

とりあえず声を出そうとするとが「あゝあゝ」と言った声しか出ない。

仕方無く回りを見回すとなにやら微笑ましい物を見るように何人かのメイドがいた。・・・

メイド！？

え、何でメイドがいるんだ！？

メイドって言ったら金持ちの家に居るぐらいだよな！

つまりこの家は金持ちの家！？

よく見たらこの部屋無茶苦茶広い！

しかも青髪って確かガリア王家の証じゃなかったけ！？

ガリアってジョゼフが弟のシャルルを殺しちゃった後に、「俺は悲しみたいのだ」とか言いながら無茶苦茶やる所だろ！

いや、待てよ！青髪青眼だからってガリアだと決めつけるのは良く無いぞ！

もしかしたら偶々同じ色っただけかもしれないし、まだ希望は有るはずだ！

俺があたふたしながら現実逃避をしていると

「よし！お前の名はティキだ！ティキ・ド・ガリアだ！」

「・・・」

親に名前を付けられた。

死刑宣告のように思えた。

「まあ！素敵な名前ね。今日からあなたはティキよ」
「あゝあゝ」

取りあえず返事をしておいた。

権力争いに巻き込まれないようにひっそりと暮らす事を誓った。

第1話（後書き）

野良猫さん感想ありがとうございます。プロローグを分けたのは初めて投稿するので使い方が良くわからなかったからです。大分理解してきたので次辺りから少しずつ長くして行くつもりです。これからもよろしく願います。

第2話

第2話

こんにちは、ティキです。
俺が産まれてから4年経ちました。
この間に色々ありました。

最初の二年は大変だった。
トイレは当たり前のごとく漏らしてた。どうしようも無かったんだ！
メイド達に微笑みながら処理されてた。
とてつもなく恥ずかしかった！

一年もすれば何とか立てたが歩くことが出来ない。物にしがみついて行くのがやっとだった。

言葉はそんなに喋れないが片言でなら話せる用になった。
母や父の事を「かーか」「とーと」と呼ぶと両親はとても喜んだいた。

本当は母さん父さんと言いたかったが、まあ仕方ない。

二歳に成ってしばらくするとそれは起こった。

まず今居る所は王宮では無い。

最初の頃は王宮にいたのだが、2歳になった後に東の海沿いに有る別荘に移った。

まあ、別荘と言っても軽く小さな城を越すぐらいには大きいのだが。
・・・

移った理由としては原因不明の病気に掛かったので、王宮から離れて安静に暮らすというもだ。

実際は病気じゃ無かったんだがな。

ノア化が始まってたんだ。

聖痕が出てきて体に激痛が走ってた。

あんなに痛いのは前世もあわせて初めてだった。二度とあんなのはゴメンだ！

救いだっただのが痛みのせいで時間の流れがわからなかった事だ。

2歳に成ってしばらくすると激痛がしていた。何が何だかわからなかった。

そして、世界が終わる怖くて悲しい夢を見た。

気が狂いそうに成りながらも何とか成った。

気がつくとも痛みは無くなっていた。

そして完全なノア化が出来るように成った。

良く成った体を起こし軽く動かして居ると母親が入ってきた。

母親の話を聞くと俺は2歳に成って間もなくの時急に倒れたらしい。

その頃は風邪だろうと思ったが余りにも苦しそうなので心配に成ったらしい。

すると、ある時に頭に聖痕が出てきて騒ぎになったそうだ。

慌てて水メイジに診せるが誰も原因を掴め無かった。

この事をロマリアに知られたらどうなるか解らなかったので、箝口令をしきこの別荘に移したそうだ。

そこからは何も出来なくなり俺が倒れてから1年半。

もう諦め欠けた時に俺は起きたらしい。

1年半!?

なが!!じゃあ俺もう3歳!?!どれだけ寝てんだよ!て言うかノア化ってこんなに時間掛かったけ!?

と俺が混乱して居ると、

「それにしてもティキが起きたて良かったわ!もう動にも成らないかと思つて!!」

と涙ながらに言われた。

それに俺は混乱していた考えを全部捨てて

「ごめんなさい」

と謝っていた。

「良いのよ、ティキが元気に成ってくれたらそれでいいの」
俺は二度とこの優しい母を泣かしたく無いと思った。

俺が起きてから何日かすると父親が城に来た。

俺はその間今まで体を動かして無い分を動かしていた。初めは10
マイルほど走るともう動けなくなっていた。

これじゃだめだ！と思った俺はひたすらはしって、何とか50マイ
ル完走！て所までは行った。

父はこの国の王で余り俺の見舞いにはこれなかったらしい。

それでも俺の事はずっと考えていたらしく、俺が起きたと聞いて直
ぐに仕事を放って駆けつけたらしい。

仕事しろ！仕事！

側近が泣いてるぞ！

と思いながらも其処まで俺の事を考えていたというのは正直嬉しか
った。

俺の事は余り知れ渡って無い用だがロマリアは、どうも俺の事を嗅
ぎましてゐるらしい。

ロマリアに捕まったらやれ聖人だー！何たらだー！と担ぎ上げられ
る可能性が有るらしい。

そんな事がいやな俺はここで大人しくしていることにした。

父は俺の元気な姿を見ると安心したらしく、割と直ぐに帰っていた。

それから1年。

俺は家庭教師から文字を教えて貰ったり

ハルケギニアの歴史やロマリア教の事

貴族としての立ち振る舞い

魔法に付いての基礎知識を教えて貰った。

特に貴族の嗜みとしてダンスやバイオリンをやらされた。前世の俺

はそんな事したこと無くかなり苦戦した。

母からは俺の上に兄弟が二人いる事を聞いた。ジョゼフとシャルルらしい。

うん、わかってたけどやっぱりね、怖いね。

兄弟ってことは、ジョゼフに「俺は悲しみたいのだ」とか言って殺されそうになるんだろ？な。

俺としては余り近づきたく無いな。

後は、いかに父が凄い人だとか、のろけ話を永遠と語られたり等した。

コラ、そこメイド！

微笑ましそうに観てるな！

こっちはもう3時間も聞いているだ！

いい加減助けてくれ！

と言う俺の願いは届かずその後のろけ話しは2時間に及んだ。

と、まあ中々平凡に暮らしていた。家族中はかなり良かった。

第2話（後書き）

これまで読んでいただきありがとうございます。作者はそんなに文才は有りません。色々ミスがあると思いますが御容赦願います。後、色々のご都合主義になると思いますが優しく見守ってくれたらうれしいです。

これからもよろしく願います！

第3話

第3話

5歳の誕生日まで後1週間というある日、俺は何時もどつりに眠りに付いていた。

もうすぐ5歳ということでこの頃は魔法の勉強ばかりさせられていた。

5歳に成ると杖と契約し本格的に魔法をやらされるからだ。

一人目が魔法を使えず、

二人目がスクウェアの天才、

では三人目は？

ということでかなりの貴族から注目されているらしい。

俺としても錬金の魔法がとても楽しみで速く魔法使いたいと思っていた。だから魔法の勉強は自分からもしていた。

魔術はまだ使え無いようでどうしたら良いか解らない。

一応体力を付けるために体は鍛えている。

いざ！という時に体が動かないじゃダメだと思うからだ。

そして今は疲れた体を癒やしていた…筈なんだが？

今、俺はアテナと会った時の精神世界らしき所に居る。

そして前にはアテナらしき人が居る。

何故らしき人かと言つと…

背が縮んでいた！

160センチぐらいだったのが145センチぐらいに成っていた。
腰まで有った銀髪は肩まで短くなり平均点な胸は無くなっていた。

「誰？」

つい口に出してしまった！

「忘れたのか！？妾じゃ！！アテナじゃ！！」

何やら言葉使いまで変わっている。これはもう別人だろ！！

「あゝ、俺の知ってるアテナはもっとでかいし、そんな話し方はせん！」

「それでも妾はアテナなんじゃゝ！！」

アテナだと言い張る女の子は終いには泣きそうになりながら主張してきた。

「あゝ、わかったわかった！アテナって認めるからなくな！」

と俺は慌てて言った。

ぐすりながらも泣き止んだアテナに

「じゃ、何でお前は小さく成ったんだ？」と聞いた。

「よくぞ聞いてくれた！実は・・・」

とアテナに成り行きを聞いた。

アテナ曰わく

昔、天界では転生者を良く作ってるらしい。

そして全ての転生者が良い奴と言う訳では無いらしい。

人を人だと思わない奴とか、女の子に暴力を振るう奴とか、力を使
って犯罪を犯す奴とか。

そんな奴等が居るからこの頃は転生者を作るには会議して真剣に生
者を作るには会議して真剣に決める必要が有るらしい。

しかし、アテナはその事を知らずに俺を転生者にしてしまった。

さらに、力は一人に付き一つと決まってるらしい。にも関わらず俺
に幾つも力を与えてしまった。

そしてその事が上の連中にバレたらしい。

その責任としてアテナの力を半分ほど封印されたらしい。

封印の影響でアテナは体が縮んでしまったらしい。

そして何故か話し方も変わって締まったと言う。

「詰まり、自業自得と」

俺はつい言葉にしまった。

「なっ！？確かに妾にも落ち度は有る！有るが！！半分ほどはあなたにも責任が有るではないか！！」

「どんな？」

つい素で返してしまった。

俺は危ない所だったアテナをたすけた。

確かにアテナの変わりに死んで終い友人や会社等には迷惑を掛けたかも知れないが少なくともアテナには掛けてい無い。
ちなみに両親はとうの昔に死んでいる。

「あなたが能力を一つにしてくれば力は減らされ無かったんじゃない？！」
「！！！」

「いやいやいや！それって俺のせいじゃないだろ！！お前が付けてくれるって言ったじゃん！それってただの八つ当たりだろ！」

「うっ！」

アテナは涙目＋上目使いで睨んできた。

きつと怒ってるんだろうけど全然恐くない。
逆に可愛いと思ってしまった！

「で、結局何しに来たんだ？」

アテナがある程度落ち着いた時に聞いてみた。

「妾は天界からの罰をもう一つ受けたんじゃ」

はて？何だろな？

罰だと言っからには何かしないといけないのだろう。
しかし、ここに来る意味が分からん。

何しに俺の所に来たんだ？

「天界からあなたの見張り役としてこのあなたの精神世界に住めと言われたのじゃ」

はあ、そうなんだ。

「えっ・・・」

「え〜〜〜〜〜！？！？！？！？！？！？」

その言葉を理解するのに3分ほど掛かってしまった。

だってさ！この精神世界に住むってことは詰まり、アテナは俺の中に住むってことだろ！

それは良いのか！？

転生者と言っても何とも無い平凡な一般人だぞ！！
それわ一応力は有るし今は王族だけでも！

あれ？
・
・
・

俺って一般人じゃ無くなってる？

俺がいつの間にか一般人じゃ無くなってる事考えるとアテナに呼び戻された。

「一応これからの事を考えようでは無いか！」

数分後、このごちゃごちゃした考えをまとめる為にアテナが切り出した。

「まあ、そうだな。
取りあえずこの精神世界の事を教えてくれ」

「ここはあなたがノアの第9使徒「夢」ロードの力を使って作った世界じゃ。ここではあなたが望めば何でも出来るのじゃ」

ロードの夢の世界ね。

うん、じゃ。

「椅子よ出る。」

すると初めから在ったように椅子が出てきた。考えていたのよりもいびつな形をしていたが。

「まあ、初めてにしては上出来じゃな。後、言葉にする必要は無いぞ。望めば出来るのじゃから」

取りあえず椅子に腰掛ける事にした。

「取りあえず今俺が使える力を教えてくれ」

「あなたが使える力は今の所 D・gray-man のノアの力だけじゃな。」

「何でだ？」

「精霊魔術は精霊が見えんと駄目じゃろ。
魔術の方は知識が無いと駄目、忘却欠片はノアの力を使えば出来る
がまだあなたには無理じゃ」

「じゃあいつになつたら使えるんだ？」

「精霊魔術は5歳の誕生日に精霊が見えるように成る。そこからは
訓練次第じゃな。」

「後少しか」

どうせなら神炎とか使いたいからな、がんばるか！

「魔術は知識が有れば出来るように成るが今知識を送ったらノア化の時のように成るぞ」

「また今度で良いです！」

俺は全力で拒否した！

あれをまた体験するのは勘弁したい。

「まあ、一気にやったらと言う話じゃ。少しずつにしたら大分マシに成る」

なら少しづつにしていくな。

別に今すぐ必要と言う訳じゃ無い。
時間も有るしゆっくりやろう。

「じゃ忘却欠片は」

「それも自分次第じゃな。あっそうそう！あなたはこの世界の魔法は使えぬからの」

「・・・なんで？」

この世界の貴族、それも王族で二人も魔法が使え無いつてまずく無いか？

と言うかジョゼフの虚無はバレても始祖様の再来だー！とかで大丈夫だろうけど、俺って完璧な異端者じゃね。

と言うか錬金めっちゃ楽しみにしてたんだけどー！！

「それはあなたがノア化をしたからじゃな。あなたの体はノア化のせいで元の体から変わったからの、魔法が使え無くなったんじゃない」

ノア化のせいか!!

ん？そう言えば・・・

「なあ、俺のノア化ってかなり長く無かったか？」

一年半はいくら何でも長すぎだと思う。

「それは、一気に全てのノア化をしたからじゃ。13もののノア化をしたんじゃぞ、それなりに時間もかかるのじゃ」

なる程、確かに。

「それとあなたは今精神だけがここに来て居るが体も此方に来れるぞ」

「どうやって？」

「あなたの世界でこの世界への扉を出せば良い。この世界から出る時は行きたい所を思い浮かべて扉を作れば良い。」

まるで「どこでも・ア」だな。違う所は途中に夢の世界に繋げなきや行けない所か。

「そうそう、第3使徒「快樂」ジヨイドの力じゃが魔法は選択できないぞ」

「選択？」

「「快樂」の力の事じゃ。能力は「万物の選択」。自身が触れたい物を自由に「選べる」権利を持つものじゃ。だが、魔法は別じゃ。あれには世界の理で起きる事では無いからの」

詰まり、魔法は避けるか防ぐしか無いって事か。

「ん、わかった。気を付けるよ」

それから俺達は他愛の無い話をしていた。

「なあ、そう言えばさ、「ダングルテールの虐殺」ていつ何時だ？」

あれは疫病と称した新教徒の虐殺だった筈だ。
助けられるなら助けたい。

「うーんと、確か」

何やら手帳を取り出して探している。
必要な所を見つけ出したのか読み始めた。

そして急に動きを止めた。

どうしたんだ？

「アテナ、どうした？」

「今日じゃ」

「何が？」

「『ダンゲルテールの虐殺』が」

時が止まった気がした

第3話（後書き）

次は少し戦闘も入ります。

戦闘シーン等慣れて無いので過なり変になると思いますが、よろしくお願いします！

第4話（前書き）

シリアスや戦闘は難しいです。

矛盾してたり間違ってたたりするかもしれません。

基本的にこの小説は作者の自己満です。

それでも良ければ見て下さい

第4話

第4話

こんにちは。 ティキです。

ただ今馬を走らせています。

落ちそうなりながら必死にしがみついています。

何が有ったかと言うと「ダングルテールの虐殺」が今日起きるらしい。

だが、俺はダングルテールがどこにあるか知らない。

詰まり、夢の世界からは行けないのだ。

仕方無く城から馬をくすねて城から抜け出したのだ。

そして今、ただひたすらに馬を海岸沿いに走らせているのだ。

もう2時間ほどたっている。

馬もそろそろきつそうだ。 当たり前だ。 2時間も全力で走り放しなのだから。

だが急がないと虐殺が終わってしまう！

後少し馬には頑張って貰わないといけない！

ダングルテールに向けて馬を走らせた。

1時間後、空が赤く燃えていた。

クソ！間に合わなかった！

俺は直ぐに赤い空の下へ向かった。

そこには家が燃えていた。

そこには木が燃えていた。

そして、人が燃えていた

俺が村の近くに行くとそこは火の海だった。

直ぐに馬を下り、生存者を探しに走り出した。

周りは家が燃やされ、木が燃え、ペットらしき動物が燃され、人が燃やされ既に死んでいた。

火を消そうと転げ回って死んだ者、

手足が吹き飛ばされて燃えている者、

兄弟を庇ったまま燃やされた子供達、

そしてそれに火を放っている者達^がいた！

ユ・
・
ナ

・
ル・
ナ

ユル・ナ

ユルスナ

奴ヲヲ許スナ！

俺の中からこえがした。

「あ？まだ生き残りがいたのか？」

俺はトリステインの魔法研究所実験小隊に所属している。
今回の任務はダングルテルという村で疫病が発生したらしい。
それを悪化させない様に焼き払えという物だった。

正直、やりたくないが貧乏貴族の三男として生まれた俺がやっと思
つけた仕事だ。
拒否権は無かった。

そして今は三人一組で村を焼き回っている所だ。
速く終わらして酒でも飲んでこの事を忘れたかった。

速く終わらして酒でも飲んでこの事を忘れたかった。

あらかた終わり、後は他の小隊員達と合流して帰るだけだった。

が、そこに子供がやって来た。
まだ4〜5歳ぐらいの小さな子供だ。

殺したくはない。
しかし、命令は皆殺しと言われている。
可哀相だが殺すしかない。

俺はファイヤーボールを子供に向けて放った。それは子供に当たり
子供は焼け死ぬ・・・

筈だった。

ファイヤーボールは子供の目の前で弾け飛んだ！
何が起きたのか解らなかった。

「
ライ」

子供の声が聞こえた。

「ライ」

「ライ」

「ライ！」

子供がライと言ったびに雷を強く纏いだした。

「おい！こいつヤバいぞ！」

「何なんだこれ！？こんな魔法見たことないぞ！」

「速くあいつ殺すぞ！」

あいつは危険だ！

すぐさま仲間と共に魔法を放った。

フレイムボール

ファイヤーウォール

エアハンマー

仲間と共に撃てる限りの魔法を撃った。

にもかかわらず奴の雷に当たり魔法は全て吹き飛んだ！

「化け物だ！」

「にげるー！」

俺達は逃げ出した。
奴から逃れるために走った。

「ライー！！」

それを聞いた後、俺は意識を失った。

魔法が飛んで来る。だがそんなのは関係なかった。俺は自然と力を使っていた。

「ライ」

雷で相手の魔法を相殺した。別に意識的にやった訳じゃ無い。

「ライ」

自然と口から漏れて力使っていた。

「ライ」

俺の中から声がする。

「ライ！」

奴ヲヲ許スナ！と。

さらに多くの魔法が飛んで来る。
だが俺はよけなかった。

避ける必要が無かった。
飛んで来た魔法に纏っている雷を軽く放った。
それだけで魔法を消し飛ばした。

奴等は「化け物だ！」と言いながら背を向けて逃げ出した。

纏っている雷を右手に集めた。
集めた雷を圧縮した。

そしてそれを、奴等に向けて雷を放った。

奴等に向かった雷は黒焦げまで焼いていた。

奴等は既に死んでいた。

俺は今、人を殺した。

あいつらも人を殺してる。

同情する気は無い。

反省する気も無いし後悔する気も無い。

自分が正義だとは思わない。

こんな世界だからこれから先も人が死ぬ事はあるだろうし、俺が殺す事もあるだろう。

戸惑いや躊躇はしないと思う。

ただ・・・

人が死ぬのは悲しいと思った。

「キャアアアア！」

俺は奴等を殺してからまた生き残りがいないか探していた。
そして女性の叫び声が聞こえた。

直ぐに声のした方へと走り出した。

たどり着いたそこには先ほどの奴等と同じ服装をした奴等と体の半分を燃やされて死んでいる女性、そしてその女性に庇われている小さな女の子がいた。

俺は直ぐ様雷を纏い奴等に向けて放った。

奴等三人の内、二人は殺したが、後一人は寸前で躲した。

躲した相手に向かって雷を放つが火球によって相殺された。

躲した相手に向かって雷を放つが火球によって相殺された。

それからはいつと雷と魔法の撃ち合いとなった。

こちらが雷を放てば走り回りながら魔法を放ってくる！

相殺仕切れない魔法を躲すために動けばその隙に魔法を連発してくる！

その魔法を相殺し雷を放つとまた走り回りながら魔法を放つ！

その繰り返しとなった。

そして遂に俺は追い詰められていた。

目の前にきた魔法を相殺するのに気を取られ背中から来る火球に気づかずそのまま・・・

当たらなかった。

当たる直前に火の蛇が火球を喰らった。

俺はトレスティン実験小隊の隊員メンヌヴィルだ。

俺は任務なんぞはどうでもいい。

燃やしたい！
ただそれだけだ。

亜人も人も動物も、
男も女も子供も老人も
関係無くただ燃やしたい！

任務を受けるのは罪にならないからだ。
罪人に成ると軍に追われ人を焼くのが難しくなる。
だから俺は実験小隊に入り任務を受ける。

そして俺は凄い人を見つけた！

俺達の隊長は女も子供も老人も見境無く焼いた。

表情一つ変える事なく

無慈悲に無情にただ燃やした。

俺はそんな隊長に憧れた！

俺も隊長のように成りたいと思った！

そして隊長を燃やしたいと思った！

俺は今、女を燃やした。子供を燃やそうとした所を横から出てきて子供を庇って燃やされた。

俺は女が死ぬのを眺めて居るといきなり雷が飛んで来た！

三人一組の後の二人が雷に焼かれて死んだ。

雷は風のスクウェアしか使えない。

詰まりはそれだけの使い手が居るということだ！

そして俺は子供を見つけた。

まだ5歳程の小さな子供だった。

しかし、その子供は雷を身に纏い俺に向かって放って来た。

俺はそれに魔法を放ち相殺する。

そして走り周りながら相手の様子をつかがいながら魔法を放ち隙が出来れば魔法を放ちまくる！

相手が雷を放つと俺は走り周りながらまた魔法を放つ！

その繰り返しとなった。

しかし奴は戦い慣れて無い。

雷は強力だが周りを見てない。

俺は魔法を連続で放ちながら火球を奴の死角から放つ。
それは奴の背後から迫り・・・

炎の蛇に喰われた。

その炎蛇を放ったのは・・・

俺が今、一番燃やしたい人だった！

俺は奴の火球に焼かれる所だった。

それを助けたのは

20代の若い男だった。

「メヌヴィル！杖を収めろ！この村は疫病なんかに掛かって無い！殺すのはもう止めろ！」

若い男は今戦っている相手に呼びかけた。
メヌヴィルと言っらしい。

しかし、メンヌヴィルは男の言葉を聞いていない！
そして男に対し火球を放った！

それからはメンヌヴィルと男が戦った。

男は火球を避けながら、相殺しながらメンヌヴィルに杖をしまうようにと呼びかけているが、メンヌヴィルは何も聞かずに男を殺すために魔法を放っている！

「チッ！仕方が無い！」

男はそう言っていると、火球をメンヌヴィルの足元に放ち土煙をたてた。そして炎蛇を土煙の中でメンヌヴィルへと放った。
炎蛇は土煙の中を動きメンヌヴィルの背後へと移動させ、その間は魔法を放ち続けてメンヌヴィルの気を引きつけ・・・

背後から炎蛇にメンヌヴィルを襲わせ彼を焼いた！
死なない程度で焼かれた彼は、そのまま逃げ出した。

「大丈夫か？」

メンヌヴィルが逃げ出した後、男は俺に聞いてきた。

「はい、大丈夫です」

「そうか」

俺が答えると少し安心した様だった。

「あなたは彼の仲間だったのでは？」

「仲間だったが仕方ない。」

まあ、あれだけ襲われたら仲間でも仕方ないか。

「あなたはここで何を？」

「それは私が聞きたい所だがな。私達はここで疫病が流行っていると知らされてな、これ以上悪化させない様に焼けと言われて来た。」

「しかし、ここは疫病なんかに掛かって無いはずです」

「ああ、私も先ほど知った。

私は取り返しが付かない事をしてしまった」

男は後悔しているようだ。

涙流し自分の犯した罪を悔いている。

「あなたこれからどうするのですか？」

「私は私のした事を許せない。

私はこれから身を隠すつもりだ」

「隠してどうするんですか？」

「私は私が殺した人達の分を償う為に生きなければならない。

しかし、私はどのように償えばいいか解らない！

だから私はこれから償う為に何をするのか？何をしなければならぬのか？

それをこれから探すのだ」

これだけ意志が固ければ大丈夫だろう。

償う為に死を選ぶ人がいるが、それはただ逃げてるだけだ。

罪を犯したという苦しみから解放される為にしているだけだと思う。

しかし、この俺は罪を償う為に生きると言った。

償う為にしなければならぬ事を探すと。

ならばこの人は自分がしなければならぬ事をいずれ見つけ罪を償う事もできるだろうと思う。

「君はどうするのだ？」

「俺は生存者を探します。」

まだ生きてる人がいるかもしれないので。」

「いや、私も探したが生存者いなかった」

「そう……ですか。ではその女の子を連れて行きます」

「すまない。あの子を頼む」

「はい」

そう言いながら俺達は別れた。

男は森の中を進みやがて見えなくなった。

俺は焼け死んだ女性と庇われた子供の下に行き子供の状態を確認した。

子供は女の子で少し火傷を負っているが命に関わる傷は無い。

とりあえず女の子を連れて行く事にする。

また襲われたくは無い。

そこで気がついた。

女性の指に指輪が嵌っているのを。

それは火のように赤い宝石の付いた指輪だった。

俺はそれを女性の指から外しポケットに入れた。

女の子にとって、この女性の形見になるかもしれない。

指輪を取った俺はドアを造るよつに願う。

すると地面からドアが出てきた。

「うゝん、まだ慣れてないからな」

俺はシンプルな木のドアを考えて造った

しかし、出てきたドアは俺の考えたドアとはちがいに縁がぐにゃぐにゃと曲がっていた。

「まあ、使えるからいいか」

ドアを開くとそこは暗く何も見えない。
そのドアを女の子を抱えながら歩いていく。

ドアは自然と閉まり、崩れていった。

第5話（前書き）

久しぶりに投稿しました。

アニエスはまだ3歳ぐらいなのに普通に喋ったりしてますが、あまり気にしないで下さい。

これからもこんな感じで書いていくのでよろしくお願いします。

第5話

こんにちは。

今は夢の世界に来ているティキです。

俺はとりあえず女の子を抱えたままアテナの所へと来ている。

木の台の上に布を敷いただけの簡単なベッドを作りその上に乗せる。

それからアテナと向かい合う。

「あゝ、いろいろと聞きたいが取りあえず・・・

どうした？」

アテナは泣きそうになっていた。

「妾が悪いのじゃ。妾がもっと早く気づいていれば良かったのじゃ」

とアテナは謝ってきた。

「ハア」

とため息を付きアテナに近づいて・・・

軽く拳骨

「な、何をするのじゃ。」

「もし、もっと早くにアテナが思いだして俺がダングルテールにいても助けられなかった」

実際にメンヌヴィル相手に負けていた。

それにメンヌヴィルに勝った男、他の実験小隊の隊員達がいたら勝てる気がしない。

今、俺が生きてるのは運が良かったただけだ。

「それに、いくらお前が神だからと言って全ての者を救える訳が無い。

誰かを助けたら誰かを犠牲にしてるんだ。
だから、気にするな」

拳骨した所を優しく撫でながら言った。

一応は納得したみたいだ。

「じゃあ、本題。俺が使った力って何？」

「あれはノアの第8使徒「怒」ラースラの力じゃ。能力は「神の怒り」。直接攻撃的な能力で、体には何百万ボルトの高エネルギーが満ちており、傷つけられるほど傷つけた相手にそのエネルギーを流し込み攻撃する事ができるのじゃ。また相手の内部を鎖で繋ぎ、内部からも攻撃が可能じゃ。スキン・ボリックが使っておったの」

スキン・ボリックか。

確か、神田にやられてたな。

「じゃあ、俺の中で許すナって言ってた奴は？」

「多分ノアメモリーじゃろ。」

「怒」のメモリーはあなたの中の怒りに共鳴したんだと思うぞ。」

なる程。俺の中にはノアメモリーが有ってそれがあの声の正体つと。

「メモリーに自我を呑まれるではないぞ」

「呑まれたら？」

「辺り一帯を破壊しまわるじゃろつな」

「死んでも呑まれない！」

辺り一帯を破壊しまわるってどんなけ危険なんだよ！！！！

「まあ、余程の事が無い限り大丈夫じゃろ」

それを聞いて安心した。

家族や友達を殺すのはしたくないからな。

「なあ、俺の力の使い方を教えてくれないか？」

俺が殺さなくても家族や友達、大切な人を誰かに殺されるかも知れない。

そんな時に力が無くて助けられない！なんて事はしたくない。
メンヌヴィルや男には今のままじゃ勝てない！
勝つ為には力の使い方を知らない駄目だ。

「よいぞ」

アテナの了解も得たし、後は・・・

「うん」

と女の子が起きた。

「ここは」

「ここは・・・何だろ？」

見渡す限りの白い世界。

何て説明したりいい？

「あ、あの！お父さんやお母さんは！？」

泣きそうになりながら周りを探している。

「あー、言いにくだが・・・村は全滅した」

「そん・・・な。ああアアアアアアアアアアア！！」

女の子は泣き出してしまった。

俺はどうすれば良いか解らなかった。

ただ抱き締めて慰める事しか出来なかった。

しばらくすると女の子は泣き止み

「あっあの、ありがとう。」

と言った。

「うん？ああ、別に良いよ、俺も助けられなかったからな」と言いながら何となく女の子の頭を撫でていた。

「うん／＼／／」

何か顔が赤いな。

泣いてたからか？

「お前これからどうするんだ？」

「まだ、分からない。
でも、復讐したい！」

お父さんやお母さん、村の人達を殺した人達に！」

だろうな。

「一応言っておくとそんな事してもお父さんやお母さんは生き返らないし喜ばないぞ。」

それに復讐した相手やその家族、友達とかから恨まれるかもしれないぞ。

それでもか？」

「それでも」

そうか。なら

「なら、俺の所に来い。
復讐する時まで俺の所に居ればいい。」

「えっ？、いいの？」

「俺はお前じゃないからお前の気持ちなんて解らない。
でも、大切な人を殺した奴が幸せに暮らすのは俺も我慢出来ない。
どうしても復讐したいと言っなら俺に出来る事はしてやる」

「本当に!？」

「あゝ」

「ありがとう！」

そうと決まれば色々としなきゃな。

「ティキ？　もしや、妾の事を忘れてはおらぬだらうの？」

忘れてた。

「嫌だろ、今から紹介する所じゃないか」

「本当か？」

「俺が嘘ついたことあるか？」

「現在進行形でついておる」

「ハハハ！ソナ事アル訳ナイジャナイカ！」

「片言になつておるぞ!」

「それよりもこいつはアテナって名前なんだ!」

とりあえず誤魔化すことにしよう。

「ふん! まあ良い。
妾はアテナじゃ」

「私はアニエスっていうの」

「アニエスね。
俺はティキ・ド・ガリア。一応、王族だ」

「王族? 本当に?」

疑われてるな。
当たり前か。

自分を王族だっけ言う奴なんて信じられないだろ。

「あゝ、その辺は置いとくとして、
アテナ、こいつも一緒に鍛えてくれないか？」

「まあ、いいじゃろう」

「えーと、この子に人を鍛えられるの？」

見た目は幼女だからな。

「大丈夫じゃ。しっかりと鍛えてやろう」
アテナは自信満々に言った。

「それじゃあ、鍛える前にしなきゃいけない事があるな」

「しなきゃいけない事？」

俺は自分の部屋へと扉を繋げる。

「うわ!？」

アニエスが横で驚いている。

「説明は後にするからとりあえず付いて来て」

と言い扉を開けて中に入る。

「速く行け」

アテナの後押しを受けアニエスも扉に入った。

俺は今、アニエスを連れてある部屋の前に来ている。

「アニエスはここで待ってて。呼んだら入って来て」

「は、はい！」

緊張しているアニエスを置いて俺は扉をノックした。

「誰？」

今はまだ朝の早い時間でメイド達は起き出しているが、普通の人はまだ寝ているだろう時間帯だ。
俺もこの時間はまだ寝ている。
中の人も眠そうな声だ。

「ティキだよ。母さん」

「まあ、ティッキーなの。入ってらっしゃい」

母さんの許可を得て俺は部屋の中に入った。

「どうしたの？ついに一緒に寝る気になった！？」

「寝ないよ！」

体は5歳ぐらいだが、精神年齢30歳だぞ！
母さんとはいえこんな美人の隣じゃあ緊張して寝れるか！！

「つれないわね」

「今日はお願いがあつて来たの」

「お願い？」

「誕生日プレゼントはなにがいい？って聞いてたでしょ」

「何か決まったの？」

「うん。実はもう5歳だから侍女を付けて欲しいんだ」

「侍女？」

「そう」

「侍女なんて居なくてメイドが毎日世話してくれるでしょ？」

「いや、実はちょっと訳ありで女の子を一人置きたいんだけど何もさせないより仕事をさした方がいいでしょ」

「別に良いけど・・・はっ!!」

まさかあなた私と添い寝せずにその女の子を部屋で抱き込むき!？
まだ5歳なのになんて子なの!？」

母さん恐ろしい者を見るように俺を見た。

「ちがーう!!」

俺は単純に身寄りの無い子を家で雇ってやるつと言つ思いやりで言っただけ。

というから歳の子供を変な目で見るな!」

俺は慌てて母さんに訴えた。

「冗談よ。それよりとりあえずその女の子を連れて来て」

「ハア」

俺の口からため息がこぼれた。

「アニエス!入って来て!」

「し、失礼します」

とアニエスが緊張しながら入って来た。

「この子がね」。

何があつてこの子と会つたか説明してくれる?」

俺は母さんに嘘を交えて言った。

俺は何となく朝くに目が覚めてしまった。

寝ようにも寝付けなく仕方なしに起き出した。

する事も無いので外に散歩する事にした。

屋敷から出て近くの森の中を通り抜けようとした時に傷ついたアニエスを見つけた。

俺はアニエスを自分の部屋に運び目を覚ますのを待っていた。

そして目を覚ましたアニエスの話を聞いた。

アニエスは村を何者かに襲われ逃げ出したらしい。

必死に逃げていたためどうやってここまで来たのか解らない。

村を襲われた時に両親も殺され頼れる人がいない。

このまま放つて置くのはできない。

だからここで働かそうと思いつき、俺の侍女として働く許しを母さんに貰いに来た。

と、母さんに伝えた。

母さんはしばらく考えてから

「いいわよ」

と言った。

「ありがとうございます！」

アニエスが元気よく礼を言った。

「ねえ、ティッキー。ちょっとアニエスちゃん借りていい？」

「いいけど何するの？」

母さんは俺の質問に答えずアニエスの下に行きそして・・・

抱き締めた。

「カッワイー！ねえねえ、向こうにティッキーの為に用意してた服があるんだけどちょっと着てみて！ティッキーたら恥ずかしがって着てくれないのよ！」

俺の為に用意したってのはあれか？

女の子用のピンクのフリフリしたやつが付きまくってるあれの事か？あれを俺の為に用意してたの？あんなの着れるか！

「え？え？」

アニエスは何が何か分からないといった感じだ。

そして俺の方を見て助けて、と目で訴えてきた。

それを見てアニエスに目で語る。任せろと。

そして俺は母さんに

「母さんアニエスはおしゃれが初めてらしいのでいっぱい可愛くしてあげて」

アニエスを生け贄に捧げた。

「あら？そつなの？じゃあいっぱい可愛くしてあげなくちゃ！！」

「え！？あの！待つて！ティキー！！」

とアニエスは連れて行かれた。

アニエスは助けると必死に訴えてくるが俺は背を向けて逃げ出した。

アニメス、頑張ってくれ！

第6話（前書き）

感想を書いてくれた方々、ありがとうございます。

これから間違いなどは出来るだけ無くしていきます。

出来るだけ長く書くつもりなのでこれからもよろしくお願いします。

第6話

俺は今、アテナと組み手をしている。

そしてアテナにボコボコにされていた。

アニエスを生贄に捧げた日、俺が昼飯を食い終わった後によつやく
アニエスは解放されたらしい。
アニエスの格好はメイド服を着ていた。

どこからアニエスサイズのメイド服を出したんだ？

「ティキ！よくも見捨てたな！」

アニエスは涙目になりながら俺の所まで走って来た。

「ごめんごめん、でも可愛くしてもらったんだろ」

「そうだけど！あれから永遠と着せ替え人形にされたんだ！どれだけ大変だと思ってるんだ！」

まあな、母さんは夢中に成ると時間なんか関係ないからな。

「別に良いだろ、よく似合うし」

「う〜〜！」

似合うと言われ反論できないみたいだ。
拗ねて威嚇だけしてきた。

怖くないし、可愛いだけだけど。

「所でさ、そのメイド服どうしたんだ？
都合良くサイズもあってるし」

「ああ、これは奥様がティキに着せようとしてた服の中にあっただ。ティキの侍女になるからと貰ったんだ」

あぶねー！

こんなもんが何着もあるのかよ！！

母さーん！！

息子に何着せようとしてるんだ！！

アニエスは悪いがこれからアニエスに生贄になって貰うしかないな！！

そんな事があった後に俺達はこれからの事を考えた

。

とりあえずアニエスには午前中は俺と体力造り、
午後は俺の侍女としての必要な礼儀作法や仕事をメイド長から教えられ、

夜は文字を俺が教える事にした。

俺は午前中に体力造り、

午後は魔術を使える様にする事、

夜はアニエスに勉強を教える事にした。

「あの、アテナが鍛えてくれると言っていたのは？」

「大丈夫！それも考えてるよ！」

その夜、夢の世界に精神だけで行きアニエスの精神を連れて来た。

「……は朝の時の？」

「そ、ア二エスを連れて来た所。」

「でも私はさつき寝た所だよ？」

「ここは夢の世界だからな。朝と違って今は精神だけで来てるんだ。だから体は部屋で寝てるよ」

「ここで何するの？」

「アテナに鍛えてもらおう。これなら寝てる間に訓練してるからな。休みながら訓練できる。後は朝の体力造りの時に体を軽く慣らせばここで鍛えて事が外でもできるよ」

「ティキは何でこんな事できるんだ？」

「うーん、秘密！」

「いつか教える時があれば教えるよ」

「そろそろよいか？」

アテナが話かけてきた。

「ああ、良いよ。何するの？」

「ふむ、何をするか考えていたのじゃが、やはり初めは素手での格闘訓練かのう」

「何で素手？」

アニエスが不思議そうに聞いていた。

俺も素手で鍛えるのに疑問があったので黙ってアテナを見る。

「アニエスは何で戦つつもりじゃ？」

「うーん、やっぱり剣かな？」

「では、剣が無い時はどうするのじゃ？」

「え？え、え」と

「周りに武器が何も無かったら？」

「えっと、素手？」

「そうじゃ。何も無い時は自分の体しか無い。だから素手での格闘訓練をするのじゃ」

といい訳で俺とアニエスvsアテナによる素手での格闘訓練が始まった。

俺は鍛えていたので少しは動けたがアテナに投げられまくった。殴りかかれればその力を利用して逆に投げ飛ばされる。

蹴りを放てば受け止められ軸足を刈られて転かされる。

アニエスも頑張っているがやはり投げられている。

「だあー！何でこんなに強いんだよ！」

「妾は知恵と美、そして戦の女神じゃぞ？」

あなた達など相手にならんのじゃ！」

アテナは無い胸を張り声高に言った。

しかし、マジで強い。

あれから、朝起きるまで訓練したが一発も当たらない。
結局、ボコボコにされておしまいだった。

そして誕生日がきた。

5歳になり誕生日パーティーが開けた。俺の事は隠されていたため来たのは俺が生まれたのを知っている少数の位が高い者達だけだった。もう少し大きくなれば俺は王城に行く事になるらしい。

俺の誕生日だから、みんなに挨拶をしたが、初めてなのでかなり緊張した。その後は来ている人達に挨拶回りをした。

みんな俺を見定めるように見てきたので出来るだけ良く見られるようにするのが大変だった。

その時に俺の兄弟であるジョゼフとシャルルがいた。

俺の誕生日を素直に祝ってくれた。

今はまだジョゼフとシャルルの仲は良さそうだ。

こうして見ると将来争う事などしないように見える。シャルルは12歳でスクウエアになった天才として色々な人に挨拶をしに行った。その間にジョゼフと話していた。

ジョゼフは魔法が使えないからとみんなから軽く見られているのであまり挨拶をしなくていいらしい。

「お前が生まれたと聞いた時は正直引いたぞ！何歳までのろけてるんだろうな？」

「何歳までつて？まで若いんじゃないの？」

見た目はまだ30代後半ぐらいだ。

「お前から見て俺は何歳だ？」

「うーん、20歳ぐらい？」

「残念！今年で25だ！すでに妻も居るぞ。シャルルもな」

「え！？そうなの！？」

「ああ。そして俺にはまだ子供はいない。あの親が俺の歳ぐらいに俺産んだとしてあの二人は何歳だ？」

え〜と、 $25 + 25$ だから

「50!?!」

「ああ、詳しくは聞いてないがそれよりも少し若いぐらいだろう」

全く見えない。あの二人が既に50歳前なんて！
30代でも普通に通じるぞ！

「じゃあ俺を産んだのは40〜45の間ぐらい!？」

「そうなるな」

両親の意外な年齢に驚いた。

その後もジョゼフとは色々な話を話した。
しかし、魔法の事になると少し暗くなった。

「俺は魔法を使えないとバカにされた。
もしもお前が魔法を使えなくても俺はバカになどしない。俺はお前の味方だ」

「ジョゼフ兄、ありがとう」

いいひとだな。

とても狂って人を殺すとは思えない。

それからたわいのない話しをしているとパーティーは終わった。
ジョゼフ兄と話ができた良かった。

誕生日パーティーも終わり父さんから杖を貰った。
これからは肌に離さず持つておく様にと言われた。

俺、この世界の魔法は使えないんだがな。

それから眠りに付きアニエスと一緒にアテナに投げ飛ばされた。

速く強くなって投げられない様にしないとな。

第7話

どうも！ティキです！

今年七歳になりました！

俺は七歳になると別荘から王城で暮らす事になった。

七歳までの間はアニエスと訓練をしたり、文字を教えたり、魔術を少しずつ使える様にした。

アテナには相変わらず勝てない。

アテナから投げ飛ばしかたを教えて貰いアニエスと練習をした。

アニエス相手なら投げれる様になったがアテナを投げようとすれば逆に投げ飛ばされて終わる。

アニエスと二人掛かりで攻めても受け流され、避けられ、隙を縫って投げられる。

どうやれば勝てるんだろな？

アニエスに文字を教えるのは1年ぐらいで終わった。覚えも速く基礎を教えるとその応用も少しできる様になつていたので、難しい所を教えるだけで良かったので大分楽だった。

そして、文字を覚えた後はアニエスに魔法を教える事にした。

アニエスは貴族ではない。だから、この世界の魔法は使えない。ならば、他の世界の魔法ならどうか？と考えた。

例えば「伝説の勇者の伝説」の魔法等は？

「伝説の勇者の伝説」の魔法とは空气中に世界を埋め尽くすように存在する気の流れ、もしくは精霊とされるもの（実際は何なのかは解明されていない）をある法則に従って並べ替え、命令を出すことによって様々な現象を生み出すものだ。この気の流れ、もしくは精霊とされるそれは「金色でキラキラでフワフワ」しているように見えるらしい。通常の人間がこれを視認するには脳の眠っている部分を起こすため瞑想などの修行を約1年ほど積むことが必要。

魔法を発動するには気の流れ、もしくは精霊とされているこの金色の粒子に指先で干渉し法則に従い並び替え、最後に呪文を唱えるこ

とにより、より強く起こそうとする現象を思念する。^{イメージ}「伝説の勇者の伝説」における魔力とはこの思念の力の事であり、この力が強いほど起きる現象が強く大きくなる。この金の粒子の並べ方は無限にあり、最初の並べ方の法則を変えるだけで全ての模様、記号、命令の意味が変わってくる。
そのために国ごとに起動方法・構成・術式などの全ての形式は全く違う。

これを使えないだろうか？

俺は五歳の誕生日から精霊が見えるようになり精霊魔術を使えるようになった。

火の精霊、風の精霊、水の精霊、土の精霊

こいつらを使い、「伝説の勇者の伝説」の魔法を使えるようにしようと思った。

まず、アニエスにも精霊を見えるようにしないといけない。

そこで、ノアの第5使徒「智」ワイズリーの力を使う事にした。

「智」の力は額に3つの眼（魔眼）を出し、相手の脳を覗くことが出来る能力を持つ。脳を覗く際はその人物の額にも自分と同じ魔眼の模様が浮かぶが、これがダメージを受けると自身もダメージを受ける。

俺はこの力を使い、通常の人間が精霊を視認するのに必要な脳の眠っている部分を起こす事をした。

起こす時にアニエスは苦しそうだったが、それもすぐに収まったみたいだ。

そして、「金色でキラキラでフワフワ」とした物を見れるようになったらしい。

それから、試しに稲光を使わした。
初めてだったのでかなり時間が掛かったが、

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

指で書いた魔法陣から雷撃が出た。

無事に使う事ができた。

アニエスは魔法が使えた事が信じられないようだ。

「う、う・・・そ？」

呆然と雷撃を放った方を見ていた。

俺も試しに使ってみると普通に使えた。

稲光の方がノアの「怒」よりも威力調整がしやすかった。

そして俺はある魔法をアニエスに教える事にした。

その魔法は、使用した者の脳の抑制を外し、身体能力を一時的に向上させる。

ただし、効果が切れると、体力を一気に消耗する、反動の大きい魔法でもある。だが、慣れない魔法を教えるより、慣れている体術の強化の方が今はいいと思った。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

時間が掛かったが何とか発動させる事ができた。

体が一気に軽くなった気がする。

普段、アテナと訓練する時の数倍の速さで動けた。

「よし！今日こそこの魔法を使ってアテナに勝つぞ！」

「おー！」

とアニエスと盛り上がり、意気揚々とアテナとの訓練に向かった。
向かったと言っても寝るだけだが。

結論から言えばまるでだめだった。

俺とアニエスはアテナと闘う直前に魔法を使った。

そして闘い始めたのだが、初めはアテナの動きが遅く感じた。
これならいける！

とアニエスと挟み撃ちにしたのだが、アテナのスピードが速くなり
だした。

そして俺達の速さよりも速くなりまた投げられた。

「いてゝ！くそ！これならいけると思っただけがなゝ」

俺は魔法の解けた後の疲労を感じながらアテナに言った。

「キュ」

アニエスは投げられたショックと疲労が一気に来たみたいで只今ダ
ウン中。

「いけるも何も、ただスピードが速くなっただけではないか。
それなら、こちらも速く動けばなんら問題ないのじゃ」

「あゝ、ちなみにアテナはどれくらいまで速くなれるんだ？」

「聞きたいのか？」

「やっぱり遠慮します」

アテナの自信満々の姿を見てたら絶対に勝てない事がわかった。

「それと魔法の発動までに時間が掛かり過ぎじゃ。本番だと発動させてる間にやられるぞ」

「ああ、だから発動させる訓練もしないとな」

それからはアテナとの格闘訓練の時に魔法の訓練もする事になった。実際に使うなら、出来るだけ速く魔法を放てる用にしなければならぬからだ。

アニエスに色々な魔法を教え、俺は他の魔術も使えるように訓練した。

アニエスは今は見習いではなく、しっかりと侍女の役割を果たして

いた。

後はたまに母さんに捕まり着せ替え人形にされている。
一回捕まったら半日程は逃げられないらしい。

大変だな。

朝は、起こしに来て朝の訓練をする。

昼飯を食い終わると俺は王族としての教養としてダンスや楽器をや
らされたりする。

さらに、この世界の魔法を教えられるが、俺はそれから逃げている。
使えもしない魔法を何で勉強しなければならない？

まあそのせいで俺はジョゼフ兄以上の落ちこぼれと言われている。

ジョゼフ兄はまだ魔法が起きなくても爆発はしていた。

しかし、俺は爆発すらしない。いくらルーンを唱えても魔法は発動
しない。

だから貴族からは落ちこぼれと言われている。

ついでに言えば家族は何も言わない。

ジョゼフ兄は約束通りに俺の味方でいてくれた。

シャルル兄からは気にするなと言われた。

父さんと母さんは相変わらずに愛してくれている。

みんな良い人だな、と強く思う。

まあ、そんな感じで魔法の授業からはエスケープしている。
ダンスや楽器の練習も気が乗らない時はエスケープ！

と、そこでアニエスの登場だ！

アニエスは俺の侍女として俺が逃げ出した時に俺を探すのだ。

なかなか勘が良く俺が隠れている所を見つけたす。

俺はそんなアニエスからもエスケープ！
と追いかけてここが始まる。

そしてこの頃は逃げ切れなくなっていた。

アニエスは俺の隠れる所を理解しだし効率良く探すようになった。
それに加えてみんながアニエス側だ。

父さんと母さんは俺に勉強させたいらしく、一度両親の所に逃げる
とアニエスの所まで連行された。

シャルル兄はどうも両親に言われているみたいで俺が行くと勉強が
どれだけ大事かと1時間も説明された後にアニエスに引き渡された。

城の警備の人達は逃げている俺を見つけると追いかけてくる。
聞いた話では、エスケープ中の俺を捕まると賞金が出るらしい。

そして唯一の味方であるジョゼフ兄は始めの頃は心良く匿ってくれ
たが、連日遊びに行くと少しは勉強しろと言われた。
それだけならまだしも、なんと回りにいる警備の人達を呼び集め俺
の事を教えた。

慌てて逃げ出すが流石に敵が多すぎる。

特に給料の少ない若い奴らが賞金目当てに俺を捕まえようと必死だ。
俺は風の精霊の力をかり全方位からの攻撃に備える。

3人の警備の人達に正面から突っ込み、ギリギリで横に跳び回避し、開いた隙間に入り込み抜ける。

後ろから飛びかかってくるのを見ずに横に避ける。
風の精霊の力を借りているのでまるわかりだ。

そのまま逃げ切れると思った時前には敵が10人程、後ろからはさっきの3人とさらに5人。

ああ、無理だ。

そして俺は程無く捕まり賞金を貰えると笑顔満面の警備の人達に連れて行かれた。

後ろからジョゼフ兄の笑い声が聞こえる。

絶対に勉強させたいとかではなく俺の逃げ惑う姿が見ただけだったはずだ！

くそ！覚えてろー！

俺は負け惜しみを心の中で叫びながら勉強部屋へと連れて行かれた。

第7話（後書き）

アニメスが魔法を使えるようになりました！

おかしい所があると思いますが、ご都合主義という事でこれからも
よろしくお願いします。

第8話

どうも！ティキです！

只今街に来ております！

そして目の前には偉そうな貴族とその護衛が4人。

そして俺の後ろには子供が1人と今にも連れていかれそうな子が1人。

ハア。

めんどくさいな。

何でこんなになっただんだっけ？

相変わらず勉強をエスケープ中の俺。

しかし、この頃はエスケープしてもすぐに捕まる。

昼になると俺が逃げてないか、と若い警備の奴らが目を光らせてる。
正直逃げ場が無い。

くそ！金の亡者共め！

そんなに酒が飲みたいか！？

さて、どうしようかな？

窓から外を見る。

そこには城下町が広がり賑わっていた。

そうだ！町へ行こう！

と言う訳で俺は今、城門前の茂みに隠れています。

目の前には立派な城門が閉じており、警備の兵士が何人かいる。

ここからは無理だな。

城門が閉まつてるし、開くのは馬車が通る時ぐらいで厳しいチエックを受けている。

馬車が通ればすぐに門が閉じられ通れる気がしない。

仕方ないので城壁を辿って誰もいない所まで来た。

フハハハハハー！

この俺を城壁ごとときで止められるものかー！

頭の中で悪人が高笑いしていた。

まず、風の精霊の力を借り回りに人がいないのを確認する。
城壁の向こうも見たが誰もいない。

そして俺は力を使う。
使う力はノアの「快樂」の力。そして俺は城壁をすり抜けた。
回りには誰も居ない。
俺は町まで走って行った。

町の前まで来たのはいいがどうしような？

俺の格好は見ただけで良いものだと分かる服に青髪青眼。

やっぱりヤバイよな？

ついでに言えば金も無い。

詰まりは来ても何も出来ない。

ハァ。どうしよう？

とりあえず髪と眼の色を変えるか。

俺は第12使徒「色」ラストルの力を使う。

能力は「万物への変身」。人や生物に化けることができる。また手を鞭のような形状にしたり、全身を液体状にする事も可能なのだ。

ただな、これって姿変えた後、元に戻る時は自分の姿を上手く想像をしなきゃいけない。

うっかり戻りきれずに知り合いとかに会ったら面倒な事になるんだよな。

髪と眼の色をとりあえず黒色に変えておく。
これだけなら直ぐに戻せるだろ。

そして俺は町の中に入って行つた。

金のあては一応はある。
まずは目的の場所を探さなきゃな。

やっと見つけた！
この町広すぎ！
それに汚いし！
表の道はまだきれいだったけど裏道入ったら普通にゴミは捨ててる
し糞尿はあるし！
もう少しきれいにしろよな。

まあ良いや。
とりあえず入ろ。

俺は扉を押して中に入った。

すると中から酒の匂いがしてくる。見てみると昼間っから酒を飲んで酔っ払てる奴がいる。

若い女の子達がカウンターと客のテーブルを行ったり来たりして忙しそうだ。

カウンターにはしっかりしたお姉さんがいて料理や酒などを出していた。

そう、俺が来た所は酒場！

初めて来る店だが繁盛しているようだ。

俺は辺りを見回し目的の者達を探す。

いた！

酒場の奥の方でやっているようだ。

傭兵らしき格好の奴らがカードをしている。

俺はその近くまで行く。

「なあ、ちよつといいか？」

「ああ？なんだ？ここはお前みたいなガキが来るところじゃあねーぞ？」

「俺も混ぜてくれないか？」

「・・・金はあるのか？」

「いや、無い」

「んじゃ、帰りな！したかったら金を持ってこい！」

「なあ、俺のこの服を賭け金に出来ないか？」

俺は自分の着ている服を相手に良く見えるようにした。

「あ？服？・・・確かに上物だがこんな服があるなら良いとこの坊ちゃんだろ？金ぐらい用意出来ねーのか？」

「色々と訳ありでね」

「まあいい。じゃあ、こっちにきな」

俺は椅子に座らされカードを配られた。

そう、俺の金のあてとは賭博だ。
酒場に来たのはこういう所には賭けをして遊んでる奴がいると思っ
たからだ。

回りの奴らはカモが来た！みたいな顔をしている。

さーて、やりますか。

「フルハウスだ！」

「ストレートフラッシュです」

「「「なにー！！」」」

俺の前には今大金が積まれている。

最初は服を賭けていた俺だが、今では相手が服を賭けている。

大人の意地だろうか？

やめたらいいのに。

「智」の力は脳を覗くには額に三つの魔眼を出さなければならない。

しかし、心の表面を読むだけなら出さなくてもできる。

詰まりは相手の手札がまるわかりなのだ。

それに前世では父さんに遊びでカードでのイカサマの仕方を教えて貰った。

それを使えば簡単だ。

怪しまれない程度に何度かに一回わざと負けている。

転生してからもアテナやアニエスを相手にしている。

アテナはなかなか手強いがアニエスはな〜・・・

単純過ぎて簡単に勝てるんだよ。

終いには泣き出してもうしない！て言うんだけどな。
なんだかんだ言っつてやっぱ一緒にカードをするな。
とりあえずアニメスにはイカサマは使わないようにしよう。

「わははは、凄いなお前。名前はなんてんだ？」

最初に話かけた奴に話かけられた。

「テキッて言います」

「俺はラッハって言うんだ。よろしくな」

「ああ、よろしく」

「ところで何でこんな所来たんだ？」

良い所の坊ちゃんならこんな所来なくても金ぐらいあるだろ？」

「ちよつと色々あつてね。町まで来たのはいいけど金を忘れてな。
ちよと儲けられる所を探してたらここについたんだ」

「ふーん、これからどうするんだ？」

「町を見てまわるよ。初めて来たしな」

「そうか。気つけろよ」

「ああ」

俺は儲けた金の4分の3だけ袋に詰めて席を立った。

「残りの金で酒でも飲んでくれ。俺はこれだけあれば十分だ」

「いいのか？かなりなあるぞ？」

「ああ、構わないよ」

「そうか、悪いな。またこい！その時は俺が奢ってやるよ！」

「ああ、またくるよ」

俺はラッハに挨拶をして酒場をでた。

俺は酒場を出た後は表道を歩いて出店を見て回った。
色々な物が売ってあり見ているだけでも楽しかった。

そして、マジックアイテムばかりを売っている店があった。

マジックアイテムと言ってもランプ等の日用品だけだが。

そして、その中にメガネがあった。

大きな分厚いレンズのびん底みたいなメガネ。

しかし、それだけが他のマジックアイテムよりも数倍の値段がしていた。

「なあ、おじさん。何でこのメガネだけこんな高いんだ？」

「うん？ああ、それはフェイスチェンジの魔法が掛かってるからだよ。スクウェアクラスの魔法が掛かってるから高いんだよ」

「へー」

これなら「色」の力を使わなくとも大丈夫なんじゃね？

「おじさん。これくれ」

「かなり高いぞ？」

「大丈夫、ちゃんとあるから」

俺は袋から必要な分を取り出してメガネを買った。

「毎度あり」

俺は早速、裏道に入り髪の色を戻す。

そしてメガネを掛けた。

髪はボサボサになり色も勝手に黒になった。

その姿は D・gray・man のティキの孤児の時の顔を幼くした
感じた。

これ、良いな。これならメガネ外すだけで元に戻るからな。

俺がメガネを掛けていると表の方が騒がしくなってきた。

人が集まり何が起きているのか分からない。

俺はメガネを掛けたまま騒ぎの方に向かった。

騒ぎの中心では貴族とその護衛が4人。

そして子供が2人いた。

「何があつたんですか？」

俺は直ぐ近くにいる人に聞いてみた。

「子供が貴族様にぶつかつたんだよ。
その拍子に貴族様が持っていた物を落としてしまつてな。
あれは何されるかわからんな」

「ふゝん」

と俺は貴族の足元を見た。
びんに入つた液体が飛び散っている。

「これは貴様ら平民が買えるような代物では無いぞ！どつするつもりだ！？」

「申し訳ありません！貴族様！
必ず弁償いたしますのでどうかお許し下さい！」

俺より少し上ぐらいの女の子が貴族に頭を下げている。
後ろの子は俺より年下の子で女の子の後ろに隠れている。

「ふん！そんな事信じられるか！」

「何でもしますのでお願いします！」

「ならば来い！体で払え！」

「や、やめてください」

貴族が女の子を無理やり連れて行くとする。

おいおい、やりすぎだろ。

まだ10歳ぐらいの女の子だぞ？

何やらすきだよ！

「ねーちゃんを離せ！」

脅えていた男の子が姉のピンチに立ち上がった！
そして貴族に向かって行って・・・

護衛に吹っ飛ばされた。

「ふん！やれ！」

貴族が護衛に向かって言うと言いつと護衛は男の子に向かって殴り掛かった。

「やめてー！」

護衛の拳が男の子に当た・・・なかった。

俺は護衛が殴ろうとする時には人垣を抜けた。

そして風の精霊の力を借り男の子の前まで行く。

護衛の拳を受け止めず、相手の力を使いそのまま背負い投げをして地面に叩きつけた。

回りのみんなは呆気に取られていた。

いきなり男の子が現れて護衛を投げたのだ。

しかも7歳ぐらいの子がだ。

「なんだ、貴様？貴族に逆らうか！？」

いち早く元に戻った貴族が叫んだ。

「いやいや、貴族様に逆らうなんて恐れ多い。ただ流石にやりすぎでしょ？小さな子どもに大の大人が殴りかかるなんて」

「貴様には関係なかつた！」

「いや、その子等は俺の知り合いでね。流石に見逃せんのだよ」

全くの嘘である。

初めて会った子だ。

ただ関係無いより有ると言った方が良いかな？と思っただけだ。

「ええい！お前らやってしまえ！」

貴様の号令で残りの護衛が一斉に掛かって来る。

「大人気なさすぎるだろ。あんたら」

と、言いつつも俺も相手に向かって走り出す。
そして一番前の奴が殴って来たのを右によけて脇腹を思いっきり蹴っ飛ばす。

護衛は左から回り込んで来た奴とぶつかり、悶絶している。

残りの護衛が右から回り込み後ろから殴り掛かって来た。

精霊とリンクしてるから死角は無いんだがな。

俺はこれを左に少し動き拳を避ける。そして相手の鳩尾を肘で打ち抜き、最初に投げ飛ばした奴にぶつける。

そして形だけの杖を懷から引き抜きエアハンマーを唱え、風の精霊をハンマーの用に蹴り飛ばされた奴に巻き込まれなんとか立ち上がった護衛にぶつけた。

「なっ!?!」

護衛をやられて絶句する貴族。

俺は貴族の方へと向かう。

「き、貴様! な、何が目的だ!?!」

俺はそれを見殺して進む。

「き、貴族に刃向かって行きて行けると思っなよ!」

無視して進む。

「そ、それ以上こっちにくるな！」

貴族は怯えて杖を抜き俺に向ける。

しかし、俺は無視して貴族の前まで行く。

そして懷に手を入れて袋を取り出す。

「わ、わかった！こやつらは見逃す！だ、だから許してくれ！」

必死になんとかしようとする貴族の前に袋を出し

「はい」

そのまま貴族に渡した。

「・・・へ？」

突然の事に貴族は気の抜けた声を出した。

「その瓶の液体の弁償代です。これでその子達は許してくれますよね？」

「あ、ああ」

戸惑いながら金を受け取った。

「足りませんか？」

「い、いや！十分だ！お、おい！いくぞ！」

貴族は護衛を引き連れてそのまま行ってしまった。

「「おー！」」

「すげーぞ！坊ちゃん！貴族様を追い返しちまうなんて！」

「格好良かったわ！」

回りの人に誉められながら俺は女の子の方に行き

「大丈夫？」

「へ？あ！はい！大丈夫です。」

「とりあえず付いて来て」

俺は女の子と男の子を連れて人の少ない所へと向かった。

「あの、ありがとうございます！ほらアルアも！」

「お兄ちゃん、ありがとうございます！」

「どういたしまして」

「あ、あの！本当にありがとうございます！貴族様！お金まで払って頂いて」

「いや、別に良いよ。」

あの金も賭けで手に入れた物だしね。
それより名前は？」

「あ！私はライラ、この子はアルアです！」

「そんな堅くならなくて良いよ。俺はティキ。まあよろしく」

「あ、はい！」

「よろしくティキ兄ちゃん！」

ライラは肩まである赤髪で俺よりも少し大きいぐらいの女の子。
恐らく9歳ぐらいで胸は平均的だと思う。

アルアは短い赤髪で背は俺より小さい。
恐らく5歳ぐらいだと思う。

「なあ。お前ら家はどこなんだ？
送って行くよ」

「そんな！助けて頂いてその上家まで送らせるなんて！」

「そんな気にしなくて良いから。それに俺ってここに来るの初めて
なんだよ。良かったら家までで良いからこの町案内してくれよ」

「は、はい！わかりました」

それから俺達はライラとアルアの家へと向かった。
向かう途中に色々と町を回り案内をもらった。
なかなか楽しい時間だった。

第8話（後書き）

久しぶりの投稿です。

えーと、主人公が使ったのは精霊魔術でゼロの使い魔の魔法とかではありません。

杖を持っていたのは力を使う時に何も無いと先住魔法と間違われるからです。

ただのカモフラージュです。

家族の前では魔法は使っていません。

何かの拍子にミスをしたらヤバい事になるからです。

護衛の連中が武器を使わなかったのは子どもだと思って油断した。

貴族がびびりまくっていたのは突然の事に考えが追いつかなかったから、と言う事にしといて下さい。

戦闘や会話等でもおかしい所があると思いますが、ご都合主義と言うことでこれからもよろしく願います。

第9話

こんにちは。

あれから2ヶ月ほどたちました。

あの後ライラとアルアを家までおくった。

家は商家で色々な所にコネがありガリアの王都リュティスでもなかなかの所らしい。

あれからもよく町に行く。

服も町人の子供に見えるくらいのを買い、町に行く時はその服を着てマジックアイテムのメガネを付けた格好で行く。

ライラとアルアともよく遊ぶ。

初めはライラは俺が魔法を使ったのを見て貴族だと思い、敬語を使い堅い感じだったがそれをやめさせた。

城では大人にも敬語を使われていて、普通に喋れるのは家族しかいなかった。

元々俺は敬語など好きでは無い。

だから初めての友達に敬語を使われるのは嫌だった。（アニエスは友達ではなく家族として見ているので初めてはライラとアルアである）

ライラは初めは遠慮がちだったが、ずっと遊んでいる内に敬語も使わないようになった。

アルアは最初から普通に話していたが。

アルアの夢は騎士に成ることらしい。

普通は商人になるのは男。

しかしアルアは、俺がアルア達を助けた時かつこよかったらしく自

分も強くなるりやがては騎士になるんだと頑張っている。

アルア達の両親は男のアルアに店を継がたいらしく、アルアに勉強を教えようとしたみたいだが、アルアはどうしても騎士に成りたいと言い勉強しなかった。

そこでライラがアルアの代わりに店を継ぐからアルアを騎士にしてやってくれと両親に頼み、両親も折れて納得した。

両親との約束もありライラの夢は親の様に立派な商人に成ることらしく、文字や計算の勉強していた。

俺もよく勉強を教えてやった。

この世界では筆算等は使われないらしく計算を簡単にする方法を教えると計算が面倒な時に簡単にできるようになったと喜んでいた。

アルアは騎士に成るためにと、俺に鍛えてくれと言ってきた。

俺は毎日アテナとアニスとで訓練をしている。

1日の内に夢の中での訓練を入れて半日程もしている。まあその内には魔術の訓練も入っているが。

だからという事もあり教えるのは断った。

正直もう十分だ。

しかしアルアはしつこく頼みに来る。

そこで俺はある事を考えた。

俺はアルアを連れて酒場へと向かった。

酒場につき中に入ると酒の匂いがする。

まだ昼間なんだがお構いなしに飲む奴らがいる。
その中にラツハがいた。

俺はアルアを連れてラツハの所に行った。

「ラツハ。久しぶりだな。」

「ん？おお！ティキじゃないか！久しぶりだな！」

ラツハは酒を飲みながら返事をした。

「昼間っから酒なんか飲んでたら体に悪いぞ」

「ああ？気にするなよそんな事！
一仕事を終わらして帰ってきたんだ！
酒を飲んでパアとしないと！」

俺はラツハの仕事に興味を持ち聞いてみた。

「仕事って何してきたんだ？」

「コボルトの討伐さ。」

西の方の村から依頼が来てな。

時々コボルトが現れて人を襲うから退治してくれってな」

「ふーん」

討伐か。

俺は基本的にアテナとアニエスとしか訓練しないからな。後は逃げて出すときの衛兵相手ぐらいしかない。一度くらい実戦しとかないとな。

とそこで気がついた。

アルアの目がこれ以上無いくらいに光り輝いているのに。

「ねー！おじさん！俺も連れてってよ！」

「あ？」

ラッハは不思議そうにアルアを見てから

「誰だ？こいつ？」

と聞いてきた。

「俺の友達何だけどね、騎士に成りたいから訓練をしてくれ！って

頼まれてな。

どうせなら専門家にとってもって連れてきたんだ」

「ふーん。なあ坊主、騎士に成るなんてそう簡単じゃあねーぞ。騎士なるのは大概は魔法が使える貴族達だ。

その中で平民が騎士に成るなんてまずできねーぞ？」

「それでもなる！」

「と言う訳何だが見てやってくれないか？

この町にいる時だけでいい。

勿論、報酬もだすよ」

「・・・ハア。わかったよ。

その代わりちゃんと金は払えよ！」

「ああ」

何とか許可は得た。

アルアは訓練をしてくれると分かりはしゃいでいた。

「そうだ、ラッハ。依頼を受けるにはどうしたらいいんだ？」

「ん？依頼？」

「討伐とかの依頼だよ。」

「どんながあるか見てみたい。」

「それならカウンターの方に行きな。」

「カウンターの横にあるボードに色々張ってある。」

「依頼を受ける時は依頼書をカウンターのねーちゃんに渡せばいい」

「ありがとう。」

「じゃあアルアを頼むよ」

「ああ、わかってるよ！」

「ラッハは速く速くとはしゃいぐアルアを追いかけて店の外に向かった。」

「俺は言われた通りにボードを見た。」

「そこにはコボルトやオーク鬼等の討伐から仕事の手伝い、更にはお使いの依頼等が張ってあった。」

「俺はそれからオーク鬼の討伐を取りカウンターの女性の所に向かった。」

「この頃ティキが捕まらないと思ってたけどまさか城を抜け出していたなんて」

俺は依頼を受けた次の日、アニエスを連れて城を抜け出していた。依頼を受ける時は大変だった。

子供がオーク鬼の討伐依頼を受けさせる訳にはいかないとカウンターの姉ちゃんに言われた。

俺はただの使いで討伐するのは他にいると言ってもダメだった。

仕方なく俺は一度酒場から出て裏道に入った。

そしてノアの「色」の力を使い大人の姿になった。ばれないようにメガネを外し髪と眼の色を金色にしておく。

そして酒場に戻りオーク鬼の討伐依頼を受けた。

その時に子供に依頼を受けさせるな、とカウンターの姉ちゃんに怒られた。

「別にいいだろ、たまには息抜きぐらい」

「たまにならな！この2ヶ月間ずっと遊んでいたじゃないか！」

「朝と晩はちゃんとしてるだろ」

俺は怒っているアニエスを宥めておく。

今俺達は風の精霊魔術で飛んでいる。

アニエスは飛べないので俺が手を繋いで飛ばしている。

「所でどこに向かってるんだ？」

「北の方の森でオーク鬼がでるらしくてね、その討伐に向かって

るんだ。訓練ついでに金も手に入れる素晴らしい考えだろ」

「オーク鬼！？そんな事聞いてない！」

「今初めて言っただもん」

「そんな大事な事はもっと早く言えー！」

と言っている間に目的地についた。

俺は風の精霊とリンクして森にいるオーク鬼の数を調べた。

ずっと風を使っているせいか風の探索は半径5リーグほど出来るようになった。

「あれ？」

「どうした？」

不機嫌なアニエスだが何かあったのかと聞いてくる。

「いやな、依頼書によればオーク鬼の数は15体前後になってるんだ」

「かなり多くないか？」

「んで、今風で調べてみたんだが」

「無視か？無視するのか？」

「どうやらその15体ほどの群れと違う群れが居るみたいだ」

「ちなみに何体？」

「30」

「帰ろう！私達じゃ無理だ！」

「大丈夫だよ、たぶん」

「たぶんで！？」

「まあとりあえず少ない方から行くか」

「話聞いている！？」

隣で「ごちゃごちゃ言ってるアニエスを連れて俺は少ない方の群れに向かった。」

「作戦はどうするんだ？」

「アニエスが前衛、俺が後衛」

「何か酷くないか!？」

「危なくなったら助けるよ？」

「何で疑問形!？そこは助ける!って宣言してよ!」

「まあとりあえずやってみな。ちゃんと助けるから」

「うー!」

色々と言いたそうなアニエスをオーク鬼の方に行かせる。
何だかんだ言ったが真面目にするか。

これでアニエスが怪我したら俺の責任だしな。

「ティキ。あいつら5体しかないよ?」

「あの奥で睡眠中。」

まずはあの見張りから殺るか」

アニエスを連れてオーク鬼の所に行くと洞窟の前で5体が見張りをしていた。
初めだし丁度いいだろ。

「じゃあ逝ってきて」

「字がちがうよ!!」

と言いつつもアテナはオーク鬼に向かった。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

アニエスは脳の抑制を外し身体能力を上げておく。

「求めるは焼原>>>紅蓮」

魔法陣を書きそこから炎弾を放ち2体をそして1体の右半身を焼いた。

「求めるは水雲>>>崩雨」

魔法陣から激流を放ち残り3体までめて呑み込む。

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

そして水浸しにした3体に向けて雷を放つ。

水に濡れていたオーク鬼達は雷に感電し息絶えた。

「ふう」

アニエスは5体を倒し警戒を解いた。

「テキキ！私一人で全部倒したぞ！」

と胸を張り俺に向けて言う。

「おおー、よくやった」

「・・・何だか余り誉められてる気がしない」

そりゃな。

「だっってお前の後ろにオーク鬼が大量にいるからな」

俺は洞窟の方、つまりアニエスの後ろに指を向けた。

「え？」

アニエスが振り向いた時には既に遅く1体のオーク鬼が棍棒をアニエスに向けて振り下ろしていた。

俺はオーク鬼がアニエスを叩き潰す前に風でその腕を切り落とした。そして

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

俺も身体能力を上げアニエスの隣まで走る。

一瞬の内にアニエスの横に行き炎術を使い黄金の炎でチリ一つ残さずに燃やした。

「アニエス、油断しすぎだ。気を抜く時は安全を確認してからだ」

まあ、俺の場合は風の精霊が知らせてくれるから油断してても大丈夫だがな。

オーク鬼達はさっきの戦闘で全員起きたらしく残り9体が出てきていた。

「アニエス、後は俺にやらして」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。いざという時は逃げるから」

「堂々と逃げるって言っちゃった！」

「三十六計逃げるに如かず！」

「カッコ良く言っても意味は変わらないよ！」

「まあ大丈夫だよ。こんな奴らに負ける程柔な訓練はしてないよ」

「わかった」

と言いアニエスは俺を後ろに下がった。

それと同時に前から2体のオーク鬼が走ってくる。

俺は地術を使いオーク鬼の下に穴を作った1体が落ちたがもう1体は寸前で気づきギリギリで避けたが、

「大人しく落ちとけ」

風で穴に叩き落とした。

次に水の精霊魔術を使いオーク鬼達の周りに水滴を大量に出す。そして懷から小さな石を取り出す。

あらかじめ用意していた物だ。

「――」と刻んだ小石。

それを放り投げる。

「汝は氷。汝は凍結。汝は停止。――されば止め、――」（イーサ）

――

呪文を唱え、その文字に意味をなさせる。

オーク鬼達の周りに浮かした水滴を凍らせ氷で囲む。

そこに

「求めるは殲虹>>>光燐」

魔法陣を書きそこから光線を放つ。

光線は真っ直ぐにオーク鬼の下に行く。

しかしオーク鬼達は危険を感じて本能からか光速の光燐を避けた。低い気温になり動きが鈍くなっていたがそれでも素早く避け魔法を放った俺に向かって走ってくる。

だが問題は無い。

光燐で狙ったのはオーク鬼達ではなくその後ろにある氷に向かって放った。

氷に当たった光燐は反射し方向を変える。

更に氷に当たり光燐は乱反射しだした。

オーク鬼達はただでさえ動きが鈍くなっているのに対応出来る訳なく四方八方から光の速さで迫る光燐に次々と貫かれていく。

やがて光燐の乱反射も収まりオークの鬼達が見えた。

「やりすぎたかな？」

「誰がどう見てもやりすぎだと思うよ」

俺の呟きにいつの間にか隣に来ていたアニエスが返す。

俺達の目の前には原型を留めていない死体が転がっていた。

胸や顔等を貫かれたり腕や足が吹き飛んでいたりと子供が見ればトラウマ物の光景が広がっている。

即席で考えたんだが思ったよりヤバいな。

「あゝ、アニエス。後片付けを頼む」

「いやいや!?!?」

ティキがやったんだからティキがやってよ!!!」

「えゝやだよ。こんなの片付けるなんて!」

「自分がやったんじゃない!責任とりなよ!」

俺とアニエスはどちらが後片付けをするからで話だったが結局俺が炎術で燃やすのだった。

第9話（後書き）

色々な魔法を使いました。

もしかしたら作者の勘違いとかがで魔法を間違えてたりするかもしれません。

間違いがあれば教えて下さい。

可能な限りで直します。

これからよろしくお願いします。

第10話

「じゃあ終わったし帰ろ！」

アニエスは俺に笑顔を向けて言ってくるが

「何言ってるんだ？」

まだもう1群れあるだろ？」

「依頼書の方は終わったじゃん！」

「俺達の目的は特訓で依頼はそのついで」

「うー！」

アニエスは言葉に詰まるたびに唸ってるな。
まあ、とりあえず行くか。

「ほらアニエス、行くぞ」

俺はアニエスを連れて風で飛び立った。

「うわーめんどくさ」

「これは凄いですね」

今俺達は森の上にいる。

そして俺達の下には30体のオーク鬼達がいる。

「あの中に入るんですか？」

「・・・そうなるな」

「・・・私は嫌だよ？」

「・・・俺もだよ」

俺達の下ではオーク鬼達が暴れていた。

ただ暴れるのではなく仲間同士で殴り合っている。

あんな中に入ったらあつと言つ間にボコボコにされるだろう。

「あつ、鼻血だした」

「あつちなんか頭から血流してるよ」

「何か腕折れてる奴もいるな」

「このまま同士打ちしそうな勢いだね」

「・・・何してんだろうな？あいつら」

「見たまんまに喧嘩じゃない？」

「いやいや、何かの宗教的な儀式かもしれないぞ。何か生け贄の肉みたいなもあるし。」

あるいは殴り合う事に快感を覚えているのかもしれないな。」

「そんな事に快感を覚える奴なんているの？」

「世の中にはバトルジャンキーと言われる人間もいるからな。オーク鬼がバトルジャンキーになっても不思議じゃない」

「余り関わりたくは無だね」

「全くだ」

俺達はしみじみとしながらオーク鬼達を眺めた。
早く終わらないかな？

「めんどうだからさっさと終わらすか」

「あの中に入るの？」

アニエスが信じられないものを見るような目で見てきた。

「入るか！」

俺の変わりに行かせるんだよ」

「誰を？」

「まあ見てろって」

俺は五芒星と壺取り出した。

「どこから出したの？」

「気にしたら負けだ」

そして呪文を唱える。

「I I I do strongly command thee,
by Berallanensis, Baldachienensis,
Paumachia, and Apologle Sedes; by
y the most Powerful Princes, Ge
nii, Lichide, and Ministers of t
he Tartarean Abode; and by the
Chief Prince of the Seat of Apo
logia in the Ninth Legion I I I」

「来たれ、グラシー・ボラス！
36の軍団を制する力強い伯爵！」

翼の生えた狼の魔神が喚起される。

「来たれ、マルバス！
36の軍団を統べる王！」

ライオンの魔神が喚起される。

「来たれ、エリゴール！
60軍団を治める堅固なる騎士！」

槍を携えて鎧を身に着けた騎士の魔神が現れる。

「どこから呼んだの？」

「この壺からだよ。この中に72の魔神が霊体ではいつてるんだ。
霊体だから大した事は出来ないから魔力を与えて実体をもたしてるんだ。」

この魔神達は昔、ソロモン王が使役していたらしい」

「そんなのどうやって手に入れたの!？」

「企業秘密だよ」

アテナに言ったら普通にくれたんだけどな。

それはそうとさつさとやるか。

「行け、グラーシャ・ボラス！

エリゴール！

マルバス！」

魔神達は3方向に別れてオーク鬼達に襲いかかった。

グラーシャ・ボラスは空を飛びながらオーク鬼達に遊撃を仕掛けてオーク鬼達を混乱させる。

マルバスとエリゴールは混乱している鬼達を確実に仕留めていく。

マルバスは自身の牙や爪で、エリゴールは手にした槍と拳で、噛み砕き、切り裂き、貫き、叩き潰して行った。

オーク鬼達も反撃しようとするが魔神達に勝てる訳が無く次々と殺されて行く。

30体いたオーク鬼達は10分と経たずに全滅させられた。

「かなり強いね、あの魔神達」

「まあな、戦闘に強い奴を選んだからな。でも実戦じゃあまり使えないかもな」

「どうして？」

「喚起するのに時間が掛かるだろ。喚起してる間に攻撃されたらどうしようも無い。喚起できればかなり強いんだがな」

「へ」

と話ながらオーク鬼達の死骸に近づいた。

「なにをするの？」

「首を持って依頼人の所行かないと金が貰えないだろ」

「なる程」

風でオーク鬼の首をいくつか切り落とし残りの死骸を炎術で全て燃やした。

「それじゃ行こっか」

風でオーク鬼の首と俺達を浮かし依頼人のいる村まで向かった。

俺達はオーク鬼の首を持って村の前まで来た。
俺はノアの「色」の力を使い酒場で依頼を受けた時の姿になっていた。

「テキって本当に何でもできるよね」

「何でもじゃ無いよ」

「それじゃ、何ができないの」

「魂造ったり？」

「なんで疑問系？」

「その他色々」

「逃げたね？」

「すいませーん、ちょっといいですか？」

俺はアニエスを無視して近くにいた人に声を掛けた。

「は、はい！何でしょう！？貴族様！？」

「村長の所まで連れてつてくれない？」

「は、はい！こちらです！」

俺達はやたらと緊張した村人に連れられ村長の家まで案内された。
村人に礼を言い、ノックをした。

「はいはい、どちら様？」

出て来たのは70歳ぐらいの爺さんが出て来た。

「オーク鬼の討伐依頼を受けた者だ」

「おお！よくいらしてくださった！大した持て成しも出来ませんが
どうぞ中へ！」

と言われ俺達は村長の家に入った。

「いやゝ来てくれて助かりましたよ。この村は森の資源を少しずつ貰って生計を立ててるんですが、その森にオーク鬼達が住みだして困ったんです。」

無理して森に入りオーク鬼の被害を受けた者もいまして」

と村長が困ったように言っていた。

「あゝ、そのオーク鬼達ですが、もう既に討伐して来ましたよ」

「・・・はい？」

いきなり来た男がオーク鬼を討伐した、と言っても信用ないはな。

「こちらが証拠です」

と中に入る際に置いて来たオーク鬼の首を持って来る。
村長は固まったままだ。

「ここに来たのは依頼の完了を知らせるためです、依頼書にサインしていただけますか？」

「・・・」

「あの村長さん？」

「・・・」

返事が無い。ただの屍のようだ。

じゃなくて！！

「村長さん！」

今度は村長さんを揺らしながら大声で呼び掛けた。

「・・・は！」

は、はい！サインですね？

申し訳ありません。少し我を失っていました。

しかしいつの間に討伐に向かわれたのですか？」

「今日の昼間に着いてね。

先にオーク鬼達を見つけたから討伐してきたんだ」

「そうでしたか。オーク鬼を討伐していただきありがとうございます」
「す」

と言うとサインをした依頼書を渡して来た。

俺はそれを受け取り、

「それでは俺達はこれで」

と言い村長の家を出た。村長の家を出てそのまま村の外まで出た。そして人がいない所で扉を造り、夢の世界へと入っていった。

夢の世界には二階建ての一軒家がある。

昔、アテナが

「お前達だけ家があるのはずるいのじゃ！
妾にも家を造るじゃ！」

と騒ぐので造ったのだ。

扉を開けリビングに行くと

「女神様がだらしない格好で漫画読むなよ」

ソファの上に寝転びながら漫画を読んでいるアテナがいた。

「どうしたのじゃ？こんな早くに来るのは珍しいの」

「特訓の帰り。オーク鬼の群れと戦って来たんだよ」

「ほとんどテイキが殺っちゃったけどね」

後から入ってきたアニメスがそう言いながらアテナの横に置いてある漫画を読み出した。
少女漫画のようだ。

「いつも思ってたがその漫画どこで手に入れてるんだ？」

「あなたの前世の世界じゃ」

「お前、金あるのかよ？」

「今はあなたを見張ると言う仕事じゃ。
いわば住み込みの家政婦のようなもの。
給料ぐらい出て当然じゃ」

神様の仕事に給料なんか出るんだ。
知らなかった。

「て言うか、俺を見張りに来てるのに勝手に買い物なんか行って良いのか？」

「住み込みの家政婦でも休みぐらい有るのじゃ。
妾にも買い物に行く時間くらい有っていいじゃろ」

早急から例えが人間くさいな。
神様ってみんなこんななのか？

「・・・ん？その言い方だと勝手に買い物に行ったように聞こえるんだが？」

「気のせいじゃ」

アテナの目が泳いでいる。

確実に無断で行ったな。

まあいいか。

ずっとこの世界に居ても飽きるだろうし、そのくらいは黙っとこ。

そんな事を考えながらアテナの方に向かった。

まだ晩飯まで時間がある。

せっかくだからアテナの漫画でも見て行こう。

机の上に置いてある本から適当に抜き取り椅子に座りながらページを開いた。

「○○さん！俺はあなたがずっと好きでした！」

夕日の差し込む教室には二人の影がある。

真剣な顔した男の子が女の子に向かって言った。

「初めて会った日からずっと気になってて、○○さんの顔みただけでドキドキして、こんな俺で良ければ付き合ってください！」

「嬉しい！私もよ！・・・君！」

女の子は顔を赤くしながら言った。

「○○さん！」

「・・・君！」

そして二人は抱き締め合いどちらからともなくキスをした。

長い間唇を当てていたがやがて舌を絡ませだした。

その行為は少しずつエスカレートして行きキスだけではおさまらずやがて服を脱ぎだしそして・・・

っ
ておい!!

何だよこれエロ漫画じゃん!
なんでこんながあるんだ!?

「アテナ!何だよこれ!?
何でエロ漫画がこんな所に有るんだよ!」

「ああ、それはこの間行つた同人誌のマーケットで買ったのじゃ」

「買ったのじゃ、じゃねえよ!
未成年が18禁なんか買つてくんない!」

「何言つとるのじゃ?
妾はもう数えるのも面倒なほど生きておるのじゃぞ?
18禁ごとき何の問題も無いのじゃ」

そうだった。
見た目が幼女にしか見えないから忘れてたけどこいつ何千何百万年
と生きてるんだった。
何か納得いかん。

そこでふとアニエスが目に入った。

俺達の話にも目もくれず顔を赤くしながら漫画を読んでいる。
俺は何となくアニメスの後ろから本を覗いて見た。

「いや！離して！あなたなんか大嫌い！」

女の子が男を押して離れようとするが男は離さない。

「じゃあ何で俺の所に来たんだ？」

「そ、それは・・・」

「本当は俺の事が好きなんだろう？」

「ち、違っわ！私はただ、」

「ただ、何？」

「ただ、あなたが悪事を働いてないか監視しに来たの！」

「へっ監視ねっ」

「そ、そうよ！私に何かしたらすぐに通報してやるんだから！」

「へへ、それじゃ通報されないように口を塞がなきゃな」

「つゞく！」

男は無理やり女の子にキスをしてしまった。

女の子は初めは抵抗したが少したつと恥ずかしくなっているが離れようとはしなくなった。

「俺の女になれよ」

男の行動は少しずつエスカレートして行くが女の子は抵抗せずにだんだんと男の行動を受け入れたしそして・・・

「だあ――！！！」

「わあー!？」

俺が大声を出すとアニエスはびっくりして悲鳴を上げた。
俺はその隙に本を回収しておく。

「ティキ！今良いとこだったのに！」

「アニエス！こんな本はお前にはまだ早い！」

「ティキだって読んでたじゃんか！」

「俺とお前は違うだろ！お前は5歳！俺は前世を入れて32だぞ！」

ちなみにアニエスには俺の前世等の事を教えておいた。
初めは驚いていたが少ししたら余り気にしなくなっていた。
何でか？と聞いたら

「ティキはティキでしょ？」

と言われた。

まあ本人が気にしないなら良いんだけどな。

「ティキだって体は7歳でしょ！」

「体じゃなくて精神年齢で考えるの！」

アニエスにそう言ってからアテナの方に向いた。

「アテナ！」

エロ漫画ばかりじゃ無くて少しはましな本は無いのか？」

「まし、と言うと？」

こちらを見ずに漫画を読みながら聞いてきた。

「例えばナ〇トだとかブ〇ーチだとかの少年漫画とか？」

「そういうのならその扉を開けた奥の本棚置き部屋にあるぞ」

俺とアニエスは言われた扉の前に行き扉を開けた。

「うわ」

「・・・何冊買ったんだよ」

俺達の前にはかなり広い部屋があり本棚が何十個とありその本全てにびっしりと本が置いてあった。

漫画だけではなく、ライトノベルや推理小説等の文庫本が大量にあ

った。

「アテナ、これ全部買ったのか？」

「当たり前じゃ」

「いつの間にこんなに買ったんだ？」

「うーん、あなたを転生させる前から集めておったからの。
何時からかは分からの」

唇に指を当て考えているアテナは本当に分からないようだ。

「そんなに面白いのか？」

「ああ！面白い！

人間は不思議じゃの！

文字や絵を書くだけで新しい世界をその本の中に造ってしまう！

妾はその世界全てを読んてしまいたいと思うほどじゃ！」

目をキラキラと輝かせながら熱心に語るアテナを見ているとその言葉が本気だということが分かる。

まあ女神だし、何百年とかけてでも読めるだろ。

寿命なんて無いみたいだし。

アニエスはアテナの話も聞かずに既に本を取りに行っていた。
本棚の前で何を読むか迷っているようだ。

久しぶりに俺も何か読むか。

昔に読んだ事のある本を読み返す為に俺も本棚に向かうのだった。

第10話（後書き）

こんにちは。

今回も読んで頂きありがとうございます。

今回は書いて内にアニエスが5歳のくせにませてる気がしたのですが、まあ良いかと思いきそのまま投稿しました。

この後も都合主義な事になると思いますがよろしくお願いします。

第11話（前書き）

結構な間を開けてしまいました。

テストも終わり少しだけのんびりとできます。

作中でテイキが言っている事は作者の考えなので実際とはかなり違うと思います。

それでもよかったらこれからもよろしくお願いします。

第11話

こんにちは。

10歳になったティキだ。

今はジョゼフ兄とチェスをしてる所だ。

チェスでジョゼフ兄には全然勝てない。

攻めても守っても裏を掻いて駒が取られていく。

そしてキングとナイト、ルーク、ポーンが2つほど残って後は全て取られた。

「これでチェックだな」

「ジョゼフ兄、強すぎだよ」

「お前にもまだ生き残る可能性はあるがな」

「マジで？」

俺はチェス盤を見るがどうすればいいか分からない。

俺の駒にくらべジョゼフ兄の駒はクイーンが2つもあるのだ。

プロモーション（昇格）と言ってポーンを一番奥の列まで持つて行く

くとクイーン、ビショップ、ルーク、ナイトの4つに成れるのだ。

俺はジョゼフ兄のキングを攻めていたらいつの間にかポーンが来ていてプロモーションされていた。

「この状況でどうしろと？」

クイーン2つに両側から少しずつ攻められていて正直逃げ場が無い。

「前に出して来たらいい。

取られそうに成ったらルークやナイトで庇いながらな」

確かにそれなら逃げ場が有る。有るんだが

「それじゃ勝てないよね？」

「ああ、勝てんな」

「じゃあ意味ないじゃん！」

「勝てないが引き分けに持って行く事は出来るだろう？」

俺のクイーンを一つでも取れたら可能性は有ると思うが」

ジョゼフ兄の駒はキングとクイーンが2つにナイトに一つ、ビシヨップが一つにポーンが2つ。

取られたら取り返すを繰り返し、何とかここまで戦力を削ってやった。確かにクイーンを取れば引き分けに持って行けそうだが、無理だろな。

ジョゼフ兄がそんなへまをするとは思わない。

くそ、こうなったらノアの「智」の力を使って思考を読んで・・・

何！同時に7つの手を考えているだ！？
貴様は某国99第皇帝ル〇ーシュか！？

まあそれでも俺はキングを前に出すんだけどな。

俺とアニエスはあれからもちよくちよくと特訓に行っている。

オーク鬼やコボルトなどの亜人の討伐を主にしている。報酬の2分の1をアニエスと俺で分けて4分の1を緊急時の為に貯金、残りの4分の1をアルアを鍛えているラツハへの報酬として渡している。

ラツハは最初は嫌がっていたが今では結構積極的にやってくれている。

アルアを鍛えるのが楽しく成ってきたらしい。

更に報酬で金まで貰えるからかなり喜んでいる。

アルアもなかなか強く成って来た。だがまだまだ弱い。

素人の大人相手ぐらいなら勝てる用になっただけが軽く訓練した大人にはまだ勝てない。

単純に力負けするらしい。まだ8歳だからな、力負けするのは仕方ない。

ライラは店で親の仕事の手伝いをしている。
主に物を売った時の会計をしているらしい。
計算も速くなっている

他には物を仕入れる時に付いて行って交渉の仕方や物の相場を教え

て貰っていると言っていた。

まだ大した事はやっていないがそれでも楽しいと言っている。

アニエスは7歳にしては侍女としてかなり優秀らしい。

たまに仕事をしている所を見かけるがテキパキと行動している。

主に俺の身の回りの世話で部屋の片づけや洗濯をしている。

たまにお使いに町へ行く事もある。

後は母さんの着せ替え人形になっていたりする。

1週間に1度は捕まるらしい。

一度捕まると3時間は離さない。

この頃はメイド達も加わり大変だと言っていた。

暇な時は夢の世界に行き本を読んでいるようだ。

少年漫画や少女漫画を主に読み小説なども読んでいた。

最近は相棒などの推理小説も気に行っているらしい。

アテナは相変わらずだな。

漫画の最新刊やまだ読んでいない漫画や小説を買ってくる。

他にランプなどのカードや、チェスやオセロ等のボードゲームを買ってきたりする。

この間は人生ゲームを買って来ていた。

これがなかなか面白い。

「な！？家が火事になった。30000\$払う、だと！？」

「子供が生まれる。みんなから20000\$貰う。

またかよ？

これで5人目だぞ」

「ヘラクレスオオカブトを見つける。
50000\$貰う、か。

また儲かったの〜」

上からアニエス、俺、アテナの順だ。

大概勝つのはアテナだな。

それでも負ける時は負ける。

「月に旅行に行く。120000\$払う、じゃと〜!?
おのれ、ゴール直前にこんな大金を払う事になるとは」

こんな感じに。

俺は地道に稼ぎ、大概は2位になるな。

だけど毎回子供が何人も出来る。

何でだろうな?

アニエスは色々と大変な目に合う。

大金が入ったと思ったら次には金を払うようになる。

大勝したと思ったら次は大敗する。

アニエスは優勝するか最下位になるかだ。

5分の3ぐらいの確率で大敗する。

5分の2ぐらいは大勝するんだけどな。

俺は勉強もするようになった。毎回逃げているとさすがに母さんに怒られた。

だから、魔法以外の勉強は受けるようにした。

行政や領地の治め方等の政治に関するもの、ダンスや乗馬、音楽等

もある。

それでも週2ぐらいで町に行く。

アルアやライラと遊んだり町を回ったりする。魔法はいくら試してもできなかった。

まず杖との契約ができない。

感覚的な物だと言われたがどうなれば契約になるのかわからん。

仕方ないので魔術や精霊魔術を使う時の力モフラージュに使うしかない。

せっかく両親がくれたんだ。大切にしよう。

ノアの力やその他魔術はほとんど使える用になった。

特にノアの第10・11使徒「絆」（ボンドム）の力が以外と使い勝手が良い。

能力は「実現」。

原作ではジャスデロとデビット、二人が同時同一の想像をした時、その想像を現実に変現する事が出来る力だ。

本来は二人必要な力だが、俺の中には全てのノアメモリーが入っている。

詰まりは俺1人で強く思い浮かべた物を実現する事ができる。

実現するにはその物をよく知っている必要がある。

そこでアテナが集めた漫画や小説が役にたった。

全てを実現出来る訳では無いが忘却欠片やとある魔術、レンタルマジカの魔術に必要な呪物等は簡単に造り出せる。

他の漫画や小説の物も造る事は出来るが簡単では無い。

漫画や小説を読み実現する物の効果等を

しっかりと知っていないなら出来ない。

このような事から夢の世界にある漫画や小説を読む事は俺の戦力アップの為にも必要な事になった。

「チェックメイトだな」

「ぐ・・・」

負けました」

「テキモなかなかよかったがな」

「ジョゼフ兄とシャルル兄には勝てる気がしないよ」

「まあな。昔は暇さえあればシャルルとチェスをしていたからな。まだ10歳のテキキに負けてられんよ」

一度ジョゼフ兄とシャルル兄がチェスをしているのを見た事がある。あれは怖かったな。

ジョゼフ兄もシャルル兄も笑顔なのに目が笑ってなかった。かなり本気でやっているのが分かる。

負けず嫌いと言うか負けられないと言う感じた。

おれは結局、大した事も出来ずに負けた。

クイーンに両端から攻められビショップとナイトで止めを刺された。

「そういえば最近はやんと勉強しているらしいな。どうしたんだ？」

「母さんに怒られたんだよ。」

いい加減に勉強しないと着せ替え人形にするわよ！って」

「ああ、あれか・・・」

「ジョゼフ兄も着せ替え人形に？」

「ん？ああ。シャルルもされていたぞ」

「シャルル兄も？どんな服着せられたの？」

「あまり思い出させないでくれ」

ジョゼフ兄が軽く、いやかなり暗くなっている。

「それよりも魔法の勉強はしてないそうだな？」

「ん？ああ、だって魔法使えないし」

「わからんぞ？もしかしたら急に使える用になるかもしれん。

何だったらシャルルに教えて貰うのもいい。

あいつは俺と違って魔法が上手いからな」

「ジョゼフ兄の魔法はどんな感じなの？」

「俺は何をしても爆発するんだよ。

フライやライト等のコモンマジックでもな」

原作のルイズと同じ状況か。

「何で爆発するか分からないの？」

「わからん。高度なメイジにも理解出来なかったらしい」

「ねえ、今度ジョゼフ兄の魔法見してよ」

「見ても何も楽しくないぞ？」

「別に楽しそうだから見るんじゃないよ。
ジョゼフ兄の魔法使う所を見てみたいだけ」

「ふむ、まあ別に構わんよ」

俺は精霊を見る。

たまにメイジが魔法を使う所を見るがどうも精霊が力を貸している
みたいだった。

ジョゼフ兄の魔法は多分、虚無の系統だと思う。
もしかしたら上手くアドバイスが出来るかもしれない。

「ティキはいつもどこに隠れているのだ？」

「どうしたの？急に？」

「いやなに。ティキはいつも上手いこと隠れるからな。参考までに聞いて置こうかなと思ってな」

「この頃は町に行ってるよ」

「町！？」

「ジョゼフ兄はかなり驚いたようだ。」

「まあ、王族の子が一人で歩きまわるなんて知られたら大騒ぎになるしな。」

「そ！町。」

「前は木の上に隠れたり図書室の本棚の裏に隠れる事も多かったんだけどね。」

「町なら一度出ちまえば帰るまで自由だから」

「お前一人で町に出て大丈夫なのか？」

「変装してるから」

「変装？」

「そ。この間メガネ持ってたでしょ。」

「あれにフェイスチェンジの魔法に掛けてね、メガネを掛けたらあら不思議！」

「顔が变つてるって事」

「フェイスチェンジと言ったらスクエアクラスの魔法だな。そんな物買う金があったのか？」

「ああ、酒場に行ったらカードをしている奴等がいてね。そこで稼いだんだ。」

「稼いだって賭博か？」

「うん」

ジョゼフ兄は呆然としている。

「・・・前から少し変わった奴だと思っていたがまさかここまでとはな。

町に行つてなにをしてるんだ？」

「んゝ、友達と遊んだり町を回ったり、酒場でカードしたり」

「酒場でカードはともかく友達か。
普通の貴族とかは平民とは付き合わないがな」

「貴族の奴等とかさ、平民平民で馬鹿にしてるけど、俺は平民でかなり大切だと思うんだけどな」

「ほう、どんな所がだ？」

ジョゼフ兄は面白そうに俺を見てくる。

「だいたいさ、どうして俺達は王族だ！とか貴族だ！って言えると思う」

「俺達が魔法を使えるメイジだからだろう？」

「じゃあ、魔法って絶対に必要な物？」

「・・・どういう事だ？」

多分、検討は付いてるんだろうな。

ジョゼフ兄は頭良いからな。

聞いたきたのは確認だろう。

「農作物を作るなら水をやって土に肥料を撒いて世話してやればいい。」

家を作るなら木を集めて造ればいい。

服を造るなら編み物でもすればいい。

家具を造るなら自分で組み立てたらいい。

人を殺すなら武器があればいい。

ほら、別に魔法なんて必要ないでしょ？」

「ああ、しかし魔法を使えばそれらは一人で簡単に出来る。魔法が無ければとてつもない時間と手間が掛かるだろう？」

ジョゼフ兄は俺に対して反論して来るが押し付けてくる訳では無い。反論して俺がどんな解答するかを見てるんだろう。

「確かにね。」

でも絶対に必要な訳じゃない。

それでも平民達が俺達を貴族だ！王族だ！って敬うのは俺達がただ怖いだけだからだよ。

昔は違っかったんだろうけね。

あんまり好き勝手やってると平民達が暴動起こすかもよ」

これにはジョゼフ兄も少し驚いたようだ。

「平民が暴動をか？」

「うん。」

だってさ、自分達を苦しめてる奴が好き勝手に暴れ回って遊び回ってして、そんで金が無くなったら税金上げて余計に苦しめられたら誰だって怒るでしょ。

何時も自分達を馬鹿にして暴力振るってしてるのに、いざとなった

「何もせずに見てるだけとか」

「うむ。確かにな・・・」

ただ恐怖しているだけならそれさえ乗り越えれば暴動が起きるのも分かる。

・・・お前は早急、昔は違うと言ったな。
それはどうしてだ？」

「これは俺も予想だけどね。
いきなり、
俺達は貴族だ！だから敬え！
何て言われても誰も従わないでしょ？」

「ああ」

「だからさ、最初はみんなが納得して貴族とかが出来たんだと思う」

「どういつ事だ？」

「最初に魔法を使っ たって言われてるのは始祖ブリミルだよね？」

「ああ、ブリミル教が出来るぐらいだな。
・・・お前はブリミル教信者なのか？」

ジョゼフ兄が確認するように聞いてくる。

「まさか！？確かにブリミルは凄いと思うけどね。

ブリミル様ブリミル様って言う気はないよ。

どんなに凄くても既に死んでるんだ。

ブリミルを見習って頑張ろう！ぐらいなら良いけどね。

死人に何時までもしがみついたって、良いことや奇跡なんて起きないよ。

奇跡を起こそうとするなら、起こすだけの努力をしなきゃ駄目だよ」

それにいつも女神様に会ってるしな。

見たことも無い人に祈るぐらいならアテナに頼む方がずっと効果的だと思うよ。

「・・・お前は凄いな。そんな事まで考えたのか」

目を見張りながらジョゼフ兄がこちらを見てくる。

「そんな事より続き。

ブリミルは魔法を使って人を助けた。

sonでブリミルの子や弟子も人を助けたんだと思う。

そしてまたその子や弟子が人を助けた。

だから人々は彼らを貴族や王族として敬ったんだと思う。

自分達の為にしてくれたいるんだから自分達も彼らの為に何かしよう。

そう考えて物を送るようになったんじゃないかな？」

「それは詰まり貴族が平民を助けてその礼に平民が貴族に物を贈ったと言うことか」

「うん。それなら貴族ができたのも分かるでしょ」

力の有る者が力の無い者を助ける。
力の無い者が力の有る者を支える。
そうすればみんな平和に生きて行ける。

「何時の間にか貴族は偉い！
俺たちを敬え！って成っちゃたみたいだけどね」

「貴族が力を振りかざせば平民は従うしかないからな」

「平民がいなきゃもつと大変だよ。
服とか飯とか洗濯とか全部平民がやってるんだから」

「確かにな。俺はろくに飯なんかつくれんぞ」

「俺も無理。服とか作り方なんかわからないよ」

「ああ。確かに平民は大切だな」

意外と物解りがいいな。
貴族なんかは平民を蔑ろにしてはっかだもん。
町に行ったら貴族は踏ん返り返ってはっか。

「ジョゼフ兄は平民がどうだ！とかってあんまり言は無いよね」

「ああ、有能な者なら貴族だろうが平民だろうが関係無いな」

ふん

「・・・たぶん次の王になるのはジョゼフ兄だろうね」

「ん？俺が？」

「・・・俺よりもシャルルの方が魔法も上だしあいつの方が人気が有るだろう」

「王に魔法なんて必要ないよ。」

人気はシャルル兄の方が上でもジョゼフ兄の方が人の使い方が上手いよ。

それはシャルル兄も良く理解してるよ。

ね！シャルル兄！！」

俺は大声を出して外にいるシャルル兄に呼びかけた。

ジョゼフ兄も外のシャルル兄もびっくりしてるようだ。

シャルル兄は俺とジョゼフ兄が話だしてしばらくしてから扉の向こうにいた。

俺は風の精霊が教えてくれたので気づいていた。

少しためらう感じがしたがシャルル兄は入ってきた。

第12話

「よく気がついたね。」

「ちょっと本気で隠れてたのに」

「うん？あまり気にしないで」

「それで？話しの続きをしてもらっていいかな？」

シャルル兄が聞いてくる。

「魔法や人気じゃ王に成れないって事？」

「ああ、興味深いね」

「魔法なんか使えなくても王には関係ないでしょ。」

「どんなに魔法が強くて王が負けたら国は終わりだよ」

「確かにね。」

でも魔法が強い方が王も負けない。

みんなも魔法が強い人に付いて行くとしよう」

「王が戦う必要が有る時点でその国は長くは持たないよ」

「なら人気は？」

「人気があれば人が付いて行くだろ」

「人が付いてきてもそれを使えないとダメでしょ。」

「有能な人間が付いてきても使え無かったら宝の持ち腐れだよ」

「それは僕にはできないのかい？」

「シャルル兄も人よりはできるよ。

でもジョゼフ兄よりはできないでしょ。

人を使う事についてはシャルル兄よりジョゼフ兄の方が上だよ。

それを分かってるからシャルル兄は色々と根回しをしてるんだよ。」

「・・・なんの事だい？」

「シャルル兄がしてる根回しだよ。

いろいろな貴族に声を掛けてるでしょ。」

「・・・どう言うことだ？」

ジョゼフ兄が怪訝そうに聞いてくる。

「簡単なことだよ。

シャルル兄は王に成るために貴族達に根回ししてるんだよ。
いろいろと裏金とか使ってるね。」

「・・・」

「・・・シャルル？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

シャルル兄は黙ったままだ。

ジョゼフ兄はシャルル兄の答えを待っている。
何となく俺も黙っていた。

「・・・僕は兄さんに勝ちたかったんだ」

「勝つ？お前は俺よりも魔法も人気も上だろ？」

「・・・テイキの言う通り魔法は僕の方が上だ。
でも逆に言えば魔法だけなんだ」

「・・・」

「・・・人気なんて大したことなんてないんだ。
人気の有っても他のことは何一つ兄さんには勝てない」

「・・・みんなは兄さんの事を無能だっけって言うけどそんなことない。
むしろ僕の方が無能だ。人を使うのも作戦を考えるのも兄さんの方が上だ」

「・・・」

「・・・僕はずっと兄さんに勝ちたいと思ってたんだ。
それで僕は王に成りたいと思ったんだ。

王に成れば兄さんに勝ったんだと思えると。

父さんにも母さんにも貴族にも国民にもすべての人に僕の方が優秀
だと認めさせた事になるから。

だから貴族達に愛想振りまいて金を渡して僕が王になれるように手
を回してたんだ」

「・・・」

「・・・」

シャルル兄は言いたい事はすべて言ったのか黙り込んだ。

「・・・俺はな、ずっとお前に嫉妬していたんだ。

どんなにやっても使えない魔法をお前は簡単にしてしまった。それが羨ましかった。

お前には勝てないと思い込んでいた」

「・・・それは違うよ。

兄さんは僕よりもずっと凄い人間だ。

僕はそんな兄さんに勝ちたいと思っていた。

それで兄さんが魔法を使えないのを見てチャンスだと思った。

これなら兄さんに勝てるんじゃないかと思ったんだ。

だから隠れて努力したんだ。

僕が魔法を使えるようになっていっても兄さんが魔法が使えないのをみて安堵してたんだ。

兄さんが苦しんでいるの知っていたのに何もしなかった。

僕は魔法以外にも勝てていない」

シャルル兄は黙りこんだ。

ジョゼフ兄も何か考えているのか黙ったままだ。

俺は黙ったま見ていただけだ。

「・・・そうか。

俺はシャルルに勝っていたのだな。

・・・シャルル、お前は悔しかったのか？」

「・・・うん」

「ならばいい。」

王にはお前がなれ」

「え!？」

シャルル兄は驚いて聞き返した。

俺もびつくりしてジョゼフ兄を見た。

「俺は王には向かない。」

どちらかと言えば大臣とか参謀の方が向いているんだ」

「でも・・・」

「確かに俺には王の器はあるのかもしれない。」

しかし、俺は性格が向いていない。

俺が王になっても国を良くする自信は無い。

シャルル、お前は俺よりも王の器は小さいのかもしれない。

だが他の奴よりはかなり大きいだろう。

それに性格も向いているし人気もある。

お前の方が国を良く出来るだろう」

「・・・でもそれは、兄さんに慈悲で与えられたような物だ！

兄さんに勝てた訳じゃ無い！

兄さんは僕にこれから先の人生を敗北の中で生きろと言うのか!？」

「・・・わかった。

ならば勝負しよう」

「勝負？」

「な〜に、簡単な事だ。

お前が善き王になるか、それとも悪しき王になるか。
賭けようでは無いか。

お前が善き王になれず悪しき、無能な王になれば俺の勝ち。
そして、父上も母上も俺もティキも貴族も国民も、この国の誰もが
認める善き王になればお前の勝ちだ。

この国の全ての人間を審査員とした俺とお前のゲームだ」

「・・・ゲーム」

「もちろん、棄権しても良いぞ？

お前にこの国を良き国にする自信が無いならな」

「・・・わかった。

そのゲームに乗ろう！

僕はこの国の全ての人間が認める善き王になり、兄さん、あなたに
勝ちます！..」

「ふっ、そうではなくてはな。

ではお前が王になる、それでいいな？」

「ああ、僕は王になる。
だから兄さん、それにティキ、君たちの力を借りるよ」

「うん？」

俺も力を貸すのか？」

「そうだよ。」

僕は王になるんだ。

王に力を貸すのは家臣として当然だろう？」

「ふ、ふ、ふははー！

ああ、そうだな。

お前が王になれば俺は家臣になる。

力を貸すのは当然だな。

いいだろ。

俺はお前が善き王になるために力を貸そう」

ジョゼフ兄はおかしそうに笑っている。

シャルル兄も作り笑顔では無く、本心から笑っているみたいだ。

いや、めでたしめでたし、だね。

ん？そう言えば

「ねえ、シャルル兄。俺も働くの？」

「そうだよ。

僕に力を貸してくれ」

「あゝ、俺としては喰っちゃ寝て食っちゃ寝る、といった平和でんびりとした日々を過ごしたいんだけど？」

「そうか、たまには休暇も出してやろう」

たまに！？それってほとんど毎日働くって事！？

「あゝ、でもほら！

俺って特に特技とか無いし、俺よりも優秀な奴は一杯いるよ？」

「僕がしていた根回しや貴族に渡していた金の事を調べる力があるよね？」

「シャルルが部屋の前にいたのも気づいていたな？」

「調べればもつと色々有りそうだね？」

「確かに。」

「そう言えば城から抜け出して町に行っている、と言っていたな？」

「本当？」

「この城の警備を抜けて脱出するのは凄いね。」

「ああ、警備員から逃げるのも上手かったよね？」

「あの人数から逃げ延びるだけでも色々と使い道はあるかな」

「うん、貴族の屋敷に侵入して証拠を取ってくるのとか」

「いいな、それ。」

「今度やらしてみよう」

「何かとんでもない無く大変な事になってるきがする。」

「ジョゼフ兄もシャルル兄も笑顔だけど何か怖い。」

「あのく、やっぱり遠慮したいな」

「おお！そう言えば酒場でカードをしていると言っていたな。かなり儲かっているらしいじゃないか。」

「フェイスチェンジの魔法が掛かったメガネのマジックアイテムを買いえるくらいの」

「・・・それは本当に凄いね。」

きつとカジノとかに行けば金貨の詰まった袋を担いで帰るくらい儲けるんだろっね」

「今度、カジノに連れて行ってみるか？」

「いいね。」

楽しそうだ」

「しかし、こんな事が母上に知られてしまったら大変な事になるだろうな」

「だね。きつと1日着せ替え人形じゃ済まないね？」

「ああ。母上の事だ。」

そんな事をしているとしれば片時も離さないだろうな。
例えそれが風呂だろうと寝る時だろうと」

「10歳にしてマザコン。」

風呂も寝る時も一緒じゃなきゃ駄目。

何て噂が流れたら面白い事になりそうだね？」

ちつとも面白くねーよ！

「さて、テキキ？
僕に力を貸してくれるね？」

シャルル兄の笑顔が晴ればれとした物になっている。
だが目だけが、断ればどうなるか、分かるよね？と語り掛けてくる。
その横のジョゼフ兄は相変わらず黒い笑顔だ。
怖い。

「え、え」と。
精一杯頑張ります」

「うん、ありがとう」

結局負けてしまった。
これからどんな事になるのかな？
と思いながらも俺はとりあえず大変な事になる確信はあった。

あれから半年程たった。
あ後は父さんにシャルル兄が王になる事を言いに行った。
初めは訳が分からず困っているみたいだが事情を話すと納得してくれた。

シャルル兄が王になる事には俺達が話し合って決めたならそれでい

い、と言ってくれた。

母さんも特に反対が無いようだ。

三人で力を合わせて頑張るのよ。

と応援してくれている。

いきなり王が変わるのは大変だからまだしばらくは父さんが王をする事になっている。

王の仕事を少しずつシャルル兄にやらせて、王になれるためだ。

シャルル兄は父さんのそばで仕事を見ながら王の仕事を少しずつしだした。

ジョゼフ兄は色々な貴族の事を調べていた。

使える人間か使えない人間かを見ているらしい。

使えそうな人間には声を掛けている。

例えばそれが下級貴族でも使える人間は多いらしい。

そして俺は・・・

「シャルル兄ー！ー！！！」

ばーん！

と大きな音を出しながらシャルル兄の部屋に飛び込んだ。

「どうしたんだい？ ティキ？」

「どうしたじゃないよ！

なんだよあれ！俺の部屋に積んである書類の山！」

「ああ、あれかい？

あれはプレゼントだよ」

「あれが！？」

「ほら、テキ言ってたでしょ？

こんなに頑張ってるからなにか頂戴って。

だから「とっても素敵な良い物」をあげよう、って」

「そのどこがあの書類になるの！？」

「だから、

「とっても素敵なやりがいのある良い仕事」だよ」

「待つて！！俺そんなのいらなから休暇を頂戴！！

俺この頃全然休んでないよ！！」

「そうか、ならあの仕事が全て終わったら1日だけ休んでいいよ」

「あれ全部やって1日だけ!？」
机から天井に付きそんな書類のやまが3つも有ったよ!！」

「そうか。」

なら書類の山一つで1日休みをあげよう。
早く終わらせないとまた仕事を持っていくよ」

ほとんど休ませる気無いじゃん!!
くそ!こくなったら奥の手だ!

「ジョゼフ兄ー!!」

バーン!と今度はジョゼフ兄の部屋に入った。

「ん?どうした?」

「ジョゼフ兄!聞いてよ!
シャルル兄って酷いんだよ!
俺この頃全然休み無しで働いてるのにシャルル兄ってまだ仕事させようとするんだよ!
ジョゼフ兄もなんか言ってよ!」

「そうか。それは酷いな。シャルルにも言っておこう」

「ホント！？ありがとう！ジョゼフ兄！」

俺はジョゼフ兄の手を握って礼を言う。

これでしばらく休める。

何日ぶりだろうか、こんなに気分がいいのは。
久しぶりに遊びに行こう。

「ああ、そうだ。

ティキ。その書類を処理しておいてくれ」

「うん？いいよ」

あの仕事に比べたら書類の1枚や2枚ぐらい・・・

あれ？ジョゼフ兄の指さす所にまた天井に付きそうな書類の山が・・・

・

「・・・ジョゼフ兄？どの書類をしたら良いの？
なんかいっぱい有るんだけど？」

「うん？それ一つだぞ」

「だからどれ？」

「だからその書類の山一つだ」

「できるかーーーー！！！」

ただでさえ仕事の山が三つもあるんだ！
さらにもう一山書類仕事が増えたら死ぬわ！！

「ああ、3日後までには終わらせてくれ」

「ジョゼフ兄！

死ぬよ！まじで俺死んじゃうよ！」

「いやー、ティキがいてくれて助かるよ。
書類のほとんどをティキが処理してくれるからな」

「聞ってる！？ジョゼフ兄！？
俺死ぬよ？死んじゃうよ！？」

「大丈夫だ、ティキよ。
そんなに簡単に死にはせん。
10日ぐらい徹夜してもしにはせん」

「どんなけ俺をコキ使えば気が済むんだよ！」

「まあ頑張れよ。

急がないとまた仕事が増えるぞ？」

「まだ増やす気！？」

くそ！仕方ない！

さっさと仕事しに行くしかないか！
アニエスも巻き込んでやっちまうか！

ブルブル

「何か寒気が？」

「どうかしたの？アニエス？」

「あ、いえ、何も有りませんよ。奥様」

「それじゃ次はこれね」

「あのまだ有るんですか？」

「まだまだあるわよ」

山のように積まれた服がある。
まだ2時間程掛りそうだな。は~~~~。

第12話（後書き）

こんにちは。

結局シャルルが王になる事になりました。

ティキはこの頃働いてばかりです。

アニエスもティキに無理やり手伝わされます。

かなりご都合主義になってると思いますが、それでも読んでくれたら嬉しいです。

次もまた日が飛ぶと思いますがよろしくお願いします。

第13話

「あゝ、何これ？」

兄達に仕事をやらされ出して何年か経ち、もうすぐ15歳になるというある日。

相変わらずに何日も仕事をやらされているが大分落ち着いてきた。おかげで何日かごとに休みを貰えるようになっていた。休みの日は町に行っている。

ライラやアルア、ラツハに会いに行く。

ライラは17歳になっている。

商売の腕もなかなか良くある程度の取引は彼女に任される事になっているらしい。

近頃は自分の店を作り一人でどこまでやれるのか知りたい！と言っていた。

両親は反対しているらしく、手こずっているそうだ。

アルアは13歳になっている。

ラツハの仕事に付いて行き、今ではオーク鬼一体なら一人でも倒せるそうだ。

ラツハもアルアが使えるようになり楽になったと言っている。

ラツハの仕事は主に討伐系らしい。

ある程度のメンバーで隊を組み討伐に向かうそうだ。

狩るのはコボルトやオーク鬼、翼人等の亜人が多いらしい。

俺の主な仕事は書類仕事だがジョゼフ兄に何度か討伐依頼をやらされたりもした。

その度にアニエスを連れて討伐しに行った。

オーク鬼等を討伐しに行った。

ジョゼフ兄はただ実戦の空気を感じらす為だけのつもりだったらしい。

それを討伐したので驚いていた。

それから討伐しに行かされる事が多くなった。

毎日討伐しに行ったり書類仕事をしたりと忙しくなった。

めんどくさい。

そんなこんなで今一枚の書類を見ていた。

「あゝ、それか？

なんでも15歳になると領地を持たせようと言う事があったみたいだ」

「えゝめんどくさいなゝ」

「後、持つのを拒否したら死ぬまでコキ使ってやろうってジョゼフ様とシャルル様が話してたぞ」

「さゝ領地を持とう！アニエス！

今すぐ領地のことを聞いてきてくるから後たのむ」

「はいはい」

と俺は部屋を出て行った。

あの兄弟どれだけ俺をコキ使えば気が済むんだ？

しかし領地か。俺は領地経営なんてしらねえぞ。

とりあえず領地の事を知らないといけないしいろいろと用意しないといけないし大変だな。

「ジョゼフ兄！

どうゆう事だよ！領地を持たすって話！」

「ん？ああ、あれか。

お前もそろそろ領地を持っても良い頃だと思ってな」

「拒否権は？」

「有ると思うか？」

「有る！！きつとどこかに！！」

「ふむ？

母上が着せ替え人形を探してると言っていたな？

それに仕事の山もたくさんあるとシャルルが言っていたぞ」

「謹んでお受けいたします！」

まだ仕事の有るのか！？

一体どれだけ有るんだ？

母上もアニエスが有るんだからもう良いんじゃないか。

「それで？俺に何処の領地を持たす気なの？」

「ああ、ラグドリアン湖と言つのを知っているか？」

「あの大きな湖事なら有る程度は」

「あの辺りはトリステイン王国の国境になる。

今の所は戦争などにはならないだろうが万が一と言つ事がある。
その辺の貴族等に任せる事はできん」

「それでなんで俺？」

「お前は何かと役に立つからな。
お前に任せて置けば安心だ。

あの辺りの警備並びに領地の統治を全てお前に任す。
これはシャルルも承知した事だ」

「・・・なんか目茶苦茶めんどうな気がする」

「まあそう言っな。

しばらくは領地の統治に専念できるように書類仕事を減らすぞ」

「すぐさま領地に向かわしていただきますー！」

俺は敬礼をしてジョゼフ兄の部屋から出ようとし・・・

「まあ待て。

まだ用は終わって無いぞ」

「ん？まだなんか有るの？」

領地以外になんか有るのか？

「お前は１５歳の誕生日に正式に領主になる。それと同時にお前には公爵家になる。

ティキ・オルレアン・ド・ガリアになるな」

「公爵！？俺が！？」

なんでそんなのに成ってんだ！？

俺まだ１５の餓鬼だよ！？」

「お前なら何とかするだろ？」

いやいやいや！

大丈夫なのか！？俺！？

「それとお前の誕生日から１カ月後にお前の領地でパーティーが開かれる事になった」

「何の？」

「お前のお披露目会だ。

トリスティンやアルビオン、ゲルマニア、ロマリアから人が来る事になるだろう。

お前の領地でだからラグドリアン湖で良いんじゃないか」

「俺は領地とかまだ何にも知らないんだけど」

「だからお前に何人が付けてやる。
と言つてもパーティーまでだな」

パーティーまではその人達に頼れるのか。
後は連れて行く人を考えなきゃいけない。

「まあ後は頑張れ。」

明後日には言つてくれて良いぞ」

「わかつたよ」

と言われてとりあえずジョゼフ兄の部屋から出る。
そしてアニエスのいる自分の部屋に戻る。

とりあえずアニエスは連れて行くだろ。

「アニエス、明後日に俺の領地に行く事になったぞ」

「また急だな？」

「しゃねえだろ。」

今まで領地の事とか考えた事無かつたんだから。

まあしばらくは領地の方に専念して良いから書類仕事は無しだつて」

「それは良いけどね今有るのはどうするの？」

「・・・やるしかないな」

ハア。

今日一杯は掛かりそうだな。

「領地経営に必要な物じゃと？」

「うん。俺そんなの何も知らないからさ」

俺は今、夢の世界のアテナの家にいる。

アニエスと話合ったが全く案が浮かばなかった。
仕方無くアテナに聞いて見る事にした。

「領地の〜」

妾も詳しくは知らんの〜」

「何でも良いから言ってみて」

「ふむ。商人等はどうじゃ？」

「商人？」

「領地で作った作物や特産品等を買らないと行けないじゃろ。
だからお抱えの商人ぐらいいいた方がいいの」

「なるほど」

「あとは秘書や兵士等もいる方が良いの」

「ふん」

とりあえず秘書はアニエスだな。
商人や兵士は・・・

あいつらに声を掛けるか

「領地に付いて来てほしい？」

手帳になにか書いていたのをやめてこちらを見てくる。
赤い髪が特徴的な女の子、ライラ。

自分の力を知りたいと言っていたから上手く行くだろう。

「そう、オルレアン領って言うんだけどね。
ラグドリアン湖の近くだよ」

「領地つてあなた何処の貴族なの。」

貴族つて事は分かってたけどどこかは教えてくれないし。
いい加減教えてよ」

「ああ、多分信じないよ」

「いいから教えて」

あゝ今まで黙ってたけど言わなきゃいけないよな

「・・・王族」

「・・・なんて？」

「・・・王族」

「・・・」

「・・・」

「・・・病院行こうか？」

「信じてよ!!」

絶対に信じて無いな!!

正直に言っただから信じてよ!!

「・・・まあいいか。」

でも私、一人で商店を開くお金は無いわよ」

まあいいかって・・・
まあいいならいいか

「金なら出すよ。」

「でも・・・」

「なんだっ たら出世払いでいいよ」

「・・・」

それでも悩んでるみたいだ。
まあライラに任せたらいいか。

「・・・親に聞いてからでもいい？」

「いいよ。」

明日また来るからその時に教えて」

「うん、分かった。」

それじゃまた明日ね」

「うん、バイバイ」

と言うとライラは家に帰った。
さて次は・・・

「領地に付いて来てほしい？」

「うん」

筋肉質な男、ラッハに聞いていた。

ラッハに言えばアルアも来るだろうしラッハが信用している傭兵を連れて来てくれるように頼めば楽に仲間が手に入る。

「領地ってお前何処の坊ちゃんなんだよ？」

「えゝと信じないと思うよ」

「いいから言えよ」

「・・・王族」

「・・・なんて？」

「・・・王族」

「・・・」

「・・・」

「・・・病院行こうか？」

あれ？デジャブー？

「・・・まあいいか。
報酬はどうなるんだ」

まあいいのか？

ライラもそうだけどみんな気にしないものなのか？

「報酬としては1ヶ月15エキユー。」

仕事の戦果に伴ってボーナスをだすよ」

「・・・良いだろう。」

なかなか気に入った」

「その代り傭兵としてじゃなくて俺に仕える騎士になる事。
これが条件になるけどね」

「・・・良いのか。」

かなり好条件だぞ」

「いいよ。」

ちゃんと働いてくれたらね。

後ラツハが信用できる人にも声を掛けてほしい」

「分かった。」

人を集めてお前の領地まで行こう。

何処に行ったら良いんだ？」

「オルレアン領だよ。」

ラグドリアン湖の近くになると思うよ」

「ふゝん、わかった。」

人を集めるよ」

「頼んだよ〜」

俺はそう言っただけで酒場を出た。

これで有る程度は人が集まるだろう。

後は領地に行っただけで集めるか。

さうでと、頑張りますか

ん？

これは・・・

「アニエス。

この辺りの村を調べてくれ」

「うん？どうしたんだ？」

「いやな、この辺りの村の領主は変わって無いんだけどな、急に税をしっかりと収めてきたしな。

羽振りが良くなったんだ。

何かあったんだと思うから調べて来て」

「あゝはいはい。

行っただけですよ」

アニエスは部屋を出て行った。

もしも使える人間がいるなら雇いたいしな。

パーティーの準備もあるから俺はあまり屋敷を出られない。

しばらくはアニエスに頼むしかない。

半月は有るけど全部の国から客が来るからな。

早くから準備をして損は無い。

俺はジョゼフ兄から借りている人達から渡された書類を手に取りサインをいだした。

ライラは両親と話し合い許可を貰っていた。

有る程度下地ができるまでは大変だと領地を行ったり来たりを繰り返している。

有る程度上手く行ったら俺もなんか頼もうかな。

ラツハとアルアは仲間を25人ぐらい連れて来た。

今は領地を回り討伐をしてもらっている。

ラグドリアン湖の回りを主として回っている。

多くの貴族が来るので危険が無いようにして置かないと危ないからな。

できるだけ多くの所を回ってもらわないといけない。

あゝあ。

めんどくさいな。

第13話（後書き）

今回は少なめになりました。

次は新キャラを出そうと思います。
これからよろしくお願いします。

第14話

「もう我慢ならねー！」

俺は何が何でもあのクソ領主に殴り込みに行くぞー！」

「そうだー！」

俺は付いていくぞー！」

「俺も行くぞー！」

「俺もだー！」

「みんな落ち着け！」

村の集会所。

そこには村の者みんなが集まっていた。

みんなが騒ぐ中、村長・・・

僕の父さんがみんなを宥めていた。

「そんな事してもどうにも成らんだろう！」

「でも村長！これ以上我慢何て出来ませんよ！」

俺達在必死で作りに出した物、全部あいつに持ってかれたんだぜ！」

「そつだそつだ！」

「俺達はある奴の為に働いてるんじゃない！」

父さんが必死で宥めるがみんなは聞かず、逆に騒ぐ一方だ。

「みんな冷静になれ！」

俺達が貴族に逆らっても魔法を使われたら手も足もでないだろ！

もしかしたら腹いせにこの村を潰されるかもしれない！

妻や家族、恋人や友達を失いたくないだろ！！」

「じゃあ、どうしろって言っただよ！」

このまま領主の野郎が好き勝手しるのを黙って見てろって言つのかよ！」

「そうは言つて無い！」

ただ少し落ち着け！

対策を考えよう！」

みんな騒ぎ立てている。

領主にはもうみんなうんざりしてるんだ。

しばらくは落ち着かないだろう。

そんな時に僕はあの人と会った。これから先、一生仕える事になるあの人に・・・

コンコン

集会所の扉がノックされ少しずつ開かれて行く。

ダボダボのズボンにブカブカの服を着ていた。
黒髪黒眼。

ボサボサの髪にビン底メガネを付けた浮浪者のような格好。
初めて会ったあの方はそんな格好で堂々と入って来た。

突然の闖入者に流石のみんなも黙り込んだ。
そして・・・

「カズキ君いる～～～？」

あの人の第一声はそれだった。

僕はカズキ。

転生者だ。

僕は元々病弱で運動が苦手だった。

小学校の運動会、リレーは何時もビリだった。

大縄では引っかかり何時もみんなに迷惑を掛けた。ドッチボールやサッカー、野球でも邪魔になるだけだった。

だから僕は勉強をした。

運動は大した事無いが勉強はなかなかできた。

学校でも上位を取り高校にも進学校に合格した。

勉強勉強の毎日だったが息抜きに漫画を良く読んでいた。

特にバトル物をよく読む。

自分には出来ない動きで敵を倒す。

ただ懂れた。

自分には出来ない事はわかっている。

運動も碌に出来ない僕には出来ない。

もし僕が同じ目に合えば隅で震える事しか出来ない。

だから圧倒的な力で戦う者が羨ましかった。

そして僕は病に倒れた。

病弱だった僕は冬に風邪をこじらせ、段々と悪化し、喘息になった。慌てた親は病院に連れて行ってくれたが間に合わずにそのまま死んでしまった。

少しずつ意識が沈んで行き体から力が抜けた。

ボンヤリと自分が死ぬ事を理解していたが、何とも思わなかった。怖いとも苦しいとも思わずただ意識が漂っていただけ。

そして水の底に沈むように意識が無くなった。

そして気がつくとも真つ白な空間にいた。

何も無いただ真つ白な空間。

ただ自分が死んだ事だけは理解できた。

自分はどうかすればいいのか分からずに立ち尽くしていると・・・

「こんにちは」

と声を掛けられた。

そちらを見ると金髪金眼、腰に布を巻き頭に花冠をのせた若い男がいた。

そんな彼を見て僕は・・・

とりあえず見なかった事にして歩き出した。

男の反対側へと足を進めてまだ見ぬ明日へと・・・

「ってちよつとまて！
何処に行くんだ！？
帰って来い！！」

行く前に男に呼び止められた。
仕方無く男の方に振り返り・・・

「初めまして、変態さん」

笑って声を掛けた。

「変態！？俺が！？
何処から見ても神様だろ！！」

「何処から見ても半裸の変態です。」

「うそだ！？」

「ほんと」

何やら騒いでいるが改めて変態を見る。
ギリシャ神話に出てきそうな格好でイケメン。
しかし町中でこの格好だと間違いなく強面の警察官に肩を叩かれる。
性格のせいかもしれない感じる。

「まあそれはそれとしてあなたは誰ですか？」

「やっと聞いてくれた！」

何を隠そう！

我はアポロン！

太陽神である！」

「・・・アポロンってあのアポロン？」

「どのアポロンかわからないが多分そのアポロン」

へえ、あのギリシャ神話に出てくるアポロンか。
凄いね。

「で、そのアポロンさん何の用？」

「・・・なんか持つと反応は無いのか？」

少なくともお前みたいな反応は今まで会った中ではお前だけだ」

いや、僕だけってね。

「だってさ、僕死んだし。」

後は三途の川を渡るなり閻魔の裁きを待つなりして極楽か地獄に行くだけだもん。今更神様の一人や二人ぐらいどうって事無いよ」

「いや……」

まあ……

良い……のか？」

何やら戸惑ってるみたいだけどとりあえず、

「何しに来たの？」

これをはつきりさしとかなきゃ。

「ん？ああ。」

お前を転生さしに来た」

転生？

転生ってあの転生？

人生をやり直すってやつ？

「そりゃまた何で？」

「本当にお前は驚かないんだな？」

いやまあ、どうでもいいかなって思ってた。

「まあいい。」

お前を転生させるのはお前をどうしようか悩んでたからだ」

悩む？なにを？

「お前は生前、特にこれと言った行動はして無いだろ。」

病弱で運動音痴、勉強は出来たが何か良いことをした訳でも無く悪い事をした訳でも無い。

だから天国なり地獄なり行かすべき所がはっきりしないんだ。だからもう一度生き返らして様子をみようと言う事になった」

へえ、大変だね。

「それに伴いお前に力をひとつ持たせる事になる」

「力？」

「漫画等で色々あるだろう。」

忍術やら魔法やらが」

あるけどそれを持たすって事は・・・

「それを決めてもらう事になるんだがな・・・
急に眼が輝きだしたな」

だって僕が漫画の主人公みたいになれるって事でしょ！
それは期待出来るでしょ！

「あゝ、とりあえず力だがこのくじ引きを引いてもらっ

と同時にアポロンは箱を出して来た。

「この箱の中には漫画等で出てくるありとあらゆる力が入っている。
それから力をひとつ取り出すんだ」

へえゝ、くじ引きかゝ。

変な力が当たらないようにしないと。

僕は箱の中に手を入れるそして中にある物を取るんだけど・・・

「ねーアポロン。

箱の中が見た目よりもかなり広いんだけど」

なかなか力に触れれ無い。

中が広過ぎる。

「当たり前だろ。

その中には何万もの力が入って入るんだぞ。
見た目どうりだとろくに選べんぞ」

それもそうか。

とりあえずは手を伸ばしておこう。

そう思い手を奥まで伸ばす。

そして伸ばしたまま少し待つ。

そして伸ばした手に触れた物の中からひとつ、手の平に当たった物を掴む。

掴んだ物を放さないようにゆっくりと箱から取り出す。
取り出した物はガチャガチャのカプセルのようだった。

「開けてみる」

アポロンに促されてカプセルを開ける。

「うわ！」

すると中に入っていた光が僕の胸に入ってきた。
軽い痛みがしたがすぐに治まった。

「ふむ。」

風鳥院花月。

Get Backers - 奪還屋 - のキャラクターだな」

風鳥院花月か。

かなり当たりだよ。

強いし男だけど綺麗だし。

「さっきの光は何？」

「あれは風鳥院花月の力だよ。

これで転生したら君は風鳥院花月の力を持つ事が出来る。最初はリミットが付くけどね。

訓練すればするほど力が身に付いて行く」

ふ〜ん。特訓したら強くなるのか。
なら頑張らなきゃ。

「次は転生先を決めてもらう。

決まった世界に応じてデフォルトで力が付く」

またもアポロンは箱を取り出した。

僕は次は特に考えずに取り出した。

「ゼロの使い魔の世界か。

良かったな。まともな世界で」

ん？まともな世界？

「まともじゃない世界、なんてあるの？」

「あるぞ。

代表的な物としてはバイオハザードや学園黙示録、ひぐらしの鳴く頃に等がある」

・・・あぶな。

どれも死亡フラグ満載じゃんか。

適当に引いたけどよく考えたら力が全く無い世界もあるんだよな？

それを考えたらかなり当たりだよ！

ひぐらしの鳴く頃になんて何回死ねばいいんだろうな？

「ゼロの使い魔の世界なら魔法の素質が付く。

クラスはお前次第だな」

魔法か。

ゼロの使い魔はあまり知らないけど、どんなのがあるのかな？
楽しみだ！

「そしてこれはオマケだ」

そう言つとアポロンはまた光を出して俺の中に入れた。

「何これ？」

「Get Backers - 奪還屋 - の世界の知識だ。
ありとあらゆる物が知識として入っている」

「そんな物が役にたつの？」

あまり立たない気がする。

それよりもゼロの使い魔の知識が欲しかった。

「それはお前次第だ。
上手く使えばお前の力になるし、何も気がつかなければ役に立たない」

どんな意味があるんだ？

「まあ全部お前次第だ。
そろそろゼロの使い魔の世界に行ってもらおう」

「わかった。

色々ありがとな」

力や知識をもらったんだ。
礼くらいは言わないとな

「・・・最後にひとつアドバイスだ。
お前が行く世界にはお前以外にも転生者が何人もいるかもしれない。
だがいたとしても簡単には信じるな」

「・・・どうして？」

「力に溺れる奴が出てくるんだ。
奴らは平気で人を殺したり騙したりする。
信じるならば先ずは確認しろ。
そいつがどんな奴なのか？
嘘はついていないか？

人を傷つけていないか？
信用するに値する奴なのか？
それを確かめろ」

「・・・わかった」

・・・転生者にもきをつけなきゃな。

「本当に何から何までありがとう」

「なあゝに、気にするな。

後はお前が力に溺れる無い事。

これさえ気をつけていれば安心だ。

じゃ行つて来い」

それと同時に僕の足下に黒い渦ができた。
その渦は少しずつ僕を引きずり込みだした。
そして首まで引きずり込まれた所で

「この者の新たな人生に幸多さちからん事を」

アポロンからの祈りを見た。

・・・行ってきます。

まあこんな事があり僕は転生した。産まれた所はガリアの中の小さな村。

その村の村長の孫として生まれた。

僕らの家族は昔は貴族だったらしいのだが昔の当主が問題を起こし爵位を剥奪されたそうだ。

この村に逃げてきた僕らの先祖は真面目に働いた。

そしてみんなから認められて村長になったのが僕の曾祖父である。

祖父は曾祖父の後を継いで、今村長をしている。

兄弟は兄がいる。僕の5歳上で18歳だ。

3歳から5歳ぐらいまでは勉強してた。

特に小さな子供にする事も無く遊び道具も無かった。

だから家に有った本を読む事にした。

元から勉強を嫌いじゃない。

どちらかと言えば好きだ。

祖父は村長の仕事があり父と農業、母は家事に織物を作らなければならぬ。

兄は勉強などせず子供らしく遊び回っている。

だから祖母に文字を教えて貰うが祖母も何時も教えてくれる訳では無い。

教えてくれない時は本を読むが家に本は多くない。

この世界で本は高級品らしく大した物は置いていない。

だから文字を覚えるのに時間が掛かった。

まあ2年も経つと文字を覚えた。

5歳になった時父にある本を渡された。

先祖が残した魔道書だ。

祖父の時から魔法の才能は無くなってきて、兄には魔法の才能は一切無いらしい。

僕にもあまり期待はしてないがもしかしたら、という事もある。できなくても勉強にはなると言う事で僕の自由にしろ、と言われた。アポロンの言うとおりなら僕は魔法が使える。だから魔道書を読む事にした。

魔法を使うには先ずは杖と契約しなければならない。

契約するには慣れた杖で無いといけないとかいてあったが僕は杖に鈴を選んだ。

風鳥院花月が使っていた鈴である。

僕が小さい時に見つけた。

机の引き出しに普通に入っていた。

恐らくはアポロンが置いて行ってくれたのだろう。

それ以外に思いつかない。

糸の扱いが難しく使いこなす事はできなかったが何時も持っていた杖にするにはピッタリの条件だろう。

案の定直ぐに杖の契約ができた。

簡単なライト等、コモンマジックが使えるようになったがすぐに疲れてしまった。

その次の日から体力作りが始まった。

魔法を使うには精神力が必要になる。

そして体力作りは精神力を作るのに一番手っ取り早い。

オマケに鈴を使う絃術の練習も精神力を鍛えるのに役にたった。

魔法と絃術。

10歳になるまでこのどちらをも鍛えて続けた。

10歳を過ぎ気づいたことがある。

この頃になると魔法の腕はかなり上がった。風がトライアングルまで上がり、水、土はライン、火はドットとなった。

そして水の秘薬を作る事にした。

僕の村はそれ程裕福な訳では無い。

何時もこの領主にギリギリまで税を搾り取られていた。

だから水の秘薬を作り少しでも村の資金の足しになれば良いと思った。

そして水の秘薬を作るのだが作っている時に思い出した。

Get Backers - 奪還屋 - に工藤卑弥呼というのがいる。

ボイスンバフューム

彼女は毒香水と言う物を使い戦う。

これを作れないだろうか？

毒香水を作るには色々と調合しないといけないが僕はアポロンから貰った知識がある。

試しに毒香水の事を考えると調合方法から効果、使い方等も理解できた。

僕はこの時から毒香水と水の秘薬を作る事が多くなった。

水の秘薬は十分に使えるレベルの物ができた。

祖父に渡し、病気の村人に飲ませるようにして貰った。

あまりは商人に売り村の資金が溜まりだした。

毒香水の事は誰にも教えていない。

騒ぎになれば面倒だし、切り札になると考えたのだ。

しばらくすると僕は村で結構な発言権があった。
村に水の秘薬を渡しているのと、農業の効率的なやり方を教えたのだ。

そしてこの農業が上手く行った。

例年よりも多くの作物が出来たのだ。

昔に習った事がこの世界ではかなりな技術だ。

食器は木製。

陶器なんかは魔法ぐらいでしか作れないから貴族が使っただけ。

移動手段は馬か馬車。

自転車なんか無いから移動も大変だ。

この村に限らず世界全体で技術力が低い。

二毛作なんてしないし、肥料も知らない人が多い。

だからアドバイスしただけで収穫量が上がった。

初めは何も聞いてくれなかったが実際に成果が出ると聞いてくれるようになった。

そこからいろいろとしてみた。

陶器を作る為の窯を作ってみたり二毛作や肥料を使ってみたり。

それでも絃術や魔法の訓練はしておいた。

毒香水も作りこっそりと持ち歩くようにしている。

数年たつと結果は出てきた。

作物は多く取れたし、陶器も十分売り物になる。

水の秘薬も結構な値段になった。

村をきれいにして病気も少なくなった。

このまま行けば村は良くなるはずだった。

昔からこの辺りの領主、ドレイド男爵にほとんど持って行かれる。

最初、陶器は祖父が町に売りに行き商人に売っていた。

だんだんと商人に陶器を認められ村まで買いに来てくれる商人も出てきたがそこにドレイド男爵が目を付けた。

いきなり陶器の販売をドレイド男爵が仕切ると言い出した。

そして自分の利益になるようにしだした。

村の事を考えてくれる商人もいたがドレイド男爵が追い出してしまった。

そして自分の利益になる者だけを置き、村の利益を持って行ってしまった。

水の秘薬はこっそりと売っていたので取られなかったが。

村が良くなっている時はみんな明るかったが利益全てをドレイド男爵に持って行かれてみんな暗くなっていた。

みんなストレスが溜まりだし、体調をくずした人もいる。

そして事件が起きた。

ドレイド男爵の使いの者3人が村に来た。

村にある唯一の酒場に使いが来た。

初めは普通に飲んでいただけなのだが、酔いが回った一人が酒場の娘に手をだした。

娘はもちろん抵抗していたのだが使いの者は無理やり襲う。

見かねた酒場の主人が使いの者を諫めるが使いの者は言う事を聞かない。

しかた無くそこにいた客で使いの者を追い出した。

しかし使いの者達は追い出された腹いせに誰もいないときに酒場を魔法で吹き飛ばしてしまった。そして最初につながる。

「カズキ君いる……？」

浮浪者のような格好した彼は聞いてきた。

「あ、あの？ 僕ですけど？」

「あ！？ 君？」

ちよつと話しがあるんだけど良いかな？」

彼は僕を見つけるとこちらに近づいて来た。

「え」と誰ですか？」

「ん？ 取りあえず聞きたい事があるんだけど？」

「名前知らない人とあまり話したく無いのですが」

いきなり知らない浮浪者みたいな人が来ていきなり話したいと言われても……

と思ったけど……

「地球、英語ならアースか？」

他にはゼロの使い魔、ナルト、ブリーチとか？
に聞き覚えはあるか？」

「・・・あなたは？」

「あるみたいだな。」

「取りあえずどこか部屋で話したいんだけど」

「少し待つてもらえますか」

「ん？そう？」

「じゃあ外で待つてるから終わったら呼んでね」

「そう言うと彼は集会所を出て行った。」

「みんなは取りあえず頭を冷やしたみたいで村長の話をちゃんと聞いていた。」

「取りあえず村長に任せるとして今日は解散となった。」

「みんなが家に帰った。」

「僕はみんなが帰った後に集会所を出た。」

「よー！」

「彼は集会所を出た所で片手を上げて声を掛けて来た。」

「お待たせして申し訳ありません」

「んじゃあ何処かに移動しようか」

「ではこちらに、案内します」

「そうして歩き出した僕に彼は付いてきた。」

「一応は転生者だと思うけど。」

さて彼は何者だろうか？

第14話（後書き）

感想を書いた方、ありがとうございます。

今回は思ってたよりも長くなりました。

まだまだ続くと思うのでこれからもよろしくお願いします。

第15話

僕は今自分の部屋に浮浪者のような格好をした彼を連れてきた。彼は部屋に入ると近くにある椅子に座った。

僕の部屋には椅子はひとつしか無いので僕はベッドに腰掛けた。そして、髪につけた鈴を取りサイレントを唱える。

「へえ、魔法使えるんだ。しかも杖はその鈴なんだ？」

「あなたは使えないんですか？」

「うん、色々有つてね。

魔法は使えないんだ」

魔法が使えない？

転生者は自然と魔法が使えるはず。

彼は転生者じゃないのか？

「まあ、この世界の魔法が使えないだけで他の魔法は使えるのもあるんだけどね」

この世界の魔法じゃない魔法？

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」

彼が呪文を指で空間に魔法陣らしき物を書き呪文を唱えると魔法陣から光で出来た小さな獣が出てきた。

「これは？」

「伝説の勇者の伝説にでてくる魔法だ。これで俺が転生者だと信じたか？」

「ええ」

こんな魔法はこの世界には無い筈だ。それを使える〓転生者と考えていいだろう。

「じゃあ自己紹介からだな。

俺の名前はティキだ。

前世は日本人だ」

「ご存知だと思いますが僕はカズキ。僕も日本人です。」

「へえ、俺と同じか」

ティキと名乗った男はしみじみとしながら呟いた。

「で、あなたはここに何しに来たんです。」

「いかなり本題か？」

せつかく同郷の奴に会ったんだぜ？
もうちょつと雑談しようや」

「会たばかりの人とあまり楽しい会話はできないと思いますが？」

「ハア、わかったよ。」

本題に入ろう。

俺がここに来たのはカズキ、お前をスカウトしに来た」

「スカウト？」

何のだ？

「この領地はここ数年で領主の羽振りが良くなった。昔は借金までしてたのに今では全額返済して税もちゃんと納めるようになった。」

オマケに他の奴に金を貸して毎日贅沢三昧。

何かあると思うだろ」

「それで何故、僕のスカウトになるんですか？」

「この領地を調べてみたんだ。」

こここの領主は優秀でも何でも無い。

そしてここ数年で特に動いた様子は無い。

なのに領地は間違いなく良くなってる。

ならば他の誰かがした事になる。

そしてこの村では二毛作や肥料、果ては陶器まで作り出した。

他の村ではこんな事一切行われていない。

それどころか、存在すら知らないものが大半だろう。

まるでこの村では技術提供している者がいるみたいだ。

そんな事ができるのはかなり優秀な人間じゃない。

そんな人は仲間になりたいだろ」

なる程。

ある程度は下調べしてたのか。

「だから俺はお前が欲しい。」

この村を良くしたお前がな」

「・・・僕に何を望むのですか？」

「部下になつて欲しい」

「部下？」

あなたは見た所、浮浪者みたいな格好をしています。が僕に報酬を払えるのですか？

僕達の村は今、かなり厳しい所まで来てます。

村の作物や陶器等で村は良くなっていました。がそのほとんどをこの辺りの領主、ドレイド男爵に持つて行かれ。村人はストレスが溜まり、今にも暴動を起こしそうな程です。

更に僕も抜けたら事態は深刻な事になります。

あなたは僕が村を抜けても、村に利益が出る程の報酬が払えますか？」

僕はこの村が大切だ。

父や母、祖父祖母に兄、村の友達等、この村には大切な人が沢山いる。

それらを捨てて行く事は僕にはできない。

「・・・そうだな。

報酬はこの辺り一体の税金の減税。

陶器や水の秘薬等の自由な販売の許可。

そしてお前自身に月、30エキューと働きに応じたボーナス、でどうだ？」

・・・何？

この男は何を言ってるんだ。

「あ！もしかして信じてない？
だったら誓約書でも書いてやろうか？」

「あなたは何を言っている！？
そんな事出来る訳ないだろ！？

第一、僕にそこまでする意味が分からない！！」

僕はつい大きな声を出してしまった。

サイレントで外には聞こえ無いただろうが、注意するに越した事は無い。
少し声を小さくしないと。

「ここまでするのは純粹にお前が欲しいからだ。
この小さな村を良くしたお前を高く評価している。
それにお前は俺と同郷の人間だ。
それだけでも助ける理由にはなと思うが？」

「もしそれが本音だとしても、あなたにそれが出来るとは思えない。
もし、それでも言うのなら僕に証明してくれ。
君に出来る事を」

僕が言うときキは少し考えた。
そしてしばらくすると考えてから

「ハア、わかったよ。
いずれは言わないといけないしな」

と言い椅子から立ち上がった。
そして顔に掛けたびん底メガネをゆつくりと外した。
すると黒髪黒眼だったのに色が変わり青になった。
ボサボサの髪をオールバックにし服もいつの間にか上等な物になった。

・・・誰？

「俺の名はティキ・オルレアン・ド・ガリア公爵。
ガリア王国第三王子にして、この度オルレアン領の領主となった。
これで証明になったか？」

王子！？公爵！？領主！？誰が！？
まさかあの浮浪者みたいな格好してた彼が！？

「・・・あなたが王子で公爵で領主？
流石にこれは簡単には信じれませんよ？」

「うーん。
一応青髪はガリア王家に縁のある証らしいけど」

「でも魔法で変えることも出来る筈です。
事実早急まで姿を変えてたじゃないですか」

突然姿を変えるからびつくりした。

「あゝ、とりあえずこうしようか。
後1週間程で正式にオルレアン領の領主になる。
その時にパーティーがある。」

「お前もそれに付いて来い」

「僕が？貴族のパーティーに？」

「・・・何で？」

「お前が来れば俺が王族だと証明できるだろ？」

「で、でも、僕はパーティーに出れないでしょ？
どうするの？」

「俺の従者と言う事にすればいい。
そうすればパーティーには出られる。
服はこちらで用意するよ。」

「パーティーの後で俺に付いて来るか来ないか決めればいい」

「・・・では、そうします」

「ついて行けば本当かどうか分かるだろ。」

「じゃあ、一週間後に迎えに来るよ。
3日程続くから泊まる準備しとけよ」

「そう言うとな彼は立ち上がりドアを開けた。
その奥は見慣れた廊下ではなく闇が広がっており・・・」

「それじゃ、またな」

「彼はその中に躊躇なく入って行った。
彼が闇に入って行くと勝手にドアは閉まった。」

僕は慌ててドアを開けるがそこにはいつもの廊下があるだけだった。

・・・何かの魔法かな？

と思いながら親にどう説明するか考えていた。

「ん、欲しいなこいつ」

俺はアニエスからの報告書を読みながら呟いた。

俺が気になった領主、ドレイド男爵はアニエスが調べた限りでは無能な領主だった。

平民が作り上げた作物や陶器を無理やり奪い取り、自分の為だけに使う。

自分の利益にならない者は全て排除する。

こんな事してたらその内暴動が起きるぞ。

まあ、調べた結果、村を良くしたのはこいつじゃない。

そしてアニエスが調べると村を良くしたのが見つかった。

名前はカズキ。

村長の孫で村でしか知られていないがなかなか優秀なメイジだ。

10歳になってから農業のアドバイスをし、収穫量を増やした。

おまけに陶器を作る窯を作り村の特産物にした。

村をキレイにして病気になりにくくした。

この世界では行われていない二毛作や肥料、平民でも作れる陶器を作り、村をキレイにして病原菌を抑えた。

・・・こいつ転生者じゃね？

それもかなり優秀な。

こつちに来てからパーティーの事についてはジョゼフ兄に借りてる人達がしてるけど、領の事は俺とアニエス、あと数人の従者ですてるから優秀な人材はいくらでも欲しい。

こいつがいるのはこの屋敷から少し離れているが俺なら1時間も掛からないだろう。

オマケに帰りは夢に入って来ればいい。

幸い今日のノルマは終わってるから今から勧誘しに行くか。

俺は一応アニエスに置き手紙を書いてから屋敷を出て、風に乗ってカズキがいる村まで飛んで行った。

村に付いてみればかなり静かだった。

俺は風の精霊とリンクしてカズキらしき人がいないか調べてみた。

すると少し大きな建物に多くの人が集まっております。その中からメイジの気配がした。

この村でメイジは村長とその息子がドット程で後はカズキがいるだけだ。

その他にメイジの気配がなかったので俺は人が集まっている所に向かった。

「もう我慢ならねー！」

俺は何が何でもあのクソ領主に殴り込みに行くぞ！！」

何か危ないセリフが聞こえた。

しかも俺が目指してる建物から。

俺はとりあえず中の話を風の精霊をつうじて聞きながら建物の前に行った。

どうやら中の人達は今の領主に不満があり、それが今、爆発した、と言うことか。

このままじゃ〜マジで暴動が起きるな。

どうしよう。

流石にこのまま見逃すのはできねーし、中に目的のカズキがいるみたいだし。

とりあえず明るくいくか？

コンコン

俺はしっかりとノックをしてゆっくりとドアを開けた。
そして中に入り・・・

「カズキ君いる～～～？」

明るく言ってみた。

しばらくすると人垣の中から

「あ、あの？僕ですけど？」

と、一人の少年？が出てきた。

腰まで伸ばした長い髪に整った顔立ち。

黒髪黒眼の大和撫子。

男だよな？

まあ良いや。

とりあえず固まっていた俺は話掛ける事にした。

「あ！？君？

ちよつと話しがあるんだけど良いかな？」

「え〜と誰ですか？」

まあ普通の返事だな。

「ん〜？取りあえず聞きたい事があるんだけど？」

「名前も知らない人とあまり話したく無いのですが」

「地球、英語ならアースか？
他にはゼロの使い魔、ナルト、ブリーチとか？
に聞き覚えはあるか？」

名前を言う前に確認しときたい。

こいつが転生者かどうか？

転生者ならこれだけ言えば何か反応するだろ。

「・・・あなたは？」

案の定、カズキは驚いたように俺を見てきた。

「あるみたいだな。」

取りあえずどこか部屋で話したいんだけど」

彼は少し考えてから

「少し待ってもらえますか」

と返事をしてきた。

まあ、まずは村人をどうにかしないとな。

「ん？そう？」

じゃあ外で待ってるから終わったら呼んでね」

よそ者の俺はとっとと出て行きますか。

俺が建物から出て向かいの家にもたれながら待つとしばらくすると村人が出て来た。

みんなじろじろと俺を見て来るが無視して待つ。

みんなが出て来た後、しばらくしてからカズキが出て来た。

「よー！」

片手を上げ軽く挨拶をすると

「お待たせして申し訳ありません」

と礼儀正しく返事を返した。

「んじゃあ何処かに移動しようか」

「ではこちらに、案内します」

俺が移動しようと言うと、彼は返事をして歩き出した。
俺は彼の後に続いて歩いて行く。

さて、どうやって仲間にしようかな？

カズキの部屋のドアを使い夢の世界へ入った。
そしてアテナの家に行き

「ただいま〜」

「おかえり〜」

とアテナとアニエスが返事をした。
アニエスは椅子に座り、アテナはソファにうつ伏せに寝ながら漫画を読んでいた。

・・・何かもう前世の一般家庭みたいになってる気がする。

「今日はどうだったの？」

アニエスが聞いてくる。
まず間違いなくカズキの事だろう。

「とりあえずパーティーに連れて行く事になった」

「パーティーに！何で！？」

アニエスはびっくりしたようにこっちを見てきた。

「報酬の時に正体をばらしたんだがな、流石に信じられんだろ。
だからその証明としてパーティーに連れて行く事にした。
俺の部下になるかどうかはそれからだ」

「ふん」

すると興味を失ったのか、また漫画を読み出した。

「なあアテナ、お前俺の他にも転生者を作ったのか？」

「なんじゃ？急に？」

「あゝ、今日会った奴が転生者だったんだけどアテナは知らないか？」

「知らんな。」

妾はあなた以外には転生者を作った事が無い。

作った事があるならあなたの時にちゃんとルールは守った。

あなたを作ってからはずっとここにいるのだぞ？

いつ作る暇があるのだ？」

だよな。

つまりアテナ以外の神様が作った事になるのか。

「なあ、神様が転生者を作る時って何を条件に作るんだ？」

「うーん。」

条件は色々じゃな。

単に気に行ったとか、死後の世界のどこに連れて行くか迷った時。

不慮の事故やこちらの不手際の場合もある」

「死ぬ時つて神様が悪い時もあるのか!？」

「あんまり無いがな。」

「じゃがあなたの場合はこれに当てはまるじゃろ」

「俺が？」

「妾を庇つて死んだんじゃ。」

「これはこちらの不手際じゃろ」

なる程。

「それじゃ、氣にいる、とかはどうしてんだ？」

「神様がみんな俺達を見てるのか？」

「いや。神には色々振り分けておつての、実際に世界を見ておく奴もいるし、そやつらからの報告書を纏める仕事もある。」

「ちなみに妾は後者じゃ。」

「報告書を纏め終わつて本を買いに行った後、あなたに助けられた。」

「まあ、実際に転生者を作る事が多いのは前者じゃな。」

「前者は適当に振り分けられ、その地域にいる者を見る。」

「ずっとでは無いがな。」

「そして見た事を書き自分の判決を纏めるて報告書に書き、それを妾らが確認。」

「それを閻魔に渡し最後の判決になる」

「閻魔って日本や中国とかの神様だろ。そんなのもいるのか？」

「当たり前じゃ。」

元々神様は強い力を持つ霊体じゃ。

それを人間達がイメージを作り固めた器に入っただのが神じゃ」

「・・・ちよつと待てよ。」

それじゃ神様は死なないのか？」

「うーん。まあそうじゃの。」

器を壊される」死じゃが、器を壊されてもまた人間達が器を勝手に作る。

神は器を失うと霊体に戻るが、長いこと同調した器に惹かれるみたいでな、また同じ神になる。

だから神は特に死ぬ事は怖くない。

また生まれるのじゃからな」

何か神様って天然チートだな。

「まあ基本的に神が死ぬ事なんて無いからの。」

あまり関係ないのじゃ。

それに転生者もそんなに作らん。

これは初めに言っただじゃろ」

あゝそう言えば言ってたな。

何か転生させる時は慎重に決めなダメだって。もうかなり前の事だけど。

「それよりそろそろ休んだ方がいいんじゃない？
明日も仕事あるよ」

アニエスが心配するように言ってくる。

「そうするか。」

んじゃゝ寝たらまた来るよ」

と言いアテナの家から出る。

そして自分の部屋へ繋ぎ、ベットに溶け込むように寝た。

寝た後に精神だけアテナの所に戻り何時もの訓練したけど。

第15話（後書き）

こんにちは作者です。

カズキとティキの交渉でティキ側は飛ばしました。

内容は余り変わらないし作者のやる気も減るからです。

それならさっさと続きを書こうと思いました。

これからこんな事はあると思いますが見逃してください。

最後の方はアテナの説明ばかりになってしまいました。

次はパーティーの話です。

原作キャラがかなり出てくると思います。

これからもよろしく願います。

第16話

「はあゝ広い屋敷ですね」

しみじみと言っているのはカズキ。

1時間程前にカズキを村へ迎えに行き、風に乗って今帰って来た所だ。

「王宮はもつと広いぞ。

お前が部下に成ったらそのうち行くと行く事になるぞ」

「へ」

今日から三日間、パーティーがある。

初めは一日だけにするつもりが父さんと母さんがどうせなら派手にやろうと三日に増えた。

おかげでパーティーの準備に時間が掛った。

大変だったな。

俺はカズキを連れて屋敷に入って行く。

中に入るとアニエスがいて、

「おかえりなさいませ。ご主人様」

と言っている。

・・・何回聞いてもなれないいな。

まあカズキがいるから仕方ないか。

「ああ、ただいま。」

アニエス、こいつ頼むよ」

「かしこまりました」

「カズキ、こいつに付いて行って」

「あ、はい」

アニエスは廊下を進みカズキも付いて行く。

あとはアニエスが何とかするだろ。

あいつは俺やアテナという時はダラダラしたりつつこみ役になったりしてるが侍女としての能力はかなりすごい事になってるからな。

俺の仕事手伝ったり、うまい飯作ったり、お茶入れたり、調べことしたりしてる。

すごいね〜。

とりあえず俺はパーティー行くのに着替えないと。

はあ〜、めんどくさ〜。

「おお、ティキ！

ちゃんと主催者らしくできてるじゃないか！」

「うん、思ったよりもしつかりできてるね。

この分だと色々ティキに任せても大丈夫だね」

俺はパーティーが始まる前にカズキとアニエスと合流した。

そして次々と来る貴族達に笑顔で話しかけてお世辞を言ったりしないといけない。

めんどくさい。

貴族達はみんな俺を値踏みするみたいな目で見てくるしガキだと舐めてる奴もいる。

魔法が使えない事になってるから、その事をネチネチと言ってくる奴もいる。

何人が大物も来たな。

皆さんご存知、ラ・ヴァリエール家。

娘達は後から来るとかで今いるのはラ・ヴァリエール公爵と公爵夫人、カリヌ。

いやゝもう怖かったね。

なんつゝか、威厳と言うか、気迫と言うか、が公爵には有ったし、夫人は公式チート、「烈風カリン」だろ。

昔、母さんにカリンの武勇伝とか聞かされたけど、こいつもう転生者でよくね？つてぐらい暴れてたらしいし。

なんか敵に囲まれた味方を助ける為に竜巻起こして敵を纏めて吹き飛ばしたてきたぞ？

「鋼鉄の規律」、だっけ？

かなり厳しい規律を作ったらしい。

なんかやつらかしたら殺されそうに成る気がする。

アニエスに助けを求めたら目を反らされた。

・・・見捨てやがった。

カズキはそもそも公爵夫人の危険性に気づいていない。
ただ公爵がある事で緊張している感じはする。

まあ公爵達は適当に話してすぐ離れたけど。

他にはゲルマニアの皇帝やアルビオンの王と王子も来た。
トリステインの王やマザリーニも来た。

トレストインの王様

・・・まだ生きてたんだ？
原作開始には死んでたよね？

まあ良いや。

そして俺の家族、父さんと母さんが先に来て色々と話した。
そして話に区切りがついた所で別れ、両親は貴族達への挨拶まわり
を始めた。

大変そうだね？
俺はもう大半を終わらせたよ。

と、おもっているところで声を掛けられた。俺の兄ジョゼフ兄とシ

ヤルル兄だ。

「色々任せるって俺はまだ15だよ？
何やらせる気だよ？」

俺は兄達の方を向き愚痴を言う。

「うん？外交とか？」

「とか？って何、とか？って」

他にもやらす気が？

「ん？ティキ、後ろの子供は誰だ？」

ジヨゼフ兄が俺の後ろにいるカズキを見ながら聞いてきた。

「ああ、紹介するよ。
カズキだ。」

俺の新しい部下になるかもしれない奴だ」

「なるかもしれないって事はまだ決めて無いのか？」

「パーティーが終わったら返事をきくよ」

「はじめまして。」

カズキと申します。

よく間違われますが男です」

「ほう？」

「へ？」

ジョゼフ兄もシャルル兄も驚いている、のか？
とりあえず変な声を出してカズキを見ている。

「ふむ。」

ティキが新しい部下を見つけたか。
しかし、ずいぶんと若いな」

「まあティキが決めたのだし、能力は確かなのでしょう」
と話している所へ、

「お父様」

と5、6歳ぐらいの女の子がシャルル兄に抱きついた。
その後ろからその子より少し大きいぐらい、7、8歳ぐらいの女の子が来た。

「お父様、置いて行かないでよ」

後から来た女の子がジョゼフ兄に抱きつく。

「おお、悪かったな」

こいつらはもしかして・・・

「お父様、この人は誰ですか？」

「うゝ？」

女の子達が俺を興味心身で見てる。

「・・・ジョゼフ兄、もしかしてそいつらは・・・」

「ああ、お前の想像どおり俺の娘のイザベラとシャルルの娘、シャルロットだ」

ヤッパリか。

昔、こいつがまだ赤ちゃんの時に何度かみたがそれからは仕事が忙しくて会った事が無い。

大きくなっ たなゝ。

「シャルロット、イザベラ。

この人はティキ。

君達のおじさんだよ」

シャルロットとイザベラに笑顔で教えるシャルル兄。

え？

「・・・シャルル兄？
今、なんて？」

何だかこの歳で言われる訳がない言葉を聞いた気がする。

「ん？聞こえなかったかい？
おじさん」

「待つて！
まだ俺はおじさんって言われる歳じゃない！！
せめてお兄ちゃんとかにして！」

「うーん。

しかし、この子達との関係はおじさんと姪だろ」

「そうだけど！

そうだけれども！

まだ１５歳の子供をおじさんって！」

「アハハ。」

子供は書類仕事や領主なんてしないさ」

「わかってんならやらすなよ！」

「おじさん？」

「お、おじさん？」

イザベラとシャルロットが戸惑いながら言うてくる。

「いや！だから、せめてお兄ちゃんにして？」

「「おじさん！」」「

・・・なんでだろ。

目から塩水が溢れてくるよ。

シャルル兄は後ろ向いて笑いを誤魔化してるしジョゼフ兄は大爆笑。後ろの二人も堪えきれずに吹き出していた。

ハア〜。

……諦めるか。

「そろそろ笑い終われ、おじさんの兄達」

「ハハハハハ。」

いや〜すまんすまん。

これほど笑ったのは久しぶりだな。
楽しかったぞ、ティキ」

俺は全然楽しくねーよ。

「まあそう拗ねるな。」

これからこいつらもここで世話になるんだから。
今の内に慣れておけよ」

なんかまた変な言葉が。

「……ジョゼフ兄、なんて？」

「今の内に慣れておけよ」

「違う。その前」

「こいつらはここで世話になる」

ふむ。

イザベラとシャルロットがここで世話になるのか。

「・・・シャルル兄。
どういう事？」

「おい、何で俺に聞かん？」

「だってシャルル兄の方が詳しく言うてくれるもん」

「・・・まあいい。
シャルル。
教えてやってくれ」

「はいはい。
テキキ。」

僕はこれから本格的に王位継承をする事になる。

その為に僕はこれから忙しくなる。

妻達にも手伝わってもらいつもりだからこの子達の遊び相手がいらないんだ。

そこで、これからはしばらくは領地経営で屋敷に籠もる事になるデイクにこの子達の面倒を見てもらう事にしたんだ」

「いや、でも、俺も忙しくて相手できないと思うよ？」

「暇になった時だけでいいよ。

僕は全く相手出来ないと思うからね。」

「代わりと言っては何だか、お前の所に貸していた俺の部下。そいつらをそのままお前の所で使ってくれたらいい。

あいつらは優秀だからいいだろ？」

確かにあの人は優秀だからいてくれたら楽になるな。

「わかったよ。

ちゃんと面倒を見ればいいんだろ？」

「ああ、頼むよ」

これから我が家にちびっ子二人が住むことになるのか。急いで部屋を用意しないとな。

「それじゃ、僕は他の貴族達に挨拶まわりしてくるよ」

そう言つとジョゼフ兄とシャルル兄は行つてしまつた。

この場に残つたのは俺とイザベラ、シャルロット、アニエス、カズキだ。

とりあえず

「これからよろしくな。
ちびっ子」

「はい、おじ様」

・・・俺はおじさんからおじ様にランクアップした。

こらそこ！

クスクスと笑うな！

後ろでこそこそと笑っているアニエスとカズキを軽く叩いて笑うのを止めさせる。

「今から二人の部屋を用意するから、二人はしばらく自由に遊んでおいで」

「いいの？」

イザベラが聞いてくるからそれに笑いかけて、

「このお姉ちゃんが付いて行くからこいつからはぐれなかったら、自由にしていいよ」

「はい」

「うん」

イザベラとシャルロットがそれぞれ頷いたのを見て

「それじゃアニエス、はぐれないように見とけよ」

「かしこまりました」

仕事モードのアニエスに後を頼み、俺とカズキは屋敷に入った。

「あゝ、とりあえず使用人の誰かに部屋二つ用意さしてきてくれ」

「わかりました」

そう言うとは彼は廊下を歩いて行く。

俺は自分の部屋に行く。

貴族のみんなの前で挨拶をしないといけない。

その為に考えた言葉を書いた紙を取り部屋を出る。

そして屋敷を出ようとすると一台の馬車が入って来た。俺の前で止まり中から出てきたのは金髪と桃色がかったブロンド二人の三人姉妹。

原作のメインヒロイン来たーーーー！！

一人目が俺より少し年上で金髪、胸が残念な事になっている。
顔付きが少しきつい。

二人目が俺より少し年下で、桃色がかったブロンドで他の二人と違い年齢の平均よりも胸はでかいと思う。
顔付きは穏やかで優しいそうだ。

三人目はちびっ子でイザベラやシャルロットと同じぐらいだろう。
髪は桃色がかったブロンドで胸は残念だ。

「ようこそお出でなさいました。
私、この度オルレアン領の領主となりました、ティキ・オルレアン・ド・ガリアと申します。
どうぞよろしく願います」

「丁寧にも。
私はエレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。」

「こっちは妹のカトレアとルイズです。
この度はお招き頂きありがとうございます。」

形式通りの挨拶を交わす。

それにしても、名前なが！！

良く噛まずに全部言い切れたな？

「それでは会場に行きましょうか。
もうすぐ始まりますので案内しますよ」

「ありがとう」

俺達は会場に向かって歩き出した。

歩いていながら軽く話したがエレオノールはやはり性格もきつい。
ルイズが何か言ってエレオノールを怒らせ、カトレアが宥める。
これがパターン化していた。

エレオノールが17歳。

カトレアが14歳。

ルイズが6歳だと解った。

これだと原作開始まで後10年程ある。
まあのんびりと過ごすか。

そうこうしている内に会場に着いた。
会場からはラグドリアン湖が見えるようになってる。

会場を見渡してから俺はみんなの前で挨拶をしないとイケないので、
ラ・ヴァリエール三姉妹と別れた。
そしてステージに上がって挨拶をした。

今までお偉いさんの前で挨拶などしたことないからかなり緊張した。

俺はある程度挨拶を終えると料理を食べる事にした。

朝から動き回っていい加減腹が減った。

近くの料理を取り壁際に行こうとすると料理を食い三人組を見つけた。

イザベラとシャルロットとアニエスである。

アニエスとイザベラは食べ終わったのかワインを飲んで一息ついて
いる。

・・・子供がワインなんか飲んでいいのか？

まあこの世界は飲み水よりもワインの方が安いぐらいなのだが、前
世では考えられないな。

その二人の前で黙々と料理を食べているのがある。

シャルロットだ。

食いまくっている。

そう、食いまくっている。

一心不乱に食いまくっている。

その小さな体のどこにはいるんだ？ってくらい食いまくっている。

あゝ、食費、シャルル兄に請求しようかな？

「よゝ楽しんでるか？」

「あ、おじ様。」

「んゝ」

イザベラとシャルロットがこちらに気づいたようだ。
シャルロットは食ったままだったが。

「どうだ？シャルロット。」

「この料理は？」

「美味しい」

「そうか。気に入ってくれて良かったよ」

「これは誰が作ったの？」

イザベラが聞いてくる。

「アニエスだよ。」

全部が全部ってわけじゃ無いけどな。
この辺りにあるのは全部アニエスだ」

「へーあんだ料理出来たんだ」

少し感心したようにイザベラが言う。

シャルロットも同意見のようでアニエスを見た。

「テイキ様が城を抜け出して勝つてに町をうろつかれていたの
お弁当を作っていたんです。」

そしたら料理にはまっちゃって。

それから料理も作るようになったんです」

「へー」

アニエスが弁当を作り出したのは俺がアニエスを連れて亜人討伐に
行っていた頃からだ。

昼飯を食べる前に行く事もあったからアニエスが弁当を作るよう
になった。

初めは大して上手くなかったが俺が感想に、微妙だな。と言ったの
が余程悔しかったのか、それからよく料理するようになった。
最近は何となく賞賛できるくらい上手くなっている。

最近は何となく賞賛できるくらい上手くなっている。

「そうそう、ちびっ子達の部屋を用意したから。
今日からはそこで寝泊まりするんだぞ」

「うん」

イザベラをシャルロットも頷く。

「アニエス、後でカズキに部屋を聞いて二人を案内してやってくれ」

「かしこまりました」

「じゃ、ちびっ子ども、夜更かしせずにさっさと寝ろよ」

と言い俺は三人から離れた。

挨拶も済ましたし俺はもうする事が無い。

せつかなのでラグドリアン湖に行く事にする。

実はパーティーの準備や領地経営の書類仕事でろくにラグドリアン湖を見た事が無いのだ。

じっくりできる時間なので夜の湖でも見に行くか。

俺は誰も見ていない内にこっそりと湖に向かった。

第16話（後書き）

シャルロットやイザベラの口調が良くどうしようかと思いましたがシャルロットは口数が少なくし、イザベラは素直なれない子にしていると思います。

これからもおかしい所があると思いますがこれからよろしく願います。

第17話（前書き）

作者は水の精霊の名をウンディルアとしていましたが蒼月璃煌瑠*さんが考えたウルティアに変えました。

元々ウンディルアと言うなは作者のネーミングセンスの無さでなっていましたのと、ウンディルアと言うのも言いにくいかなと思うウルティアにします。

蒼月璃煌瑠*さん、本当にありがとうございます。

これから先に火、風、土の精霊も出すので読者の皆様、良い名前があれば教えてください。

これからもよろしく願います。

第17話

「ふむ、お前はなかなかおかしな体しているな？単なる者よ」

俺の目の前には水の精霊が女性の姿で現れた。

女性の姿と言っても 水が女性の形になっているだけで人間とはかけ離れている。

透明な水でできているので明るい時に見れば向こうが透けて見えるだろう。

しかし、生憎と今は夜。

遠くには貴族達がパーティーをしている明かりがついているが、俺の回りはまだ暗い。

・・・何で俺は水の精霊と向かいあってんだろ？

俺はイザベラやシャルロット、アニエスと別れると湖の回りをゆっくりと歩いていた。

こちらに来てから一度見に來ただけ、それ以外の日は仕事をしていてゆっくりと見るのは初めてだ。

久しぶりにのんびりとした時間を過ごしていた。

ある程度、パーティー会場から離れたので俺は靴を脱ぎ、ズボンを捲り、足を湖に入れて座った。
ハア〜。

水が冷たくて気持ちいい。

いやゝもうのんびりできていいな。

水もキレイだし中には魚も泳いでるし。

今度、釣りでもしようかな？

俺は足を湖に入れたまま寝転がる。

パーティーの準備とかでこの頃忙しかったし疲れたな。

と、俺はうとうとと船を漕ぎ出した。

しばらくそのままだったが、突然湖の水が膨れ上がった。

膨れ上がった水が顔に掛かり、沈んでいた意識が戻ってくる。

そして今更ながら湖の変化に気づく。

俺は何が起きても対応できるように立ち上がり、風と火の精霊の力を借りる。

しかし、水の変化は止まらずにやがて女性の姿になった。

そして、最初の言葉だ。

「ふむ、お前はなかなかおかしな体しているな？単なる者よ」

水の体のどこからだしているのか解らないが声がした。

俺がオルレアン領に来る時にジョゼフ兄に聞いたのだが、ラグドリ

アン湖には水の精霊がいて、とても美しい姿だと言う。
そして、その精霊の前でかわされた誓いは決して破られない、とか。
本当かどうかは知らないが。

まあ、よく見ると水の女性の回りには水の精霊が集まっているので、
あれは間違いなくこの湖に住む精霊でいいだろ。

「あゝ、それは俺の事か？」

「お前以外に誰がいるのか？」

「いや、いないな」

一応風で回りを調べたが誰もいない。

「ふむ。さらには下級とはいえ精霊を従わせるか。
ますますお前がなんなのか知りたくなる」

俺が風の精霊を使ったのが解るか。

しかも下級と言っていた。

これやあ、マジで精霊だな。

それも間違いなく上位の。

「あゝ、私はティキ・オルレアン・ド・ガリア。
この度、オルレアン領の領主となった者です」

まあ、とりあえず精霊には敬意を持って接するべきだと思う。

「ふむ。我はこのラグドリアン湖に住む水の精霊だ。

後、普通に喋っていいぞ。

お前はその喋り方慣れて無いだろ」

いや、有り難いね。

俺ってかしこまった喋り方は得意じゃないんだよ。それにしても水の精霊ね。

「何か名前ないのか？」

俺はこいつらの事を風の精霊とか水の精霊って呼んでるから、あんたと被ってまう」

と言い、風や火、水の精霊達を軽く動かす。

相手は精霊が見えてるみたいだからこれで解るだろ。

「そうか。」

しかし、我は特に名前を持たぬ。

水の精霊と言われるのも単なる者が勝ってに言っているだけだからな」

名前ないのか。

でもそれじゃあ不便だよな。

「なあ、名前付けていいか？」

「・・・お前、名前を付ける事がどんな意味があるか知っているか？」

「？何かまずいのか？」

名前何かただの個名だろ？

「はあ、何も知らずに名前を付けると言うのか？
まあ良い。

お前は他の単なる者と違うみたいだし、お前に付いて行くのも面白
そうだ。

何なりと名を付けるがいい」

・・・なんかおかしい話になってる気がするけど、まあいいや。
えーと、水の精霊だろ？

だったらウンディーネとかか？

でも、何か在水里来たりだしな。

どうせなら格好いいのが良いし。

水の精霊、水の精霊。

あゝ、敢えて英語で行くか？

水がウォーターで、精霊がスピリット？

ウォータースピリット？

無いな。他の考えよ。

見た目的には水の女だろ。

やっぱりウンディーネ（水の乙女）が良いかな？

うーん。

・・・そう言えばヘスティアとか言う神様がいるらしいな。
確かアテナに手紙が来ていてその差出人がヘスティアって書いてあ
った。

アテナ曰く

「父上の姉、詰まり妾の伯母にあたる人じゃ。
綺麗な人でな。

さまざまな神からプロポーズされたらしいのじゃがそのすべてを蹴
つてな、永遠の処女を守る許しを父上から貰ったらしい。

結婚の喜びの代わりに全ての人間の家でその中央に座すること、犠牲
の最良の部分を得ること、すべての神殿で他の神々と栄誉をわかっ
こと等の特権を得たと聞いたが実際は仕事も殆どなくのんびりと暮
らしておる。

妾が趣味で本を読んでいる時に偶然会つての、その本を貸したら偉
く気に入ったそうじゃ。

それから時々会つて本に付いて話会ふ事がこつちに来るまでは有
ったんじゃ。

今じゃ手紙のやり取りをしているのじゃ」

とか言つてた。

まあとりあえずは綺麗で永遠の処女で家庭や国家統合の守護神らし
い。

ヘスティアね。

ウンディーネとヘスティア。

・・・ウルティア？

・・・もうウルティアでいいや。

他に良いの思いつかないし。

「ウルティアでいいか？」

「ウルティアとは何だ？」

「あゝ、最初はウンディーネってのが思いついたんだ。
水の乙女って意味なんだけどな。
でもありきたりだろ。」

だからそれにヘスティアっていう女神様の名前を付けてみたんだ。
綺麗な女性で家や国の守護神らしい」

「ありきたりの意味が解らんが、ふむまあ良いだろ。
我はウルティアだ」

「ああ、毎回ウルティアも長いからティアで良いだろ」

「ふん。まあ良いじやろ。
それでお前はどどういう存在なんだ？」

「えゝと、どどういうって？」

「お前の体は人間のようで人間では無い。
人間よりも長い年月を感じる物がある。
それにエルフならともかく人間に精霊を従えられる訳がない」

うゝん。

精霊だし転生の事とか言っても大丈夫かな？

「・・・今から言う事は他の人間には黙ってくれる？」

それを聞くとティアは訳が解らないと言うような顔をしたが俺の真剣な表情を見て

「何か訳があるようだな。

いいだろ。

ウルティアの名に掛けて、誰にも話さん事を誓おう」

うん。

水の精霊がここまで言うてくれたんだから信じてもいいだろ。
俺は元いた場所に座りながら話を始める。

「あゝ、転生つて知ってるか？」

「転生？知らない」

「あゝ、転生つてのはな、人や動物とかが死んだら魂と肉体が別れるんだ。

死んだ肉体はそのまま朽ち果てるんだが、問題は魂の方だ。

魂には死ぬ前の記憶がある。

この魂は死んだら行くべき所に行くんだ。

例えば地獄とか天国って言われる所だな。

そこから必要な事をする。今度は生前の記憶や天国や地獄での記憶を全て消してしまう。

ここでの必要な事ってのは、地獄だと犯した罪の分を苦しむ事。
天国だとある一定の善行を積む事、だったかな？

まあ、とりあえずそれで記憶を消される。

記憶を消されると次は新たな命として生まれる。

このサイクルを転生って言っただ」

地獄に行った奴は強制的に転生させられるが天国は自由らしい。

それでも、また生きたい、と言う人は多いらしく、結構な人数が転生するとアテナから聞いた。

「ふむ。

我には無い概念だな。

我は単なる者と違い、寿命と言う物は無い。

外的損傷で死ぬような体でもないので死ぬ事が無い。

我はもう既に数え切れない程の歳月を生きて来たからな」

まあ何百年、何千年と生きる奴に転生なんて概念がある訳無いわな。

「話を戻すぞ。

転生する奴の中には神様に気に入られる奴もいるんだ。

俺もその一人だ

それで、俺みたいな奴は少し特殊何だ」

「どんな所だ？」

ティアが首を傾げながら聞いてくる。

「まず、俺には前世の記憶がある。
そして、神様からいくつか力を貰えるんだ」

「ふむ。

神の力か。どんな力があるんだ？」

「それは色々だ。

俺の場合はノアメモリーって奴と精霊魔術って言って、精霊の力を
借りる事が出来る。

後は色々な魔術が使えるようになった」

「では、我がお前から感じた人間に似て非なる物や人間等比べ物に
もならない年月を感じるのは？」

「それは多分、ノアメモリーのせいだろ」

「そのノアメモリーはどんな物なのだ？」

「あゝ、簡単に言うところある世界にいる人間の祖。
その祖はメモリーと言う形で子孫達に力を残した。
でも、その力は人間の体で扱える物じゃ無い。
だから人間の体を無理矢理作り変えるんだ。

俺が人間に似て非なる物だと感じたのはそのせいだ。

年月に関しては・・・

多分、長い事神様が持っていたからその年月なんだと思うぞ」

「ふむ。なる程な。

やはりお前と契約して良かった。

この先、お前にがいればなかなか楽しい事になる気がする」

「まあ、ここの領主に成ったし、しばらくはここで世話に・・・

・・・契約？

なんの？」

俺は契約を交わした記憶は無いぞ？

「・・・本当に理解していなかったんだな」

どこか呆れたようにため息をつく。

「お前に我は名を付けられた。

それにより、我とお前の間に契約が交わされる事になった」

「・・・えーと、その契約でメリットとデメリットは？」

「メリットは水の精霊を無条件に従わす事が出来る。

まあ、最大量はお前次第だがメイジで言う、スクエアクラスは楽に

使えるだろう。

デメリツトは・・・

強いて上げれば力を使う時は瞳の色が変わる位か。
深い蒼に変わる。

人前でいきなり使えば、騒ぎになるぞ」

何かいきなり凄い事になった。

俺は水の精霊魔術はそんなに得意では無い。

火や風は日頃から使っているからスクエアクラスにギリ届くぐらいだが、水はラインクラスぐらいだろう。
それがいきなりスクエアか。

・・・平民でも精霊と契約するだけで最強になれるんじゃない？

「まあ瞳は隠して置けば大丈夫だろう」

俺ってこれから書類仕事だけだよね？
いくら何でも過剰戦力になるだろ。

まあ貰える物は貰えるけど。

「後は契約の力を使うと他の精霊は使えなくなる。

まあ他の精霊とも契約を交わせば2種類ぐらいは使えると思うが負担は掛かるぞ」

・・・他にも精霊がいるのか。

多分、知り合う事も無いと思うけど。

「ふん。

大体はわかった。

他に何かあるか？」

「いや、もう無いな。

我もそろそろ湖に戻る。

何か用があれば水の精霊を使いに出せばすぐに行こう」

ん？

それって・・・

「なあ、ティアは呼べば何処にでも来れるのか？」

「水脈が繋がっていればな。

流石に浮遊大陸には行けん」

それやな。

アルビオンまで行くには空でも飛ばないと。

「わかった。

用が出来たらまた呼ぶよ。

それじゃあ俺は帰るよ。

そろそろ今日のパーティーも御開きだろうしな」

「そうか。

では我も帰るとしよう」

そう言っているとルアの形は崩れていき、最後には最初から何も無かったようになった。

それを見届け、俺はパーティーの方へと帰った。

パーティーに戻った俺はパーティーを終わらせた。

貴族達はジョゼフ兄から借りた部下に宿泊先へと案内させた。

いや、今はもう正式に俺の部下か。

貴族達は国で屋敷を分けた。

下手に国の違う貴族を同じ屋敷にして争われたら大変だからな。

俺は少し貴族達が屋敷へと去るのを待ってからイザベラ達を見つけて声を掛ける。

「おい、ちびっ子。

もうそろそろ帰って寝る時間だぞ」

「えー！まだ遊びたい」

イザベラが反論して来るが、その横のシャルロットは既に寝かけてる。

頭をコクコクと振り時々、はっ、と起きる。

「シャルロットはもう寝かけてるぞ。

イザベラも今日はこれ位にして、明日遊べ」

「はい。

ほら、エレーヌ。部屋に戻るわよ。

寝てないで歩きなさい」

「・・・うん」

イザベラはシャルロットの手を引きながら屋敷へと歩いて行く。
端から見たら仲の良い姉妹だ。
これからも仲良くしてくれよ。

「アニエス、貴族達がみんな帰ったら軽く片づけてからみんなに休むように言ってくれ」

「・・・分かった」

ん？

「アニエス、どうした？」

何かアニエスの様子がおかしい。

「あ！いや！何でも無い！

ただ・・・」

「ただ？」

「・・・ティキ、何か変わった？」

「・・・何が？」

「いや！何となく何だけど何時もと違う気がする」

ん？何時もと違う？

俺は何時もどおりだと思うけど・・・

あ。

もしかして。

ルアと契約したからか？

「あゝ、何か自信は無いけど検討は付いたかな？
アテナの家で説明するから終わったら来てくれ」

「うん、分かった」

そう言くとアニエスは片づけをしてるみんなの所へ向かった。
手持ち無沙汰になった俺は一足先に屋敷へ戻り眠りに付いた。

「おかえりー」。

・・・ティキ、あなた何か変わったのか？」

第一声がこれだ。

俺は眠りについて夢の世界に入った。
そしてドアを開け中に入り

「ただいま」

と言う。

別にここが俺の家と言う訳では無いが、何となくこれがしっくり来る。

そして、何時もの用にリビングに行く。

中ではアテナが何時ものように寝転がりながら本を読んでいて、

「おかえりー」

と無意識に言っていた。

そして何かに気づいたように俺に向き

「ティキ、あなた何か変わった？」

である。

アニエスもそうだったけどアテナも、そんなに変わったか、俺。少なくともイザベラやシャルロット・・・は除外しておこう。シャルロットはほとんど寝てたから。でもイザベラは気づいて無かったぞ。使用人達も何時もどうりだった。

「あゝ、とりあえずアニエス来るまで待って」

「ふむ。分かったのじゃ」

そう言うアニエスは漫画を読み出した。

暇な俺はテーブルに有る本を適当に読み出した。

「ただいま」

「「おかえりー」」

しばらくするとアニエスが来た。

俺とアテナは本を読みながら返事をする。

それにしても遅かったな。

「あ！テキキ！

説明してよ！

私気になって寝れなかったんだから！」

気になって寝れないって遠足前の小学生か？

いや、年齢的には似たようなもんか。

と言うかそれで遅かったのか？

寝たらすぐに聞けるのに寝れない。

・・・まあアニエスの事だから好きにしたら良いけど。

「ふむ、妾もそろそろ教えて欲しいな。

あなたは何処か何時もと違う。

何処が変わった、とまでは解らんがな」

「変わった、と言うかちょっと契約した」

「ふゝん。

誰と？」

「水の精霊と」

「ふむ、水か。

契約の証しはあるのか？」

「契約の証し、なのは分かんけど力を使う時は眼の色が深い蒼になると言ってたな」

アテナは少し考えてから

「ならばそれを見してくれ」

と言う。

でもどうすれば使えるか何て何も聞いてない。
それをアテナに言っと

「ならば、意識を自分の中に向けてみる。
何処かに契約した証しがあるだろう」

アテナに言われて俺は眼を閉じて体の中に意識を向ける。
手や足の意識しやすい所から少しずつ体の中心に行く。

胸辺りまで来ても何も無い。

それから少しずつ頭の方に行く。

注意深く見て行くと頭の奥に扉のような物がある。

少し蒼いきがする。

少し迷ってから扉を開ける事にする。

何か起きてもアテナもアニエスもいるし大丈夫だろ。

そして扉を押し開く。

すると何かが扉から出て来る気がした。

何もせずにしばらく耐えていると、収まった。

俺は意識を体から外に向けて眼を開ける。

「ふむ、確かに深い蒼じゃな」

「眼の色、変わってる？」

「うむ、契約におかしな所は無いようじゃ。どうじゃ？」

何か変わった所はあるか？」

「いや、特にこれと言って無いな」

「ふむ、ここはあなたの夢の世界じゃからな。外ですれば何か有るかもしれんな」

「じゃ、明日の昼間に試して見るよ。

アニエス、明日の予定は・・・

アニエス？」

アニエスに明日の予定を聞こうとして気がついた。

アニエスが固まっていた。

「・・・アニエス」

返事が無い。ただの屍のようだ。

仕方ない。

文句言われそうだけど。

俺はアニエスの顔の前に右手を持って行き準備する。
そして・・・

パンツ！

と、大きな音がした。

いいかんじに入ったな、と考えながらデコピンをした手を下ろしながらアニエスが復活するのを待つ。

「ティキ！痛いじゃんか！」

「アニエスが固まってるのが悪い」

やっぱり文句を言われたな、と思いながらもアニエスに責任をなすりつける。

でも、涙眼のアニエスも可愛いな。

「うぐ！でも！水の精霊に会ってたなら教えてくれてもいいじゃんか！」

「・・・はい？」

何か変な感じだな。

「ティキだけ水の精霊に会うなんてずるい！

私も水の精霊見て見たかった！」

「水の精霊に？何で？」

「だって水の精霊って聞いた話だと神秘的だ！って聞いたもん！

私だって毎日働いてるんだからたまには神秘的な物見て心を休ませるぐらいいいじゃんか！」

何か喋り方が子供みたいだ。

まあそれは良いとして、神秘的な物って・・・

「・・・ちよつと待つのだじゃ。

妾は神様の中でもかなり上の神格の女神じゃぞ？
神秘的な物なら妾で十分じゃろ」

俺も考えた事をアテナも考えたのか、アニエスに少し不機嫌そうに言った。

しかし、アニエスは

「アテナは毎日会ってるし、見ても心が洗われるような気がしない！」

アテナは落ち込んだ。

まあな。

何時もソファで寝転がりながら漫画を読んでるか、俺達とゲームするか、修行するしかないからな。

俺もアテナはあまり神秘的な気がしないな。

友達、と言うより家族とぐらいだ。

家族を見て神秘的だと思う人はいないだろ。

「あ！ティキも妾の事をバカにしておるな！」

おっと、顔にでてたか？

とりあえず誤魔化そう。

「いや、そんな事無いぞ」

「本当か！？」

アテナが嬉しそうに俺を見てくる。

早速のアニエスもだけどこいつら可愛いな。

「アテナは十分神秘的だと思うぞ？」

「・・・何故疑問系なんじゃ？」

「・・・ナンノコトダ？」

「何故片言なんじゃ！？
もう良い！」

どうせ妾は神秘的じゃ無いんじゃ！」

と、アテナは拗ねて部屋に走って行ってしまった。

トテトトテと走って行くアテナは可愛らしいのだが、大人どころか特殊な力を持った転生者でさえも圧倒する力を持つてるんだから人は見掛けによらないな。

・・・人じゃなくて神様が。

「ティキだけずるい！私も水の精霊に会いたい！」

アニエスは相変わらず水の精霊に会いたいと詰め寄ってくる。

「あゝ、分かった分かった。

明日の会わしてやるから落ち着け」

「本当！」

眼を輝かせるアニエス。

本当に子供みたいだな。

「ああ、本当だ」

まあ、ただの口約束だからな。

都合が悪くなつたとも言えば・・・

「嘘だつたら奥様に言いつけるからな！」

・・・絶対に約束は守ろう！

よい子のみんな！約束は守らなきゃ駄目だぞ！

この歳になってまで着せ替え人形にされてたまるか！！

この後はアテナを慰めに行ったんだが思ったより酷く拗ねていて説得に時間が掛った。

まさかアテナが機嫌が直るまで2時間も掛るとは思わなかった。とりあえずアテナに本を買ってやる事になった。

俺の奢りになるので俺も付いて行く。

どっかで換金しないとな。

あれ？そう言えば・・・

・・・俺が前世の世界に行っているのか？

第18話

次の日。

俺は暇だった。

本格的なパーティーは夜からだし、昼間する事と言えば出会った貴族達と軽く会話。それが終われば俺がする事なんて無い。

アニエスやカズキ達の使用人は湖を眺めたり、ボートに乗ったりと自由な時間をすごしている貴族達の対応で忙しいそうだ。

両親や兄達は貴族達と話している。

イザベラは昨日夜更かしをしたのか、まだ熟睡中。

シャルロットは持参した本に夢中だ。

必然的に俺一人暇なので沿岸を歩き人の少ない所へと歩く。昨日試せなかったティアとの契約の力を試そうと思ったのだ。

暇だし。

「これぐらい離れてたら良いかな？」

俺は貴族達が集まっている昨日のパーティー会場から大分離れた所まで来た。

一応の確認に風の精霊に頼み周りを確認する。

「・・・あん？」

風で半径1リーグ程を調べたのだが、俺よりもさらに500メートル程パーティー会場の反対側を歩いている人を見つけた。

それも身なりの良くパーティーに来ていた貴族だろう。

桃色がかったブロンドの髪を持ち主だ。

・・・俺には一人だけ心当たりがあるが、まさかな。

俺はその人物の方に歩き出す。

しばらくすると肉眼でも見れる所まで来た。

桃色がかったブロンドに身長割りには大きな胸。

湖を見つめる横顔は間違いなく昨日会ったカトレアだ。

この世界の情報は知らないが原作では確か病弱だった筈だ。
世界中の水のメイジが調べても解らなかったとか。

こんな所で何してんだ？

とりあえず声掛けるか。

「あゝ、カトレア嬢。

こんな所を一人で歩いてると危険ですよ？」

「・・・オルレアン公？」

カトレアが驚いたようにこちらを見てきた。

「どうしたオルレアン公爵このような所へ？」

「え〜と、私はする事が無かったので少し息抜きに。

ここは私の領地だしすぐ近くに住んでいるのでたまに歩き回るんです。」

でもこんな所を美しいか弱い女性が一人でいる方が不思議でしょ。」

「・・・私は少し考え事を」

「考え事？」

「・・・」

それっきり黙ってしまった。

何か地雷踏んだ？

何か言うのも躊躇われるので俺は黙っていた。

「・・・少しだけ聞いてくれますか？」

「私なんかで良ければ」

「ありがとう」

そう言つて彼女は微笑んだ。

アニエスやアテナの笑みは可愛いと思うが、カトレアの笑みは綺麗だと思う。

「私は生まれてから病弱に掛かっています。

小さい時は体が弱いぐらいたったのですがいつの間にか大きな発作を起こすようになりました。

父様はそんな私の為にハルケギニア中から優秀な水のメイジを集めてくれました。

でも、誰も私を治す事は出来ませんでした」

とりあえずは原作通りか。

確か原作でもカトレアの病気は出て無かったな。

「母様や姉様、ルイズ、家の使用人達に領民まで私の事を心配してくれてます。

私はみんなが居てくれるだけで幸せなんです」

ふむ。

家族だけじゃなくて、使用人に民までが心配してくれるのか。
ラ・ヴァリエール公爵は善き人のようだ。

この間調べたドレイド男爵は心配する所か、死んだりしたらみんなが喜ぶだろうな。

凄い違いだ。

「でも流石に何時までも迷惑ばかり掛けても居られません。

私の治療費も掛かりますし、みんなに迷惑ばかり掛けているのも申し訳無いです。

だから私は父様にお願いしました」

「お願い？」

「私を縁切りしてほしいと」

「縁切り！？」

なんで？

病弱でも公爵家に居れば不自由無く暮らせるだろ。

そんなに嫌だったのか？

みんなに迷惑掛けるのが。

「でも父様は認めてくれませんでした。」

そりゃ可愛い娘を家から放り出すなんて出来る人じゃ無いだろ。

「それでも頼み込む私に父様は分家にすると言いました。

私はそれも断ろうと思ったのですが父様はこれだけは譲らないと」

うん。やっぱり良い人だ。

「それで私はもうすぐ分家の屋敷に行く事になるのですが、その前にこのパーティーに行く事になりました。

私は初めて領地を出て更に国まで出て来てこんな美しい湖まで来れました。

ただ、覚悟はしていたのですがこちらのパーティーでの貴族のやり取りを見て本当に私にも出来るのか不安になりました。

分家に行っても大丈夫なのか？と不安になり一人で考え事をしている間に気が付いたらここまで来ていたんです」

・・・いやゝ大変だね。

としか言えない。

俺に出来る事なんて無いだろ。

もしかしくなくても何か気の利く事を言わないとダメな場面だよな？

・・・何言えばいいんだ？

「・・・あゝ、とりあえず大体の事情は分かった」

彼女は俺を見て来るが、本当に俺は気が利く事が出来ないと思う。

「うゝんと、みんなに迷惑掛けたく無いって言ってたよな。

でもさ、誰にも迷惑掛けないなんて誰にも出来ないぞ？」

「それは」

「人が生きて行くには絶対に誰かに迷惑を掛けるんだ。
王族だろうが、貴族だろうが、平民だろうが、動物だろうがな。
王族なんか世話人が何人もいるし、貴族なんて無駄にプライド高い
し、平民だって誰にも迷惑掛けないなんて出来ない。動物だって生
きる為に他の動物を襲ったり人間が作った物食ったりする」

「・・・」

カトレアは何も言わずただ聞いている。

「それに何より生き物は産まれたらまず子供だ。
子供が誰にも迷惑掛けないなんて有り得ない。
そんないたら怖いぞ。」

「1歳の子供が自分で料理して、自分で食って、自分で小便して、自
分で稼いで、何てしてたらな。」

「普通の子供なら料理も親にしてもらっし、稼いで貰う、1歳なら小
便も手伝ったもらわな出来ねーぞ。」

「何より生きる為に必要な事を教えて貰う。」

「何も知らない子供を放り出したらすぐに死ぬぞ。」

「生き物はみんな何かに迷惑を掛けてる。」

「でも迷惑を掛けられもある程度はみんな許してくれるんだ。」

「少し迷惑掛けただけで怒ってたらみんな喧嘩ばっかだ。」

「それに親つてのは子供には甘えられたいらしいぞ。
子供の為なら迷惑を掛けられても親は助けてくれる」

「転生してから母さんに言われたんだ。」

転生してノアメモリーが馴染んだ後は出来るだけ迷惑を掛けないようにした。

でもそれを母さん気に入らなかったらしい。

「もつと甘えて良いのよ。

と言つか甘えなさい！」

って言われた事がある。

「だから迷惑何ていくらでも掛けたら良いんだよ。
助けて欲しいなら助けてって言えば良い。

お前の周りにいるのは誰も助けてくれないのか？」

カトレアはフルフルと顔を横に振る。

「ならいくらでも助けてもらえ。

迷惑を掛けてやれ。

ラ・ヴァリエール公爵も公爵夫人も、エレオノール嬢もルイズ嬢も
助けてくれるよ。

俺だって出来る事なら助けてやるさ」

俺が言えるのはこれぐらいだ。

これでもかなり考えたんだぞ？

年齢+前世の年齢〃彼女いない歴、だからな。

女性の扱いはしらん。

アニエスやアテナはどちらかと言えば子供だ。

・・・というかよく考えたら、年齢15+前世25でもう精神年齢
40歳！

・・・彼女探そ。

目標50歳までに童貞卒！

・・・何か悲しいな。

「・・・ありがとう」

カトレアは少し微笑みながら礼を言ってきた。

「良しさ、これぐらい」

綺麗な女性、て言うか少女だな。
が悩んでるんだからアドバイスぐらいはな。

「・・・それよりも、それが素なのね？」

「素？」

何の事だ？

「オルレアン公、始めと喋り方が違いますよ？」

「・・・あ」

忘れてた。

いつの間にか普通に喋ってた。

今は公爵だから丁寧に話さないといけなかった。

「あゝ、この事は内緒に」

「うん。

じゃ、条件があります」

条件？何の？

「あゝと、何をすればよろしいでしょうか？」

「ではまず、普通に喋って下さい。

素の状態の方が親しみ易いです。

もう一つは・・・そ、その、カトレアと名前を呼んで下さい。
出来れば優しさと素直さといったわりをつけて・・・」

「そんな事で良いのか？」

「はい」

ふむ。

素で喋って良いのはありがたい。

固い喋り方は正直面倒だ。

で、もう一つは優しさと素直さといったわりをつけて名前を言う事ね。

・・・難しい注文だ。

確か前世のアニメでC・Cが言ってた項目だな。
世界を統一したかの皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアですら成し
遂げられなかった偉業を俺にこなせと？

「カトレア」

「何だか素直さが足りない気がします」

「・・・カトレア」

「やっぱり素直さが足りないです。
後いたわりも」

「カトレア」

「うゝん素直さはましになりましたがいたわりが減った気がします。後優しさも」

「・・・勘弁してください！」

負けました。

負けましたよ！

勝てませんよ、こんなの！

彼女いない歴、40年のベテランだぞ！

そんな事急にできるか！

「ふふふふ。

良いですよ。ではカトレアと呼び捨てにして下さい」

「分かった。

ならカトレアも俺の事をティキって呼んでくれ」

俺だけ呼び捨ては不公平だ。

それにオルレアン公爵なんて言われても反応できん。

それならティキと言われた方が良い。

「・・・ティキ」

「何だ？」

「呼んでみただけです」

とクスクスと、でもどこか嬉しそうにカトレアは笑う。
うゝん。

こんな美少女に名前を呼ばれるのは何かくすぐったいな。

・・・俺ここに何しに来たんだっけ？

確か暇だから昨日ティアとした契約の力を試しにきたんだよな。

ティアの契約？

確かティアは契約の力を使えば水の精霊を自由に使えるって言うってた。

メイジで言えばスクウェアクラスの。

・・・これでカトレアの病気、治せるんじゃない？

・・・試すか。

「カトレア、ちょっと良いかな？」

「どうしました？」

「あゝ、もしかしたらだよ？」

もしかしたらカトレアの病気は治るかもしれない」

「・・・本当に？」

えっ、でも、確かティキは魔法は使えないんじゃない？」

「あゝ、色々あってね。

駄目元で試してみたいんだ。

勿論、嫌なら止めとくが」

初めての物を人に試す気にはならない。

それに会って2日目の人間の言う事は信じれないだろ。

「・・・じゃ、お願いします」

「・・・良いのか？」

上手く行く保証は無いぞ？」

「良いんです。

私はティキを信じます」

そう言い俺を真っ直ぐ見てくる。

ここまで言われたらやらなきゃ男じゃ無いな。

「分かった。

ちよっと待っていてくれ」

俺は意識を体の中に向ける。

場所は分かってるから前よりも簡単に扉を見つけられた。
そして扉を開く。

ゆつくりと。

すると前のように扉から何かが出て来る。

俺は体を蠢く物にしばらく耐える。

すると蠢く物が俺に溶けるように消えた。

そして眼を開ける。

「ティキ、眼の色が」

カトレアが驚いている。

俺の眼は今、ガリア王族の縁のある青ではなく、深い蒼になっている。

そして気づいた。

俺の眼に精霊が写っているのに。

何時も俺は精霊が見えているが数はそんなに多くないし、色は赤、緑、青、茶色だ。

でも俺の眼に写っているのは青だけ。

それにいえば数が多い。

何時もと比べ物に成らない位に。

更に言えば見えるだけでなく感じる。

水の精霊を。

見なくてどこにいるか分かる。

半径10リーグにいる水の精霊が手に取るように分かる。

凄いな、これ。

これはもうチートだ。

今なら一個大隊を相手にしても負けないと思う。
勝てるかどうかは分からないけど。

「あゝ、とりあえずこれ飲んで」

そう言い俺は水の精霊を集めて水を作りだす。
無重力のように水が丸く浮いている。

ただの水に見えて水にあらず。

実はこれ、ティアの体の一部、精霊の涙と同じような物だ。
普通の水に比べて、水の精霊が入っている量が凄い事になっている。
更にこの水にいる精霊全てとリンクしているので、カトレアが飲めば体の隅々までの事が解る。

「これを・・・ですか？」

「ああ」

カトレアは手を合わせて器を作る。
そこに俺が水を動かす。
それをカトレアは恐る恐る口にする。

俺は半径10リーグ をもリンクできる集中力を全てカトレアが飲んで
いる水に注ぐ。
カトレアの体の以上を逃さないように注意する。

「・・・これは」

そしてしばらくすると俺はある物を見つけた。
体の器官に普通の人間なら無い物が有った。

多分これはメイジの元だと思う。

メイジの魔法に必要な物は精神力だ。

でも精神力は生き物なら何でも持っている。

平民だろうが動物だろうがな。

それでも魔法が使えるのはメイジだけ。

ならば何か人間と違う器官がある筈だ。

恐らく俺が見つけた器官はそれだろう。

だがそれだけなら別に良い。

この世界にメイジなんて何人もいるんだから、害は無いだろ。

だが、この器官にできている物は別だ。

黒い細胞がこの器官にくっついている。

多分だが、これは癌だと思う。

生前に見たテレビでやっていたのを覚えている。

生物は細胞を一定の量にしている。

増えすぎず、減りすぎないようになっているらしい。

しかし癌は生体の細胞がコントロールを失って無制限に増殖するようになったものである。

こうしてできた異常細胞の集団が「腫瘍」で細胞に垣根を作らないので他の細胞にまで移る事がある。

しかしカトレアは運が良いことに他に転移していない。

全てがメイジの器官に出来ている。

少し大きいが何とかなるだろう。

「カトレア、今まで治療してきたメイジ達はどうしてんだ？」

「えーと、みんなどんなに調べても解らないから取りあえず体の自己治癒力を促進させる魔法を使ってるって言ってた。

私は魔法を使ったら何故が悪化するのですが、これも解らないから余り魔法を使わないようにとは言われました」

あゝ、だからか。

メイジ達が原因が解らなかつたのは恐らく、体の異常を調べたからだろう。

癌は元々、体の細胞だった物だ。

体の異常を調べる魔法にはギリギリ引つかからなかつたんだろう。

癌の大きさについては治癒力促進の魔法がいけなかつた。

カトレアの歳の割に癌が大きいなと思つたんだがこれが原因か。

癌は体の細胞が増えすぎて変化した物だ。

なのに更に細胞を作ったら余計に癌が大きくなる。

魔法を使わなかったのは助かったな。

癌に犯されてる所を無理やり使ったらこれ以上悪化してただろう。もしかしたら魔法自体が癌を促進させてたかもしれない。

「あゝ、カトレア。」

その何でもかんでも自己治癒力促進は止めさせる。

そんなのする位なら痛み止めでも飲んでいた方がまだ」

「そう・・・なのですか？」

「少なくともそんなのをしなかったらここまで酷くは成らなかったな」

「そんなに・・・」

絶句しているカトレア。

そりゃな。

治療してくれてると思ったら、実は悪化させてました、なんて笑えんのだろ。

「・・・カトレア、多分だがこれは治せる」

「本当ですか!？」

「ああ。
ただな、もしかしたら病気は治したら魔法が使えなくなるかもしれない」

これは貴族に取って致命的だと思う。

俺やジョゼフ兄は王族だから陰口だけだが、貴族が魔法を使えないのはやばいな。

貴族は魔法を使えてこそ貴族、だと思ってる奴もいるだろう。

「・・・それで私の病気は治るんですか？」

「保証は出来ないが可能性はある」

「ではお願いします」

余り悩まずに即答した。

「本当にいいのか？」

「ええ」

強い覚悟を感じた。

「それに・・・」

「それに？」

「あなたは私が助けを求めたら助けしてくれるんでしょ？
なら私はあなたをしんじる」

・・・はあ、これは失敗できないな。

「分かった。

それじゃ後ろを向いて眼を瞑ってくれ」

「うん」

カトレアは後ろを向き眼を瞑る。

癌の治療方法はいくつかあるが、主に患部を取り除く事が多い。
前世ならメスやら何やらを使って切り取るがこの世界に有る訳無い。
更に抗癌剤など有ったらびつくり所じゃ無い。

しかし俺は何とか出来る。

ノアメモリーが有るからだ。

ノアメモリー第3使徒「快樂」の力がある。

原作のティキはこの力で体に傷を付けずに心臓を取り出していた。
ならば同じように癌の腫瘍だけを取り出せばいい。

腫瘍の位地は水の精霊のお陰で分かる。

俺は手をカトレアの体の中に入れる。

入れると言っても選択して無いので俺も触って無いしカトレアは何
も感じないだろう。

そして腫瘍の位地まで手を持って行く。

「カトレア、まず間違いなくかなりの痛みが有ると思う。
でも直ぐに治す。
だから少しだけ我慢してくれ」

「分かった」

そして俺は腫瘍を選択する。
そして俺はそれを掴み、一気に引き抜いた。

「っ！?!?」

カトレアは上げそうになった悲鳴を何とか抑える。

俺は腫瘍を投げ捨て直ぐに水の精霊を集めて水を作る。

前に作ったのよりもさらに圧縮して。

そしてそれを苦しんでいるカトレアに飲ませる。

精霊の涙は秘薬中の秘薬だ。

これだけ圧縮したら傷ぐらい治してくれるだろう。

そして効いてきたのだろう。

少しずつカトレアは落ち着いてきた。

カトレアの顔は憔悴している。
当たり前か。

体の中の物をいきなり引きちぎったのだ。
その痛みはもの凄いい事になるだろう。

しばらくするとカトレアは落ち着いた。

疲労はあるみたいだが痛みは無いらしい。

一応確認の為にカトレアの中の水の精霊を使って確認するが異常は
無い。

これで大丈夫だろう。

「・・・これで大丈夫なのですか？」

「ああ、少なくともしばらくは何とも無いだろう」

俺は疲れているカトレアを近くの座るのに丁度良い椅子に座らせ、
その横に座る。

「そう、ありがとう」

カトレアは疲れが見えるが明るい笑顔を向けてきた。

・・・この笑顔が守れたなら頑張ったかいがある。

「そうだ、魔法を使ってみるといい」

「魔法・・・使えるのですか？」

「ああ、何とも無い、とはいい切れないが大丈夫だろう」

水の精霊でみてみた時、思ってたよりも回復していた。
これなら魔法を使っても問題無いと思う。

「では、イル・アース・デル」

カトレアが使ったのは錬金の魔法。

彼女はすぐ近くに有った小石を拾い錬金した。

小石は鉄になり彼女の魔法の腕の高さを表した。

「凄い・・・」

前は魔法を使うと発作を起こしてたのに・・・」

そりゃ原因を文字通り抜き取りましたから。

「大丈夫か？」

「疲れないか？」

「大丈夫、じゃ無いかな？」

発作じゃ無いけどちょっと眠くなってきたけど・・・」

疲れてる所で魔法を使ったら眠くもなるだろ。

「寝ててもいいぞ。

しばらくはここに居るから」

「そう、なら少しだけ」

そう言うとカトレアは俺の膝の上に頭を起き寝転がった。

膝枕？

野郎の膝なんか嬉しく無いだろうに。

それでもカトレアは安心したように眠りに付いた。

カトレアが寝た事により俺は暇になった。

しばらくカトレアの寝顔を見ていたが途中でまだティアとの契約の力を使っている事に気が付いた。

俺は意識を頭の中に向けて開いたままの扉を閉じる。

それと同時に体が酷く疲れたが眼を開けると何時も通りの湖が広がっていた。

酷く疲れた俺はカトレアを膝枕しながら、久しぶりにただ寝るのも
良いだろうと思い、風の精霊で周りに結界を張って久しぶりの眠り
に付いた。

第18話（後書き）

どうもこんにちは？こんばんは？、作者です。

作者はこの作品のカトレアの病気をメイジが魔法を使うのに必要な器官に出来た癌だと言うことにしました。

癌にすればカトレアの殆どの症状を説明出来ると思ったからです。多分、おかしい所があるとありますが、この作品はこういう物だ、と思ってくるたら良いと思います。

これから先もご都合主義になると思いますが、よろしく願いします。

第19話

「何でこんな事になったんだ？」

「あなたが精霊と契約したからだと思いますよ？
あつツーパーアです」

「良いじゃ無いか、テイキ。
他の精霊とも契約出来るかもしれないぞ？
ふっ！ストレートだ！」

「・・・フルハウス」

「な！何でみんなそんな強いのよ！
ワンペア・・・」

上から順に俺、カズキ、アニエス、シャルロット、イザベラである。

俺達は今馬車に乗ってポーカーをしている。
乗っている馬車は一目で貴族と分かる物だ。

従者は最近、俺が作った騎士団の団長とその弟子、ラッハとアルア
だ。

旅をしているのである程度の食料を積みながら馬車を進める。

「・・・おじ様は何？」

「うん？」

俺は手札を聞いてきたシャルロットに渡す。

「・・・ストレートフラッシュ」

「何でおじ様はそんなに強いのよ！」

「ティキ！またイカサマしたな！」

「ハハハハ、ソナワケナイダロ？」

「ティキ！片言になってるぞ！」

「おじ様！大人気ないですよ！」

「勝てば良いんだ勝てば」

「ティキさん、流石に可愛いそうですよ。
アニエスもイザベラも涙眼ですよ」

カズキに注意されてアニエスとイザベラを見る。

あゝ確かに。

ちよつと遣りすぎたか。

「分かった、悪かったよ。
もうしない」

「「本当だな！？」」

「ああ」

とアニエス達を宥めがら俺はこうなったきっかけを思い出した。

カトレアを治した後、俺達は寝てしまっていた。

気がつくともう夕暮れ時だったので、カトレアを起こしてパーティー会場に向かう。

「そういえばティキに治療してもらった時に眼の色が変わってたのはどうして？」

それにティキは魔法が使えないって聞いてたんだけど？」

「あゝ、この湖にさ、水の精霊がいるだろ？」

「あゝ、噂程度ですが聞いた事があります」

噂ね。

水の精霊の前で誓ったら決して破られる事が無いってやつかな？

「それで、俺はその精霊と契約した訳」

「・・・はい？」

「だから契約したの」

「・・・水の精霊と？」

「そう」

カトレアは驚きで固まってる。

「・・・おい？」

「・・・」

返事が無い。ただの屍のようだ。

このままじゃ埒が開かない。
とりあえずカトレアの肩を掴んで揺する。

「カトレア起きろ」

「・・・は！ティキ！

本当に水の精霊と契約したの？」

「おう」

「あの、それじゃお願いが有るんだけど」

カトレアは手を合わせ俺を見てくる。
なんか昨日も似たような事があつた気がする。

「あゝ、水の精霊に会わせると?」

「よく分かったわね」

カトレアみたいに優しくでは無かったけど、同じ事言ってる奴がいたからな。
まあいいや。

どうせアニエスも会わせる約束したし。
一緒に連れて行ったら良いだろう。

「ねゝ。お願い。」

水の精霊なんて一生見る事も無い人の方が圧倒的に多い程、水の精霊に会うのは難しいのよ。
こんなチャンス滅多に無いのよ。」

へゝ、そんなに珍しいのか。

俺なんか、湖に足入れてただけで会えたぞ?

「分かったよ。」

今日の夜会いに行くから呼びにいくよ」

「本当?ありがとう」

カトレアはニツコリと微笑む。

ま、良いか。

「・・・ふむ。ティキよ。」

これは一体どういう事が説明してくれぬか？」

水の精霊、ウルティアは契約者であるティキに問い掛けた。

「あゝ、色々とあつてな」

今俺達はパーティー会場からやや離れた所に向かい会っていた。

メンバーは俺、ティア、アニエス、カズキ、カトレア、シャルロット、イザベラ、ジョゼフ兄、シャルル兄である。

本当はアニエスとカトレア、カズキだけを連れてくるつもりだったんだけど、アニエスに精霊に会いに行くからカズキを呼んでくれてって言ったら、イザベラとシャルロットも付いて来た。

どうやらアニエスがカズキを呼ぶ時にシャルロットが偶然聞き、それがイザベラ伝わり

「私達も行くわよ！」

に成ったらしい。

カズキを連れて行くのは今後の為に少しずつでもこちらの事を知ってもらわないといけないからだ。

そしてアニエス達を先に行かせ、俺はカトレアを呼びに行った。

呼ぶ所までは問題無かったのだが、カトレアと湖に向かう時にジョゼフ兄とシャルル兄に見つかった。

俺は何とか誤魔化そうとしたが、俺よりも交渉術が上手い兄達に勝てる訳無く、仕方なくカトレアが水の精霊の事を言ったのだ。それに興味を持った兄達は付いて来た訳だ。

俺達と向き合ったティアは少し引きぎみだった。

流石に契約した次の日にこれだけ連れて来たから引いてるのか？

因みにティアが少し引いているのはアニエス、イザベラ、シャルロット、カトレアからのキラキラした視線が少し逃れたかったからだ。

「紹介するよ。」

こいつが水の精霊、ウルティア。

ティア、こっちは俺の兄のジョゼフ兄とシャルル兄。

で、その前でティアを見てるのは兄達の娘のイザベラとシャルロット。

俺の後ろにるのがアニエスとカズキ、カトレアだ」

「ふむ。」

ティキの身内達か。

妾はウルティア。

ラグドリアン湖に住む精霊だ。よろしく頼む、単なる者達よ」

ティアはみんなに挨拶をする。

「・・・水の精霊に名前があるとは知らなかったな。
シャルルは知ってたか？」

「いや、僕も記憶に無いよ」

シャルル兄が少し考えてから名前の事を疑問に思い、シャルル兄に聞く。

しかし、シャルル兄知らないようだ。

まあ、俺が昨日付けたからな。
知ってる方がおかしい。

「我の名前は昨日、ティキが付けたのだ」

「ほう、ティキが？」

お前の事だ。

何か意味があるんだろ？

どんな意味があるんだ？」

「ん？

水の乙女って意味がある、ウンディーネと、家や国の守護神のヘスティアって名前の神様の名前をくつつけた。
因みに凄く綺麗らしい」

「・・・そんな神いたかな？」

まあ、この世界には居ないだろ。

それにこの世界はブリミル教だからな。

神様を祭るんじゃなくて、始祖ブリミルを祭れ！って宗教だからな。

神様の名前よりブリミルの方が知名度が高い。

と言うか、神様の名前、知ってる奴いるのかな？

「うゝん、東方の事はあまり知らないな。

ティキはどうやって知ったんだい？」

「知り合いに詳しい奴がいたんだ」

知り合いってのはもちろんアテナの事だ。

兄達にはアテナの事を言っただけから誤魔化さないとはいけない。

因みにヘステイアは東方の神様ではない。

主にギリシャ神話出てくるから、どちらかと言えばギリシヤやら辺りだろ。

エーゲ海周辺だったはずだから、この世界にもあるとしたらもう少し東南あたりかな。

「で、ティキ。

どうやって水の精霊と契約したんだ？

俺の知ってるかぎりでは水の精霊と契約した者は居ないぞ？」

「僕の知ってるのではド・モンモランシ家が交渉役だったと思うよ」

「交渉と契約や違う。」

交渉は所詮交渉だ。

契約と違い破ろうと思えばいつでも破れる。

しかし契約は破れる物じゃない。

それが精霊ともなれば尚更だ」

「ふむ。

・・・これってヤバく無いかな？」

ヤバい？

「まあ交渉役はトリスティン王国だ。

間違いない文句を言ってくるだろな」

あゝ、なるほど。

トリスティンがね。

でも、俺の契約とあいつらの交渉と関係ないだろ。

「まあ大丈夫だろ。

その辺りは俺がどうかしよう。

丸め込むぐらいならできるだろ」

なるほど。

なら大丈夫だろ。

ジョゼフ兄なら色々と裏を取って脅迫やらなんやらで出来るだろ。

そして俺達はティアの方を向く。

そこには水の精霊を囲み話し掛けている集団がいる。

もちろん、アニエス達だ。

主に話し掛けるのはアニエス、イザベラ、カトレアだ。

シャルロットはみんなが話し掛けている横でじつとティアを見つめながら会話を聞いている。

カズキは少し後ろで苦笑しながらもやはりティアを見ている。

ティアは・・・

恐らく人間に囲まれるのは初めてだろうが嫌な顔一つせずに会話している。

会話は内容は、

何年間生きてきたか？

どんな力があるのか？

水の魔法を使うコツは？

どうしてティキと契約したのか？

他にも契約した者はいろのか？

他にも精霊はいろのか？

ティアの前で誓ったら永遠に破られる事は無いって噂は本当なのか？
等々様々な事を聞いていた。

ティアも律儀に答えを返していたが、流石に俺の体の事はぼかしていた。

まあ水の精霊だし約束を守るのは当然か。

・・・？

当然なのか？

流石にティアでも何が何でも隠す何て事はしないかな？

自分の命が掛かってたりしたら。

「ふむ、他にも精霊がいるのか？」

と、いつの間にかジョゼフ兄がアニエス達に混ざってた。

「ああ、いるぞ。

火、風、土がな。

火は火竜山脈、土はゲルマニア、風は気ままな性格だからな。正確には分かんが恐らくアルビオンであろう。

あやつは空が好きらしからの」

と聞きジョゼフ兄は少し考える。

「・・・他の精霊ともティキは契約出来ると思うか？」

「断言は出来ぬが・・・

恐らくは大丈夫であろう。

他の奴らも暇を持て余してるからな。

暇つぶし位には乗ると思うぞ」

「そうか。

・・・ティキ」

「はい？

何となく嫌な予感がある。

ジョゼフ兄の顔が面白い事を考えたような顔に見えたからだ。

「お前、少し休暇をやるから他の精霊とも契約して来い」

「・・・」

厄介事きた〜！

「あゝ、ジョゼフ兄。
今ティアが行った場所を順番にスムーズに進んでも1ヶ月は掛かる
と思うよ。」

それに宿泊やら精霊探しやらトラブルやらでその倍以上掛かると思
うんだけど・・・」

流石にそんなに掛けてまで面倒な事はしたく無い。
それに領地の事もある。
今離れる訳にはいかないだろ。

「なに、1週間程は時間をやる。
必要な事は終わらして置けば後は俺の部下がなんとかするだろ。
なんら問題は無いな」

大ありだろ！
領主に成って一週間でいつ帰ってくるか分からない旅にでるなんて、
他の領主に示しが付かないだろ。

「そんなのは色々工夫をすればいい。
例えばガリア国内を移動中は亜人や野獣の討伐。
アルビオン、ゲルマニアには大使とでもすれば問題ない」

だからあるだろ！
何！？亜人や野獣の討伐って！？
他にも大使だ！？
て言うか働かすき満々じゃん！
何！？休暇は！？
休暇やるから行って来いじゃないの！？

「それは丁度いい。

実は近い内にゲルマニアとアルビオンに行かないと行けなかったんだ。

条約を結ぶため確認ぐらいなんだが、誰に行ってもらうか考えてたんだ。

だからティキ、精霊との契約のついでにちょっと行って来て」

そんなの頼むな！

何だよ！？その、ちょっとコンビニ行くついでに銀行で金降ろして来て、みたいなのり！？

条約なんかかなりの地位の奴が行かなくていいのか？

「ふむ。

ならばこれを持っていけ。

それがあれば精霊のほうから様子を見にくるだろう」

と言い指輪を渡してくる。

「それはアンドバリの指輪、

死んだ人を生き返らす事が出来る。

まあ所詮は仮初の命だから大した事はないが一応はこの湖の宝だ」

そしてティアは人を焚きつけるな！

もう兄達に行かせるき満々じゃねーか！！

「そうだな。

ではティキ、各精霊を周り契約してこい。

ついでにアルビオン、ゲルマニアに行つて来る事。

わかったな」

「・・・分かりました」

流石に正式な命令には従わないと。
はあくめんどくさい。

だけどもんどの事はまだまだ続く・・・

「じゃあ私も行く！
いいでしょ？お父様？」

「・・・私も」

「私も良いかしら？」

とイザベラが言い出したのだ。
そしてそれにシャルロットとカトレアが追随した。

「うゝむ、流石にカトレア嬢はだめだな。
他国の公爵令嬢を連れて行くのは。
トレスティンとの国際問題に成るかもしれん」

「そこを何とか出来ないでしょうか？」

ジョゼフ兄は断るがそれでも行きたいと言うカトレア。

「・・・どうしてそこまでティキに付いて行くと思うのだ？」

「ティキには私の病気を治してくれました。だから私にできる事ならしたいのです」

「カトレア嬢の病気と言えば世界中のメイジが治せなかったと言っ物ですよ。

何時の間にそんな事したんだい？」

「・・・朝のあいだにちよいちよいと」

「ティキはもう力を使いこなしているのか。速いな」

ティアは関心したように呟く。
シャルル兄も驚いている。

「ふむ。

・・・ならばこうしようか」

と、ジョゼフ兄はカトレアにこそそと耳打ちする。
それを聞いたカトレアは少し嬉しそうに

「あの、本当に良いのですか？」

「ああ、君が望むならそのようにしよう。
その変わりに今回は諦めてもらうがな」

「分かりました」

「うむ」

なにやらジョゼフ兄とカトレアは満足したような顔だ。
一体何を条件にしたんだ？

「イザベラとシャルロットは良いだろ。
ティキに色々と教えて貰ってきなさい」

とシャルル兄。

「・・・ちよつとまてよ。」

イザベラとシャルロットは流石にだめだろ。
途中に何があるか分からないし、道中は護衛は連れていかないぞ？
金掛るし。

だからイザベラ、シャルロットはだめだ」

「ではティキ、君たちが出かけている間はどうするつもりなんだい？
まさか放置しておくなんて言わないよね？」

シャルル兄の笑顔がなんか怖い。

「いや、普通に使用人に任せればいいだろ」

「それじゃ城に居るのと変わらないよ」

「じゃ城につれてけよ」

「それじゃ成長できないでしょ。」

それならティキと旅に出て何か学んできた方がよっぽどましだ」

と言うことでイザベラ、シャルロット達の同行が決まった。
子守しながらハルケギニア中を回るのは大変だ。
本当にめんどくさい。

「はあ、まさか領主に成って直ぐに旅立つ事になるなんて」

「それを言ったら僕なんて就職して一週間で国の政治に関わる旅に連れて行かれてるんですよ？」

今俺達は火竜山脈の手前の村の宿に泊まっている。
今いるのは食堂だ。

パーティーも無事に終了し貴族達が帰って行く。

もちろんカトレアも。

ただ少し嬉しそうなのが気になる。

昨日からずっとだ。

ジョゼフ兄、本当に何を条件にしたんだ？

明日は遂に火竜山脈に入る。

俺とアニエス、カズキで行く事になる。

流石に火竜山脈は危険なのでイザベラ、シャルロットは留守番だ。
護衛にアルアとラツハを残して俺とカズキ、アニエスで行く。

アルアとラツハはイザベラ達を連れて来たので護衛に連れて来たのだ。

「いいな〜。

私も行きたかったのに。

アニエスだけずるい」

「私はティキと何時も訓練してるし、仕方無いよ」

「はあ、私も魔法が上手かったら付いて行けたのに」
と、アニエスとイザベラが話している。

イザベラはジョゼフ兄より少しは使えるがそれでも全然だ。そしてシャルロットはシャルル兄の才能を継いでいて年の割には魔法は優秀だ。

その事をイザベラは気にしていた。
だから

「人に魔法の腕は関係無いだろ。

シャルロットはシャルロット、イザベラはイザベラだ。

イザベラは魔法が下手なら他の事をしたらいい。

ジョゼフ兄なんか全く魔法が使えないけど大臣に成ってシャルル兄を助けてるだろ。

イザベラもそうしたら良い。

自分の得意な事を伸ばしてそれに相応しい地位に就けば良い。

その為なら俺は手伝ってやるし、シャルロットにアニエスもいる。

だから魔法に負けない物をシャルロットに見せてやれ」

と言ってやった。

だからイザベラは原作のようにはシャルロットを毛嫌いしていない。シャルロットを目標としているが昔のように付き合っている。

ついでにアニエスとも仲は良い。

何時の間にか？

ちなみに留守番の間は少し課題を出しそれが終われば自由にしている事にした。

どうせシャルロットは本を読んでるし、イザベラは勉強してるだろ。

イザベラは思ってたよりも賢い。

このままいけばジョゼフ兄ぐらいになれるかもしれない。

ジョゼフ兄はこの世界でも

有数の大臣だ。

これでこの国は安泰だろ。

でも時には休む事が必要だろう。

その内にアテナの本でも持っていこな。

シャルロットは小説で喜ぶだろうし、イザベラも漫画辺りを持って行けば喜ぶと思う。

種類はやっぱりファンタジーかな。

もしファンタジーの世界の住人がSF小説を読んだら

と言うか既にアニエスがいたか。

あいつはファンタジーから学園物からスポコン、SF、推理小説まで何でも来い！みたいなアテナに影響されて全部読もうとするからな。

まあ本人が良いなら良いか。

因みにシャルロットは俺の膝の上に乗っている。

俺は近くにいた傭兵達から賭博で金を貰ってる。

夕食を食いに来た時にカードをしているのを見つけて声を掛けた。

少し金をチラつかせてやるとすぐに乗ってきた。

俺は最初に態とに負けて金を渡す。

調子に乗った傭兵に少しずつ勝つようにして今では逆転して俺が金を貰う。

それでも傭兵は、まだ勝てるはずだ！、と言いながら勝負して来るのでどんどん儲かる。

昔にラッハと会った酒場で勝負してる内に習った事だ。

最初に少し勝たせて後からひっくり返す。

こうしたら相手は意地でもって勝とうとして金が尽きるまで諦めない。

こうやってギャンブラーは借金を重ねるんだなとよく理解した。

俺はシャルロットにカードを見せながらどうしたら勝てるかを教える。

シャルル兄に無理やり連れて行かされたんだ。

少し仕返しのつもりでシャルロットにギャンブルを教えていた。

ラッハとアルアは外で日課の訓練中でここには居ないがもしいたら傭兵達に同情しただろう。

大の男達、それも屈強な傭兵達が子供達を連れた青年と言うにはまだ速い少年にどんどん金を擦られて行く、と言う事実には。

さて、軍資金も溜まったし、明日は登山用品でも買いに行くか。

第19話（後書き）

こんにちは。

今回は旅に出る事になりました。

領主に成ってすぐに旅立ちです。

でも1週間有ったので何時も通りにがんばって大半の仕事は終わってます。

主にティキとアニエスとカズキが。

そして次は火竜山脈に入るのでそろそろ精霊が出てきます。

何か良い名前があれば教えて下さい。

何もなければまた適当に考えますが、おかしかつても許して下さい。これからも宜しくお願いします。

第20話

「あゝ、カズキ。

あれ何とかできる?」

「さあゝ、流石に僕の技もポイズンバフォーム毒香水も効くかは分かりません」

今俺達は火竜山脈を登り真ん中辺りまで来た所だ。

火竜山脈は最初はそうでも無かったが登につれて辺りにゴツゴツした岩が多くなってきた。

「んゝ、じゃアニエス。行ってきた」

「何で私なんだ!

ここは普通ティキが行くべき所でしょ!」

「大丈夫だつて。

アニエスには色々ルルフラグメと忘却欠片を渡してるだろ。
あれくらいの1匹や2匹ぐらいは余裕だよ」

「・・・私には30体程見えるんだけど?」

「僕が数えたら35はいましたよ。

いい加減に現実逃避は止めて下さいよ、ティキ」

「何言ってるんだ?

そんな訳ないだろ。

あの岩とかその岩とかに隠れてるから全部で48匹だよ」

「逃げよう! (逃げましょう!)」

と言いながら脇目も振らずにアニエスとカズキは山を下って行く。
あいつら、俺を置いて行きやがった！

「グオオオオオー！！」

「『グオオオオオー！！』『グオオオオオー！！』『グオオオオオー！！』」

特別に大きい一匹を代表に他の奴らも吠えだした。

あゝ、流石にヤバいかも。

俺は風の精霊も使い全力で逃げ出した。

「ハアハア、流石にヤバかったな」

途中でアニエスとカズキを拾い逃げ切った。

「まさかあんな所に火竜があんなにいるとは」

「仕方ないさ。」

火竜山脈何だし」

「でもあれはいくら何でも多すぎだよ」

カズキ、俺、アニエスは愚痴を言いながら深呼吸をする。

火竜から逃げる為に全速力で走ったからな。

仕方ない。

しかし、どうやらあそこは火竜達の巢のようだった。

登る事しか考えて無かった俺達はいつの間にか巢の中に入っていた

みたいだ。

イザベラ達を置いてきて良かった。
子供の足じゃ確実に追いつかれていた。

「そう言えばティキは火の精霊の居場所はしってるの？」

「・・・」

「・・・」

やば、どうしよう？

登る事しか考えてなかった。

とりあえず山の頂上に登ったら会えると思ってた。

「まさかティキに限って居場所も知らないで登ってるなんて言わないよね？」

アニエスは笑顔だが、目が怖い。

「ダイジョウブ、ダイジョウブ。
ナニモシンパイスルナ」

「はあ、やっぱり知らなかったんだ」

「仕方無いですよ。」

「ティアも居場所は知らないって言ってたましたし」

「でも登るなら何か手掛かりが有ると思うじゃんか」

「確かに」

「・・・すまん。」

実は風の精霊で周りを調べてるんだが、火の精霊が多すぎてな、肝心な火の精霊が見つからないんだ」

「ティキ、言いたい事は分かるけど、訳分らない文に成ってる」

アニエスからの確な突っ込みを受けた。

「で、これからどうするんですか？」

とカズキが聞いてくるが正直迷ってる。

このまま真っ直ぐに登るのが一番速いのだが火竜の巢がある。かといって回り込んだらかなりの時間が掛かる。

速く登る為に荷物は少なめにしているから出来るだけ速く登り速く降りたい。

「やっぱり正面突破？」

一応確認のようにアニエスが聞いてくる。

しかし、これしかない。

「はあ、固まったままだとなるからバラバラに行くか。
ほれ、通信用の水晶」

と言いながら俺はカズキに透明な水晶を渡す。

アニエスは既に渡してる。

「これは？」

「伝説の勇者の伝説に出てくる忘却欠片。ルールフラグメ

効果は登録した相手との通信ができて相手の位地もわかる。

オマケに登録者以外は使えないと言う優れもの。

携帯代わりに丁度いいだろ」

何分この世界には遠くへ通信するような物は一切無い。

全てが人からの情報なので、かなり歪曲する。

最新の確かな情報が1ヶ月前の物なんてよくある。

一つの所だけじゃなくて色々な所から聞き、真実性のある情報を探し出すのは意外と時間がかかるのだ。

「分かりました。

ありがたく頂きます」

と言いカズキは水晶を手取る。

そして俺とアニエスの水晶の情報を登録した。

「それじゃ解散。

1時間後に巣を抜けて連絡を取り合おう」

「「分かった（りました）」」

と言い俺達は別れた。

アニエスは右側、カズキは左側、俺は正面に行くことになった。

あいつらならほっといても火竜の4〜5匹ぐらいは相手に出来るだ

る。

あいつらが火竜を引きつけている間に俺は目立たないようにこっそりと行きますか。

アニエス side

「やっぱりいっぱい居るな」

私は今、火竜の巢の右側から回り込んだのだがこちらにも火竜が沢山いた。

ざっと見て10匹ぐらい。

1匹ずつなら問題ないけど纏まって掛かって来られたらどうしようも無い。

どうしよう？

・・・そう言えば、アテナが買ってきたげーむとか言うやつで、潜入するのがあった。

アテナは主人公の事を蛇って言ってた。それは確か、敵に見つからないようにする為に違う所に物を置いたり、音を鳴らしたりして近づいて来た敵を後ろから締め上げて、武器や食料を強奪するげーむだったと思う。

・・・火竜に効くかな？

あんなに大きいのは私じゃ締め上げるのは無理だよ。

まあ困ぐらいなら大丈夫かな？

「闇よ、あれ！」

私は左手の薬指に付けた黒い指輪を振る。

ティキに貰った忘却欠片の一つ、「黒叡の指輪」

これは闇を自由自在に操る物。

私はそれで闇でできた犬を6匹を作る。

私じゃこれが限界。

そして、この犬を更に右側に行かせる。

そして、

「アオオオオーン！！」

と一斉に鳴かせる。

すると火竜達はびっくりして犬を見た後に全員で犬に向かって飛び出した。

巢に侵入した侵入者を撃退しに行くのだろう。

犬を逃げるように操り時間を稼ぐ。

暫くすると全ての火竜が巢を出て侵入者を撃退しに行った。

「よし、この隙に・・・」

私は見づかり難いように身を低くして巣の中に行く。

まだ大丈夫だ。

火竜達は犬の相手に夢中だ。

まだ・・・

まだ・・・

まだ・・・

ピキ

ビクッ！！

何かが割れる音がした。

私はびっくりして固まってしまった。

ピキ、ピキ、ピキキ

すぐ近くで何かに輝が入るの音が聞こえる。

私は動けずに固まったままだ。

ピキ、ピキピキ・・・

キュウ！キュウ！

輝が入る音が終わり、何かの鳴き声が聞こえる。

私はそうつと起き上がり鳴き声の音源を覗きこむ。
そこにいたのは・・・

カズキ side

「うーん、どうやって抜けましょうか？」

僕の前には20匹程の火竜が居るのですがどうしましょうか？

一応は僕が使う風鳥院流絃術には相手を動けないようにする技もあるのですが、竜に効く自信がありません。

と、なると僕が持つ対抗手段が毒香水しかありません。

丁度、相手を眠らす物があります。

しかし、これは風上で使わなければ相手に届かないのですが、僕がいるのは風下です。

これを使うにはこの巣を抜けて風上に行く事ですが、まず間違いない見つかるでしょう。

詰まりは20匹いる火竜の攻撃を躲して風上まで駆け抜けてしまわ

ないと行けません。

ハア、大変です。

2週間程前まではこのまま村で暮らして行くと思ってたのに、いつの間にか20匹の火竜を一人で相手にしないといけなくなるなんて、一体僕は何処で選択を間違えたのでしょうか？

まあティキ達と一緒に居るのは中々楽しいのでいいのですが。

さて、時間も有りませんしそろそろ行くとしますか。

僕は火竜に気付かれないギリギリまで岩の影に隠れながら進んで行きます。

幸か不幸かこちらが風下なので火竜に臭いでバレる心配はありません。

その代わりに毒香水が効かなくて危険な所を通る訳ですが。

そしてタイミングを計り……

飛び出しました。

出来るだけ姿勢を低く速く移動します。 このまま見つからずに行ければ良いんですが。

火竜達の巣を半分程抜けてまだ見つかりません。

6割……

7割・・・

とここで気を抜いたのがいけなかったのでしょう。

見つかってしまいました。

ふっと視線を横に向けた所に子供の火竜がいました。

興味深そうにこちらを見ています。

ジーーーー

・・・（汗）

この時にまだ走っているば良かったのですが、つい足を止めてしまいました。

そして子供の横にいた火竜が子供の視線に気づきその視線の先を追って・・・

バツチリと眼が合いました。

「グオオオオー！」

と叫ぶ声を聞き僕は走り出します！

もう見つかりにくいように姿勢を低くする必要ありません！

ただひたすら走ります！

回りの火竜に見つかろうとも無視して走ります！

「グオオオオー！」

と目の前に火竜が回り込んでブレスを吐いてきました。
火竜の口から炎が迫ってきます。

「風鳥院流絃術「守の巻」第拾五番の参。

繭玉の楯！」
けんぎよくのたて

僕は髪に付けている鈴を手にとり振る。

繭玉の楯は琴絃を自分の周囲に張り巡らせ、防御する技だ。
それを僕の前に絃を前を集中的に張り巡らせて繭子のようにして炎を防ぐ。

「っ！熱！」

流石に全部を防げる訳では無いので熱は上がる。

何とか防ぎ、火竜のブレスが弱まった所をまた走り出します。
目の前の火竜が尻尾で僕を殴ろうと振り回してきますが、

「風鳥院流絃術「守の巻」第拾参番の六、鼎絃の楯！」
ていげんのたて

鼎絃の楯ていげんのたて たった3本の絃で相手の攻撃を受け流す技。
受け流した力をそのまま相手に返す事も可能ですが火竜にそこまで
出来る自信は無いのでただ流すだけだ。

目の前の火竜は全力の尻尾攻撃を受け流されてバランスを崩した。

僕はその間に火竜を通り過ぎて腰のポーチから小さな瓶を取り出します。

鈴を杖にウインドの魔法を使い瓶の蓋を開けて中身を火竜達の下へと飛ばす。

催眠香

相手を眠らす毒香水である。

人間ならしつかりと効くのだけど・・・

ズーーン！

と何かが倒れる音がした。

見てみると回りの火竜達は眠ってしまったみたいだ。

良かった！

ちゃんと効いた！

目の前に居る火竜も酷く眠そうになり遂には倒れて寝てしまった。

ハア、これで安全だ。

とりあえずもう襲われ無いように上を目指しますか。
後で連絡を入れれば合流できるでしょう。

テイキside

「・・・なぐんで火竜達は動かないんだろね」

俺は今、最初に火竜に囲まれた所の手前まで来ているのだが、火竜が多い。

かれこる30分程待っているが、火竜達に変化は無い。

これじゃあ

アニエスやカズキが暴れたらそっちに行ってる間にこっそり通り抜けよう大作戦！

が決行できない！

あいつらは一体何してるんだ！？

既にアニエス、カズキは無事に巣を通り抜けてのんびりとくつろいでいます。

くそ！

こうなったら自力で行くしか無いのか？

だけど目の前には火竜が38匹いる。

全ての火竜に見つからずに通り抜けるなんてできないぞ！

こうなったら水の聖痕ステイグマを使うか？

いや、まだ一度しか使って無いがあれば負担が大き過ぎる。

まだ先があるのにこんな所で寝てたら死んじゃう。

じゃ他の手を考えてみるが良いてが無い。

いつその事、火竜の巣に切りかかるか？

左側を回れば全ての火竜が寝てるので安全に通れます。

よし、とりあえずはバレないように隠れながらゆつくりとでも素早く通り抜けよう。

正面の火竜達を見る。

火竜達は思い思いの時間を過ごしていた。

眠っている者、子供同士でじゃれ合っている者、子供の世話をしている者。

・・・火竜だけど者でいいのかな？

まあどつちでもいいや。

岩影から岩影へこつそりと進む。

幸運な事に火竜達の意識は俺には向いていない。

しばらく進むと次の岩までに距離があつた。

立ち上がって走れば5歩でつくが、忍び足では倍は掛かるだろう。

結局、俺は匍匐前進をして行く事になった。

一番気付かれにくいと思うからだ。

俺は伏せて匍匐前進の体制になり進む。

音は立てないように、でも出来るだけ速く、気付かれないように進む。

後3メートル・・・

後2メートル・・・

後1メートル・・・

と言う所で風が吹いた。

その風に煽られて細かい砂が飛んで来る。

その砂が鼻の周りに来て、そして・・・

ヘックシュン！！

くしゃみをしてしまった。

近くにいた火竜が気付いてこちらを見る。

「い、こんには」

┐
•
•
•
└

火竜達は何も言わない。

しかし確実に仕留めるように俺を囲い込み間合いを測る。

⌈
•
•
•
⌋

┌
•
•
•
└

しばしの無言の後に・・・

「じゃ、俺はこれで・・・」

俺は火竜達に背を向けて歩こうとした時

「グオオオオー！！」

思いつきり吠えられました。

・
・
・
俺、死んだかも

「生きてるって素晴らしい！」

俺は何とか逃げ切る事に成功した。

あらゆるノアの力や魔術を駆使して逃げ出した。

囲まれてブレスを吐かれた時はヤバかった。

咄嗟に風の精霊で防いだが目の前まで炎が迫ってくるのは本当に恐い。

隙を見て拳で口を無理やり閉じてやったら、思いっきり咽せてた。

ザマーみやがれ！！

と、まあ火竜達から生きる事の素晴らしいさを学んだ後に山の上に逃げて来た。

そろそろカズキ達と合流するか。

水晶を取り出して操作する。

そしてアニエスとカズキの居場所を確認すると・・・

「ん？あいつらもう合流してるのか？」

俺より少し先に反応があった。

あいつらいつの間にも巣を突破したんだ？

とりあえず、合流する為に俺は歩き出した。

「あつティキ！」

先にこちらに気づいたアニエスが呼び掛けてくる。

「お前ら速いな？」

いつの間に通り返けたんだ？」

「え」と30分くらい前」

「僕もそれくらいです」

え」と、30分くらい前だと俺がアニエス達が暴れるのを待ってた時か。

・・・もの凄く無駄な時間だったな。

「ティキはどうしてたの？」

「あ？俺？」

俺はお前達が火竜と戦ってて火竜達が居なくなっただ時に通り返けようと岩影で待ち続けた。

流石に時間がヤバくなったからこそりと抜けようとしたんだが火竜に見つかってな。

しかた無いから火竜達から命の大切さを学んできた」

「命の大切さ？学ぶ？」

アニエスはよく分からなかったみたいだ。

でもカズキは理解したみたいで苦笑してた。

「お前達はどうやって抜けたんだ？」

「僕も似たようなものですよ。」

こっそりと抜けようとした時に子供の火竜と目が合いまして、囲まれる前に何とか抜ける事が出来ました。

追いかけられないように毒香水を使って眠らせて置きました」

へえ、毒香水な。

話に聞いただけでどんのかは知らないけど火竜にも効くのか。

・・・ん？

眠らした？

「・・・カズキ？」

眠らしたってどういう事？」

「そのままですよ。」

僕の毒香水、催眠香で眠らしたので多分半日は起きないと思いますよ」

ほう、半日も？
ふん、へえ。

「・・・カズキ、ちょっと拳で語り合おう」

「はい？」

「何でもいいから一発殴らせろ！！」

「な！？何ですか！？」

「俺の努力が全部無駄だった事が判明したからだ！！」

「そんなの関係無いですよ！！」

「うつせー！！」

お前がもっと早く知らせれば俺は安全に通れたんだよ！！
何か言い訳が有るなら言ってみやがれ！」

「キャウー！」

「あ？何だって？」

「・・・僕何も言ってますんよ？」

「・・・はい？」

「キャウキャウー！」

「「・・・キャウ？」」

俺とカズキが音源である場所を同時に見る。
そこにはあたふたしたアニエスが何かを後ろの手に隠している。

「あつ！え、え」と。
き、キャウー！」

アニエスは慣れない動作で声真似をしている。
その姿は可愛い。
可愛いのが、俺の目がおかしく成ったのだろうか？
アニエスの後ろから火竜の小さな尻尾が見える。

「アニエス？」
その後ろに隠してるのは何だ？」

「な、何も隠して無いよ！」

アニエスは慌て取り繕うが、まず尻尾を隠せ！尻尾を！

「そうか。」

ならお前の後ろにある火竜の尻尾が見えるんだけどどうしたんだ？」

「やだなティキ！」

そんなの何処にも無いよ！

ティキの目がおかしく成ったんだよ！」

・・・ちよつとキレても良いだろうか？

俺はアニエスに近づき拳骨をする。

「んぎゃ！」

変わった声を出しながら涙目で頭を抑える。

その隙にアニエスの後ろに居る生物の首根っこを掴み持ち上げる。

「・・・」

「キャウー！」

やはり居た生物は火竜だった。

体は小さく何にも警戒しない何処を見るとまだ生まれたばかりの子供なのだろう。

しかし赤ん坊とは言え、何処から連れて来たんだ？

「・・・アニエス、一体何処からこいつを連れて来たんだ？」

「うー、火竜の巣を抜ける時に黒叢の指輪で火竜を引きつけたんだ。その隙に通り抜けようとした時に生まれたみたいで、私に懐いたのと可愛かったからつい連れて来ちゃた」

なるほど。

それじゃあ、

「俺から隠したのは何でだ？」

「ティキが知ったら置いて来い！って言われそうだから」

ふむ。

「よく分かってるじゃないか。
元居た場所に置いてきなさい」

「だ、だめ！」

「キュウちゃんは連れてくの！
ちゃんと私が育てるから！」

「お前、火竜なんか育てた事無いだろ？
それよりキュウちゃんって何だ？キュウちゃんて？」

「何でそんな小学生が付けるような名前にするんだ？」

「キャウーって鳴くから、言いやすいようにキュウちゃん！」

「本当に小学生が名前付けるレベルだな。」

「お願いティキ！
ちゃんと育てるから！
私が責任持つから！」

しかし、火竜だぞ？
確かに子供の火竜は可愛らしいがその内火を吹いたりするんだぞ。
危ないだろ。

周りもそうだがアニエスが育ててる時に怪我したらどうするんだ？

「しかしな。」

やっぱり危ないぞ？

今度犬とか買ってやるから今は我慢しろ」

「だめ！キユウちゃんが良いの！」

ハア、どうしようかな？本当に。

今ので納得してくれたら楽だったんだが。

「・・・あのく、ティキ？

今は飼う飼わないの前に少し先を急ぎましょう」

ん？どうしたんだ？

「どうしたんだ？カズキ？」

「え〜とですね。」

ティキとアニエスの声が大きくてですね。

火竜達がこっちに気付いたみたいです」

俺はカズキが見ている方を見る。

確かに火竜達がこっちに向かっている。

「・・・よし、逃げるか」

「そうしましょう」

「うゝ、分かった」

俺達は急いで火竜山脈の頂上を目指して俺達は走り出した。

ハアハア、くそ！

あの火竜ども！

アニエスやカズキも居たのに俺ばかりを狙いやがった！
何か！？

俺が顎を蹴り上げたのをまだ根に持つてるのか！？

あれからひたすら頂上を目指して上り続けた。

しばらく火竜達からの攻撃に耐えながら登っていると突然火竜達が
引き返した。

どうしたんだ？

火竜の巣を抜けたか？

「アニエスゝ、カズキゝ、生きてるかゝ？」

「僕は大丈夫ですよ」

「私は殆ど襲われなかったから」

「キャウゝ！」

カズキは苦笑い、アニエスはキュウちゃんを抱きしめながら返事を
した。

何で俺だけこんなに襲われたんだ。

「まあしゃあない、とりあえず頂上に行こう。
後ちよつとだし」

「そうですね」

「あとちよつと頑張ろね！キュウちゃん！」

「キャウー！」

そうして俺達は頂上を目指して歩き出した。

「・・・ねー、ティキ？

火の精霊は何処？」

「キャウ？」

「・・・知らん。

適当に探すしか無いだろ」

俺達は頂上に着いたが火の精霊が居ない。

なんか枯れた木が何本か生えてるがそれだけだ。

後、暑い！^{ひたすら}只管暑い！

周りを見ると火の精霊達が思い思いに過ごしている。

こいつらが居るから暑く感じるんだろう。

数が少なかつたら此処まで暑くは成らないが此処は数が多い。

アニエスとカズキも辛そうだ。

キュウちゃんだけはケロッとしてるけど。

「ティキ、一度戻りませんか？
此処は暑すぎます」

「ああ、そうしようか」

「さんせい」

「キャウ」！

みんなの意見も一致したしさあ帰ろう！

「・・・お前が水のと契約した者か？」

帰ろうとした瞬間に周りの気温が上昇した。
そして声が響く。

まさかこのタイミングで？
今から帰ろうとしてたのに。

俺達はゆっくりと振り返る。

一際大きな枯れ木に大きな火が付いている。
よく見れば只の火では無いのが分かる。

火の一番上は顔のようにも見えるし、その下は腕を組んでいる。
足は無いから、枯れ木から少し浮いた所に居る。

間違いなく火の精霊だろう。

しかしだ。

俺には前世に有った物に見えてしまう。

古い家などで蠟燭に火を付ける時に使う物。

ライターによって活躍の場が減ったが、それでも、いざと言つ時に役に立つ。

そう。

枯れ木と火の精霊の組み合わせはまさに・・・

「マッチだな」

「マッチってあのマッチ？」

「どのマッチかは知りませんが多分そのマッチで合ってるますよ」

「キャウ〜！」

俺、アニエス、カズキ、キュウちゃんは思い当たる事を口にした。

・・・俺とカズキは当然だけどどうしてアニエスが知ってるんだ？あれか？

アテネの書籍シリーズで知ったのか？

まあいい。

やっと火の精霊とご対面だ。

第20話（後書き）

ちよつと遅めの投稿になりました。

次の話で火の精霊に名前を付ける事になります。

今までに火の精霊の名前のアイデアを出して下さった方々、ありがとうございます。

他にアイデアが無ければ既に出された名前を付ける事になります。

ご都合主義になりますがこれからもよろしく願います。

第21話（前書き）

どうもこんにちは。作者です。

ほぼ二週間ぶりの投稿です。

リアルの方でいろいろあつてかなり遅れるました。

次はもう少し速く投稿出来るようになりたいと思います。

後、火の精霊の名前を決めました。

名前を提案してくれた方々、ありがとうございます。

少し短めですが、第21話お楽しみ下さい。

第21話

「あゝ、水の、って事はティアから聞いているのか？」

「うむ、先日知らせが来た。

水のが知らせを送ってくるなど何十年ぶりかわからん」

と言つか居場所知ってたなら教えてくれたら良かったのに。

「ただ伝えに来た水の使いは死にかけてた。

水にとつて此処は火が多すぎるようだな。

ヨタヨタしながら来た時は焦った。

話を聞いて直ぐに帰してやった」

・・・水の、お前達も大変だったんだな。

「ティアやあなた達以外にも精霊は居るのですか？」

疑問に思ったのだろう、カズキが質問した。

「居るには居るぞ。

水のや我はその属性の精霊で一番始めに生まれた者だ。
今は王のようなものだ。

まあ、特にする事も無いがな」

あゝ、だから暇つぶしにティアは俺と契約したのね。

お陰でハルケギニアを回らなきゃいけなくなっただけ・・・

まあ、カトレアを助けたし、力も手に入れてからいいか。

「それで、此処まで来たのだからちゃんと名前は考えたのだろうな？」

「あ、もう契約する事は決まってるんだ？
って言うかそんな簡単に契約していいのか？」

「構わんよ。」

精霊の力を使っても、精霊の数が減る訳では無い。
それに水の、ティアだったか？
ティアが認めたのだから悪用はしないだろ。
ならば力を与えるて見るのも面白い」

あゝ、うん。

一応は俺を認めてるんだ？
なら良いか。

俺が力を制御したらいいんだから。

おとつ、名前だったな？

忘れる所だった。

火の精霊の名前を来る途中で考えたんだった。

・・・因みに考えたのは俺とカズキでだ。
一度アニエスやイザベラ、シャルロットに名前を考えて貰ったが酷

かった。

「私は火だし、ファイヤーで良いと思うよ!」

「どうせならカッコ良くファイヤーマンは!？」

「・・・ヘルファイヤー」

アニエスのまあ良い。

確か初期の伝説のポケモンに同じようなのがいたし。

だがイザベラ。

ファイヤーマンはカッコ良いのか？

俺からしたらただ恥ずかしいぞ。

後シャルロット、ヘルファイヤーは止めてくれ。

初めて会った奴に地獄の炎なんて名前は付けたくない。

と言う事により俺とカズキで考える事にした。

イフリートやサラマンダー、イグニス、コロナ等火に関わる言葉を俺とカズキ挙げて、みんなが寝てる間にアテナに会いに行つて火に関わる神の名前も聞いた。

火と鍛冶の神に『ヘパイストス』、『ヘファイストス』、『ウルカヌス』。

太陽を司る神『ヘリウス』。

炎の巨人『スルト』。

火を司る魔神『イフリート』。

炎神『タミユリス』

イタリアの古い火の神『ウォルカーヌス』は破壊的な火と鍛冶の神、

火山の荒ぶる神。

太陽神『ソール』『アポロン』。

インドの火の神『アグニ』等々、アテナの知っている火に関わる神を聞いた。

今挙げた名前を神に書き、俺とカズキでどうするかを考えた。

まずは純粹に火の神としてヘリウス、スルト、イフリート、タミリス、ソール、アポロン、アグニ、イグニス等を挙げて見たがこれでも多い。

火の神様は意外と多い事を改めて気付いた。

カズキと俺であれでも無い、これでも無いと一週間程考えた。

その内に火竜山脈に着いてしまい、もうこれでいいや！つと言う事でインドの火の神『アグニ』とラテン語で篝火、炎の意味を持つ『イグニス』。

他にもイグニスはアニメや漫画等で出てくるとカズキが言っていた。

「アグニス。

あんたにはアグニスって名前を付けるよ」

「ふむ。

まあ良いだろ。

我は今日よりアグニスと名乗ろう」

ふう。

気に入ってくれて良かった。

何日も考えた名前をダメ出しされたら軽くへこむ。
横ではカズキも安堵していた。

「・・・ティキよ。」

お前は何か武器を使えるのか？」

ん？なんだ？

「あゝ、一応剣や槍、銃とかは一通り使えるぞ？」

「ふむ。」

ならば契約した序でだ。

お前に剣をやるう」

そう言うときアグニスは何も無い腰の部分からまるで何か有るかのよう
に掴む。

そして鞘から抜刀するかのよう
に剣を取り出した。

その剣は両刃の直刀で全体的に鮮やかな緋色。

刃渡り1メートル程。

そしてその剣は燃えていた。

燃え尽きる事は無く、剣から炎が出ている。

よく見てみると剣の周りを火の精霊が飛び回っている。

凄
い密度だ。

「これは昔造った剣だ。

炎雷覇と言う。

ティアや我、風や土の精霊が集まった時に各属性一つずつ造った。
のだが、ハッキリ言えば我らは持っている意味が無いのだ。

頼めば精霊達は力を貸してくれるからな」

「あゝ、まあくれるなら貰っとくよ。
ありがとう」

俺がそう言つと炎雷覇はひとりでに浮かび上がって俺の体き突き刺さった。

「うお！？熱！熱！熱いつて！」

そして少しずつ俺の体に入り込んだ。

俺が叫んでも関係無く入り込み、ついに全てが体に入った。
俺の胸の中には熱い物がある。

「それを使えば聖痕使わずともある程度は火の精霊を使いこなせる。
取り出す時は鞘から抜く感覚で出せるはずだ」

「まじで？」

俺はアグニスを見習つて腰に剣を抜くように少しずつ抜け・・・なかつた。

「ふむ。要は感覚だからな。
慣れれば直ぐ出せるようになる」

「そっか」

まあその内にできるように成るだろ。

「・・・所でその子供が抱えている火竜の子供はなんだ？」

・・・火竜の巣から攫って来ました！
とは言えない・・・

「キュウちゃんっていうんだよ！」

今まで黙っていたアニエスが嬉しそうにに答える。

「・・・そ、そうか？」

まあ名前の事は置いとくとして、よく懐いているようだな」

「ああ。

どうやら産まれる所に立ち合ったみたいだな。アニエスを母親だと思っ
ているようだ。

名前は幼名にして成長したらちゃんとした名前をつけさせるよ。」

「・・・ふむ。

産まれる時に付き合ったのも何かの縁だ。
大切に育ててやれ」

「はい！」

アニエスは元気よく返事をする。
もう飼う事は決定なのね。

餌代・・・いくらかかるだろ？

カズキも苦笑いしてる。

しばらく考え事をしていたアグニスはいきなり体の一部を切り離す。

それをキュウちゃんに放ち、

「キャウ〜!」

俺と同じように体の中に入っていった。

「今のは？」

「我の体の一部だ。

キュウちゃんには火の加護を付けた。

これでキュウちゃんは他の火竜より耐火性にすぐれるし、少しは火の精霊を扱う事が出来るだろう。

どれだけ使えるかはキュウちゃん次第だ」

なんかキュウちゃんがパワーアップした。

アニエスが怪我しなきゃいいけど。

「我がしてやれるのはこの位だ。

後は自分で頑張るのだな」

「わかった。

何から何までありがとな。

また気が向いたら遊びにくるよ」

多分来ないだろうけど。

「うむ。

帰りに火竜に襲われないようにな」

そう言うとアグニスが消えた。

何か力ばっか貰ったな。

俺は契約と炎雷覇。

キュウちゃんは火の加護。

思ってたよりも成果が大きい。

今日はササツと山を降りてフカフカベッドでのんびりと寝たいぜ。

「んじゃ、帰るか。

アニエス、カズキ、キュウちゃん」

「「わかった（わかりました）」」

「キャウ〜！」

こうして俺達の火竜山脈での目的は果たした。

・・・まだ火竜の巣を抜けないといけなが。

「可愛い〜！」

ね、どうしたのこの子!？」

「火竜山脈で拾ったんだ。

名前はキュウちゃんだ。

これからは私が育てるんだ」

「キユウちゃんって言うの!？」
ね、ね、私も育てるの手伝っていい!？」

「勿論だ」

「やった〜！」

これからよろしくね！
キユウちゃん！」

「キャウ〜！」

・・・モテモテだな、キユウちゃん。

え〜、俺達はアグニスと契約した後は真っ直ぐと宿まで戻った。
途中でまた火竜に襲われたが全速力で逃げたら火竜達も諦めた。

そして、朝早く出発して、約半日。

夕食前に何とか帰って来れた。

俺達が宿に着くとちょうど夕食を食べようとしているイザベラとシヤルロットを見つけたのだ。

2人に

「ただいま〜」

と言えば

「おかえりー」

と返してくれた。

そして何気なく頭にキュウちゃんを乗せたアニエスを見たイザベラが前述のようにハイテンションになった。

今イザベラはキュウちゃんを抱き締めている。

シャルロットはイザベラに抱き締められているキュウちゃんを、ジーーーーと見た後に頭を撫でていた。

イザベラに抱き締められ、シャルロットに頭を撫でられているキュウちゃんだが満更でもなさそうに、

「キャウ〜」

と鳴いていた。

「あゝ、あいつらの事は置いて、ラッハ、アルア。
今日は何も無かったか？」

「特に無かったな。

昼は嬢ちゃん達が見回りたい！って言うからついて行つてが、見る物全てに興味を持つてた。

村の奴らも微笑ましそうに見てるだけで何も起きなかった。

後はアルアがイザベラ嬢ちゃんに文字を教えて貰ったくらいか」

ふゝん。

何も無かったならいいや。

それにしても、

「アルアは文字を読めなかったのか？」

商家の子だろ。

ライラは教えてもらってたぞ？」

「あ、あはは、実は訓練ばかりをしていて勉学を疎かにしてたんですよ。

でも今回の旅は割と暇があるから少し勉強を試してみようかなって思っ

て。午前中に簡単な本と睨めっこしてたらイザベラ様に、あんた字読めないの？だったら私が直々に教えてあげるわ！って言われて・・・あんまり読めなくてもいいかなって思ってたんですけど断れる雰囲気じゃなくて」

「で、朝と夕方は自分より年下の子供に教わっていたって事か」

「あ、あはは、はい」

今まで字を読めない事を隠していたからか少し居心地が悪そうだ。

「・・・それにイザベラ様って頭良いから俺が勉強で知らない事一杯知ってて、俺がどれだけ無知だったかに気付いて。さらに、あんたそんな事も知らないの？って言われる度に胸にグサツとくる物があつて」

少し落ち込んだようにアルアは答える。

自分より年下の子供に教えてもらう状況に落ち込んでるみたいだ。イザベラの少しきつい喋り方でダメージも受けてるみたいだし。

「まあ、その、何だ・・・
頑張れ！」

「・・・はい」

とりあえず励ましただけしておく。此処で上手く取り入れれば逆玉の興も夢では無い！

・・・その為にはイザベラの口調に慣れないといけない。
負けるな、アルア！

「っで？次は何処行くんだ？」

ラツハが落ち込んでるアルアを尻目に次の行き先を聞いてくる。
少しはアルアを気づかってやろうぜ。

「次はゲルマニアだな。」

土の精霊はティアがアグニスみたいに連絡入れてるはずだからゲルマニア国内に居ればその内会えるよ。
その前に皇帝に会いに行かないとな」

「・・・大丈夫か？」

今ゲルマニアもきな臭いぜ。

貴族達は現皇帝の後継ぎ問題で軽く慌ただしいらしいぞ。

今の皇位継承者達は仲が悪いからな。

どの皇位継承者に付くかで今後が変わるからな。

貴族達も必死だ」

「・・・時々思っただがラツハは偶にもの凄く詳しい時があるな。
何処でそのネタを掴んだんだ？」

「あ？傭兵仲間だよ。」

傭兵は雇ってもらはなきゃいけないだろ。

何時も何時も依頼が有るわけじゃねーんだ。

効率良く稼ぐには情報は大切なんだぜ。

何処で争いが起きるか、何処で亜人が大量発生して討伐依頼が有るか知ってるに越した事は無いからな」

なる程。

傭兵も意外と大変なんだな。

傭兵って何時も酒場とかにいるから遊びまくる生活してるんじゃないかって思ってたよ。

「まあ、俺達がゲルマニアに行く理由としては正にそれだ。

ゲルマニアの抗争にガリアは関与しない事を伝えに行くんだ。

じゃないとゲルマニアの抗争がガリアに伝わる可能性があるだろう。

ゲルマニアも内部で争ってる間に他国から攻められる可能性は減らしたいだろうからな」

「へへへ」

ラッハとアルアが関心したように返事をする。

「でもテキで大丈夫か？

いらん所でミスしそうな気がするぞ」

「大丈夫だよ。

言う事言ったらとっとと退散する気だから」

ゲルマニアの首都から離れれば流石に内部抗争に巻き込まれないだろう。

それでも巻き込まれたら諦めるしかない。

まあ、少ししか居ないんだ。
大丈夫だろ。

「まあ何にしてもゲルマニアに行くのは明日からだ。
今日は飯食ってゆつくり休もうや」

「それもそうだな」

「じゃあ俺は料理と酒、注文してきますね！」

ラッハの言葉に俺は同意し、アルアは夕食の用意をしに行く。
アニエス、イザベラ、シャルロットは相変わらずキュウちゃんを撫
でたり抱き締めたりしている。

カズキは帰って来て直ぐに明日に必要な物を買出しに出かけてい
て、その内帰ってくるだろう。

今日はアテナへの報告と明日からの暇つぶしの本を借りに行くから
後でイザベラとシャルロットの読みたい本を聞いとかないな。

まあ、とりあえずは酒でも飲むか！

次の日、酒飲み組が二日酔いでゲルマニアへの出発が遅れることにな
るが、今は関係ない話である。

第21話（後書き）

という事で火の精霊はアグニスにさして頂きました。

後、風の聖痕の炎雷覇が出ました。

後、風と土の精霊、キュウちゃんが大きく成った時の名前を募集します。

風は少し子供っぽい性格の女、土は渋い男にしようと思いますが、性別がおかしいと思ったらまた教えて下さい。

後、キュウちゃんは♀なので可愛い名前も良いと思うのですが、少しは威厳の有る名前のほうが良いとも思います。

もしキュウちゃんのままが良いと言ったことがあればそれもまた考えてみます。

これからよろしくお願いします。

第22話（前書き）

3ヶ月ぶりの投稿です。

自分も高三なので進路の事で色々ありました。

これからは週1ぐらいで投稿するつもりなの、未熟な文章ですが、これからも宜しくお願いします。

第22話

俺達はアグニスと契約して次の昼過ぎに村を出た。

昼過ぎに出発になったのは俺とアルアが午前中に二日酔いで起きられなかったからだ。

何故二日酔いに成ったかと言うと、ラッハと飲み比べを挑まれたのだ。

普段から嗜む程度には酒を飲むが、何時も飲んでいるラッハには勝てる気がしない。

負けるのは分かっているが、ただ負けるのもつまらない。

だからついでにアルアも巻き込んだ。

本当はカズキも巻き込もうと思ったのだが買い物に出かけて居ない居ない者は巻き込めないで、帰ってきたらイザベラ達のお守りしてもらおう事にした。

俺、ラッハ、アルアによる飲み比べは最終的にはやはりラッハの勝ちだった。

そして次が俺。

アルアは何時もラッハや傭兵仲間に飲まされるらしく、かなり手ごわかったが、前世から数えて40歳の意地で何とか勝った！

って言うか子供に酒飲ますな！と思う。

聞いた話だとこの世界だと、13で成人だと認めるらしいけど、まだアルアはまだ12のはずだ。

いやまあ、巻き込んだ俺に言えた義理は無いけどな。

でも、常日頃から巻き込む奴よりましだと思っぜ。

とまあこんな事があったから、ラッハはまだ大丈夫そうだったけどアルアと俺が二日酔いで死んだ。

この時はマジで酒は控えようと思ったな。

飲みすぎて頭は痛いし、イザベラやシャルロットが酒臭いと言って

近づいてこなくて、少し寂しかったからな。

そして馬車に乗り、ゲルマニア皇国の首都、ヴィンドボナを目指した。

ヴィンドボナに着くまでに2週間程掛かるらしい。

それに、暗く成ってきた時に盗賊等に襲われるのも面倒なので、暗くなってきたら直ぐに途中の村や街で休む事になっているのもあり、思っていたよりも時間が掛かる。

馬車の旅の道中はかなり暇。

最初は寝たりトランプしたりで時間を潰したが、3日もしたら飽きた。

イザベラやアニエスはキュウちゃんと遊び、シャルロットは本を読んでいる。

ラッハとアルアは従者をしているし、カズキは怪しげな物を調査している。

今作ってるのは退化香と言い、吸った者の思考力を著しく落として、猿のようにするらしい。

・・・もしこれが世界中に蔓延したらリアル猿の惑星に成りそうで怖いな。

とまあ、みんなが思い思いの時間を過ごしている中、俺は暇すぎた。5日目にはガリアの首都、リュティス程では無いがそれなりに広い街に付いた。

まだ日は明るいが俺達はそので休む事にして宿を取った。

イザベラとシャルロットが街に出たいと言うのでカズキとアニエス、アルアを護衛に付けて自由行動をさせてやった。

・・・ガリアの姫の護衛が平均年齢13歳ってのはどうかと思うのだが、アニエスは3歳の頃から修行してて、素手でも並みの傭兵じやあ手も足も出ないだろう。

オマケに忘却欠片も持たしているのでこの世界でも上位の力を持つ

てる。

カズキは前世の記憶と弦術に毒香水もあるのでアニエス程に強い筈だ。

アルアは……まあ、成長に期待だな。

今でも大人相手に負けないだろうが、アニエスとカズキには見劣る。まあ、頑張れ。

とまあ何気に強い護衛を引き連れてイザベラ達は街へ繰り出した。

ラッハ？

あいつは酒場へ情報収集に行ったよ。

間違い無く酒が目当てだろうが、傭兵から情報を集めやすいだろうから目をつぶる事にした。

情報は時に金よりも価値がある。

部下が酒を飲んで欲しい情報が手に入るなら、少しぐらい見逃しても良いだろう。

そこで俺はアテナの所へ向かっている。

向かってるって言っても宿のドアからアテナの家まで道を繋ぐだけなんだけどな。

家に着くと、ただいま、おかえりー、の挨拶をする。

……礼儀って大事だよな。

親しき仲にも礼儀あり、って言うし。

まあ、単純に帰る所があるってのが良いんだけどな。

前世じゃ家族は死んでたから家に帰っても誰も居なくて寂しく感じた事がある。

だから「おかえり」を言ってくれる人？神？が要るだけで嬉しい。

まあ、挨拶の事は置いという家に入るとアテナは居間の隅に居るよ

うだ。

・・・何してんだ？

「おかえり、ティキ。

珍しいの？こんなに速くに来るのは」

「あゝ、馬車での移動って思ってたよりも暇でな。暇つぶしに本を何冊か持って行きたいんだが」

「ああ、そうか。

ならば奥の本棚から適当に持って行けばよい。

彼処にあるのは読む専用だから汚してもし問題ないぞ」

と何かを弄りながら答えてくれた。

「おう、ありが・・・読む専用？

・・・他にもあるのか？」

「？何を当たり前な事を。

本は読む用、保存用、鑑賞用の3冊は確保する物じゃろ？」

「・・・一般人は一冊ありや十分だよ」

同じ物を何冊も買うなよ。

一冊づつにすれば単純に三倍の本が揃えられるぞ！

はあ、まあお陰で本を持って行けるから感謝はしておくか。

今のアテナを見てると、一冊しか無かったら絶対貸してくれないだろ。

「・・・ところで、アテナはさっきから何をいじってんだ？」

アテナは俺の方を見ずに、説明書らしき物を片手に大きな箱のような物を弄っていた。

「うん？まだ秘密じゃ。」

もう直ぐ出来るだろうからこれが終わるまでに本を取ってきたらどうじゃ？」

それもそうだな。

さっさと取りに行つてのんびりしよう。

「じゃ、ちよつと行つてくるわ」

俺は作業してるアテナの横を通り、図書室へと向かった。

・・・さて、やってきました図書室へ！

いや、もう図書館って言つても良いレベルだ。

それに何か前より広く成つて無いか？

更にここにある本の保存用と鑑賞用があるんだろ？

どんなけアテナは本を集めてるんだよ？

と、そこで入り口の横に壁紙が貼つてあった。

そして、その下に籠に入つた縦10cm、横5cm、厚さ2cmぐらいの機械が大量にあった。

俺は壁紙を読んでもみることにした。

「ん？」

“読みたい本が見つから無いあなたへ。

この広い図書館で一つの本を見つけようなんて藁の山から針を探すような物。

そんな時間の無駄無駄！

読みたい本がある時はこれ！

あなたのパートナー、本丸！

これを使えばあなたの探している本がどこにあるか一発で見つけられるよ！

使い方は簡単。

画面をちよいと触って単語検索！

本の題名でも作者でも登場人物の名前でもOK！

入力された単語でhitする物、全部出てくるよ！

音声入力もできるから機械音痴の方でも安心！

さあ、あなたも！

このあなたのパートナー、本丸を片手に快適な読書タイムを満喫しましょう！”

・・・・・・アテナが作ったのか、これ？”

何か深夜の通信販売と同じ感じで書いてるぞ。

オマケにiPadみたいに片手で持てるし、タッチ画面だし、箱一杯に入ってるし。

アテナ、こんなの絶対要らないだろ？

まあいいや、え〜と。

シャルロットが冒険物でイザベラは・・・・・・推理小説で良いかな？

一応何冊か持って行って好きな本を読ませるか。

冒険物はやっぱりドラクエ、最後の幻想、ダイの大冒険とかか？

推理小説は相棒か金田一少年、体は子供頭脳は大人な高校生探偵とかで良いよな。

後は俺が読む用にカイジでも持ってくか。

俺やアテナは普通に読んでるけど、カイジって子供が読む物じゃないよな。

欲にまみれた汚い大人の話だし、カイジはすぐ借金するし、何やかんでもよく負けるし。

・・・まあ、面白いから良いんだけどね。

俺は目当ての本の題名を本丸に入力し、探し出した。

小説も有るけど漫画の方があのチビッコ共も普通に読めるよな？でも漫画じゃあ直ぐに読み終わるからな。

漫画と小説を半々ぐらいで持つて行くか。

俺は選んだ本を近くに積み重ねていた籠に入れて行く。

ある程度入れた所でアテナが居る部屋へと戻る事にした。

俺は本を入れた籠を持って椅子に座る。

そして気になった事を聞いてみた。

「なあ、さつき図書館？に本丸つてのが有ったんだがアテナはあんなの使うのか？」

「使わんぞ」

「使わんのかい！？」

じゃあ、何のためにあんなの用意したんだ？

「あれは図書館の利用者にかしてるんじゃない」

「利用者？」

・・・え？こっつて俺の夢の世界だよな？
誰か入って来れるのか？」

「夢渡りの力を持つ者や妾の仲間が本を借りにくるぞ。
5冊で100円、無くしたら無くした本の代金を弁償する。それさえ守れば1週間から2週間程貸している」

「夢渡り？は置いといて代金が安すぎないか？」

「別に貸し出しで儲けようとしてる訳じゃ無いからな。
本最低限のマナーを守るなら好きに読めば良い。
ただあんまり返すのが遅かったら催促の知らせと、1日毎に1冊50円を払って貰う事になる。」

まあ、これは順番待ちの者にスムーズに本が行くようにする為じゃ
がな。

金が掛かると直ぐ返しに来るだろうからの」

うーん、1冊100円でも十分やって行けると思うけどな。
それに期限を守れば金も殆ど掛かんねーし。

「じゃ、あの本丸はどうなんだ？
あれを盗む奴が出て来るんじゃない？」

だって無駄に高性能だったし。

「あそこに在るのは劣化版じゃ。
基本的に貸し出ししておる。」

劣化版はこの図書館関係の機能しかない。

この図書館内ではいくら使おうが無料じゃ。
あれは盗っても仕方無いと思うぞ？
それと、本丸は販売もしておる。」

「販売！？」

売れるの！？

あんなのが！？

「商品の方な。」

一台5万円で売っておる」

・・・5万円？

買う奴いるの？

「商品の方は高性能じゃぞ。」

図書館関係は勿論、自分の世界から本の予約も出来る。

その内、本を送る事が出来る機能を付けて貰う予定じゃ。

更には手続きが必要じゃが、自分の世界で携帯電話としても使える。

電話は勿論、メールやテレビ、ゲームにインターネットもその世界

で受信して繋ぐ事が出来る。

後は同じ物を持っている同士なら世界が違っても通話できる」

・・・俺も買う。

何？その無駄な高性能。

それなら俺も欲しい。

でも、名前が本丸か。

・・・いくら凄い機械を作ってもネーミングセンスがあんまりだと思うのは俺だけ？

まあ、本丸が意外と高性能だから色んな奴が買っただろうな。
・・・それより

「なあ、夢渡りって何だ？」

「うん？何じゃ？知らんのか？
そのままの意味じゃよ。」

自分の意識を人の夢に割り込ませる事ができるんじゃ。
大概の者は人を悪夢から助けたり、遠くに居る者と話しをしたりして
おるな。その力で稀にこの世界に迷い込む者もいるんじゃ。その
者達や、妾の仲間達が本を貸してくれって言うから隣の部屋を図書
館にしたんじゃ。

その扉は裏口みたいな物でちゃんと玄関も造ってあるぞ」

「ふん」

何か知らない内に俺の夢の世界に色んな奴が来てたんだな。
自分の夢の中に何人も神様が居るなんて奴は俺くらいだろうな。

「本丸は元々は図書館の利用者が本が在りすぎて読みたい本が見つ
からないと苦情が来てな。

仕方ないから妾の知り合いのヘパイスツスに造って貰ったんじゃ」

・・・ヘパイスツスカ。

確か炎と鍛冶の神様だ。

物を造るのに長けていたが、ヘパイスツスの見た目が醜いと言う事
から彼の母親でゼウスの妻、ヘーラーに嫌われていたらしい。

そこでヘパイスツスは母親のヘーラーに自分の事を認めさせるため
に豪華な椅子を造る。

その大変美しいに椅子の出来に感激した上機嫌のヘーラーが椅子に座ったとたん体に拘束し身動きを取れなくしてしまった。

拘束されたヘーラーはすぐにヘパイストスに拘束を解くように言う母にヘパイストスは自分をヘーラーの息子であると認めさせた。

しかし母に不信任を募らしていたヘパイストスはその言葉を信用出来ずなかったがヘーラーにアプロディーテと結婚させると言われて慌てて拘束を解く。

その後、本当にアプロディーテと結婚したヘパイストスだが、アプロディーテは直ぐに不倫をした。

それを知ったヘパイストス是不倫現場を抑える。

そしてヘパイストスはアプロディーテと離婚した・・・だったかな？

昔に少しギリシャ神話を読んだだけだから詳しくは知らない。

「ふーん、でもあれって神様が造ってにしてはかなり現代的だぞ？」

「利用者は神だけで無く夢渡り達もいるからな。現代的の方が何かと楽じゃ。」

まあ、便利な事には変わり無いか。

でも、俺には関係無いな。

図書館には何時でも行けるし、予約する必要も無い。

ハルケギニアは電気も無いし、インターネットも使えないし、他の世界に知り合いは居ない。

連絡は水晶があるから必要ない。

「それよりさつきからいじってるそれは何だ？」

「見て分らんか？」

「いや、分かるから余計に疑問なんだよ。
何でこの家にテレビが在るんだ？」

そう、俺が家に帰ってからアテナがずっといじってたのはテレビだ。
しかもかなりの薄型で画面もデカい。

「ふむ、実は本丸を作って貰う時についてにこれも作って貰ったの
じゃ。」

前々からアニメも見たいと思っておつての。
へパイストスにお願いしたら2つ返事で作ってくれた」

と言い、アテナは無い胸を張る。

「・・・そんなの作って貰っても内に電気は無いぞ？」

なぜか備え付けの家具は普通に使えるけどな。

「そんな物は重々承知じゃ。」

だから、わざわざ造って貰ったのじゃぞ？

これは中に魔力を溜めてそれを電気に変換。

一回の充魔で30時間動き続ける優れものじゃ」

充魔？充電の事か？

凄いな、魔力を充電するだけで何処でも使えるんだろ？

電気代が全く掛からんな。

「ふっふふ、これで今まで諦めていたアニメも見られる！

よし！今からDVDデッキと今までに出ているアニメのDVDを買いに行くぞ！」

と言いながら、アテナはこの家から走って出て行った。

・・・本みたいに大量に買わなければ良いけど。
俺も帰るか。

俺はアテナから借りた本を持って家を出た。

宿の部屋に帰って来た俺は、借りて来た本を持って宿と一体になっている一階の酒場に下りた。

もう夜になっているようで、酒場は盛況だった。

シャルロットやイザベラ達も帰って来ていて、食事を取っていた。

「・・・お帰り」

「ただいま」

「ただいま！じゃ無いわよ！
今まで何してたのよ！

お腹すいて、もう先に食べてるわよ！」

一番初めにシャルロットが俺に気が付き、可愛らしくお帰りと言ってくれた。

それに返事を返すと、イザベラが怒ってきた。

「ん、悪いな。

変わりに面白い物借りて来たぞ」

と言いながら籠に入った本を見せる。

「！？！？」

「ティキ！！これって！？！？」

一番始めに反応したのはカズキだった。
そりゃそうか。

生前の本がこんな所に在ればビックリするわな。

「カズキ、後で説明するから」

「あ、はい」

とカズキには先に断りを入れておく。

カズキの次に本に気付いたのはシャルロットで、俺が持っていた籠から本を抜き取っていた。

抜き取ったのはドラクエでありそれを開いた所なのだが、

「・・・読めない」

「ああ、それは大丈夫だ。

え〜と確か・・・

あ、あつたあつた」

ここに来る前にちよと調べといたんだよな。

俺やカズキ、アニエスは読めるがシャルロット達は無理だろうな〜
と思つて調べといて良かったよ。

「リードランゲージ

読めない文字の意味を知ることができる。

ただし、あくまで意味を知るだけなので書くことはできない、つて魔法があるんだ、ほら」

とシャルロットとイザベラにルーン文字を見せた。

それを二人が試そうとしてる時に、横からカズキが

「そんな魔法、ありましたっけ？」

と聞いて来た。

「一応はな。」

ゼロの使い魔のドラマCDでルイズが使ってたらしい。

だから多分、シャルロット達も使えるんじゃないかと思うんだ」

「へー、そんなの有ったんですねー」

とカズキも納得したようだ。

因みにアニエスはこの魔法を使用せずに、文字を読める。

小さい頃からアテナに字を教えて貰いながら本を読んでいたからな。

そんなアニエスは普通にカイジを読み出した。

・・・お前、そんなのも読んでたのか。

俺が言えた義理じゃないが、もつと簡単な本を読めよ。

まあ、アニエスは放つといて、シャルロット達を見ると魔法は成功したようで、それぞれ本を読んでいた。

シャルロットはそのままドラクエを、イザベラは相棒を、カズキは体は子供な高校生探偵の漫画を読み始めた。

さて、俺もカイジを読もうかな。

ガタゴトと揺れる馬車の中で持って来た大量の本をみんなで静かに読んでいたのだが、予想して無かった問題が起きた。

・・・いや、予想してなかったんじゃないや無くて忘れてた事だ。

シャルロットは問題ない。

ドラクエの世界観は何処かゼロの使い魔に似てるからすらすら読め

るのだろう。

既に2冊目の終わりに差し掛かっていた。

カズキは転生者だから、アニメスは小さい頃から読んでいるからどちらとも問題なく読んでいる。

ラッハとアルアは従者台で話ながら従者をしているが問題ない。

問題があるのは、イザベラだ。

「ねえ、ティキ、車って何？」

「飛行機？」

鉄の箱が空を飛ぶの？」

「警察？」

騎士団みたいな物？」

「電話？テレビ？」

そんなのが有ったら魔法なんかよりも便利ね」

「血液型？」

血に種類なんてあるの？」

「死亡解剖？」

死体を解体するの？」

そんなので死因が分かるの？」

「何よ、指紋って！？」

何でそんなので誰が触ったなんて分かるのよ！？」

「何で部屋に落ちてた髪の毛一本だけで犯人が分かるのよ！？
DNA！？そんなに本人が分かるって何なのよ！？」

「何で爪切って無いぐらいで怪しむのよ!？」

「人の言動に一々反応して！」

この警部、細かすぎよ!」

とまあ、こんな感じに癪癪を起こすのだ。

その度に事細かく説明しないといけないのでかなりめんどくさい。オマケに理解出来ない事はとことん聞いて来るので、説明が終わったらまた次の説明をする事になる。

少しは静かにしてくれよ。

はぁ、速くゲルマニアに着かないかな、と思いながら、俺はイザベラの新たな疑問に答えるのだった。

第23話（前書き）

こんにちは。

1週間ぶりの投稿です。

作者はちゃんと予告通りに投稿できて安心してます。

次も1週間程で投稿しようと思うのでよろしくお願いします。

第23話

イザベラの質問攻撃に耐えること8日。

ようやくゲルマニアの首都、ヴィンドボナに着いた。

これでやっとイザベラの質問から逃れられると思うと嬉しくてたまらないな。

シャルロットは既にドラクエを読み終えており、次は最後の幻想を読んでいる。

イザベラは相棒もそこに読み、今は体は子供、頭脳は大人な高校生探偵の漫画を読んでいる。

いや、こいつら読むの速いし、ずっと読んでいる。

食事中も読んでもくらはまってるみたいだ。

・・・どうでも良いけど、食事中に本読むのは行儀悪いから止めなさい。

まあ、楽しんでるなら良いけどな。

で、ヴィンドボナに着いたのは夕方だったのとおりあえず宿を取り、皇帝へのお目通りは明日にする事にした。

既にラッハとアルアに明日、宮廷に行く旨を伝える手紙を届けて貰った。

行くのは俺とアニエスだけだ。

イザベラとシャルロットは来なくても大丈夫なので街を探索しに行くと言っていた。

それにカズキ、アルア、ラッハが護衛に付いて行く事に成ったので、この割り振りになった。

シャルロットやイザベラ達で明日に何処を回るかを話し合っている所を、俺とアニエスは明日の事もあるので速めに退散さして貰った。

ヴィンドボナに着いた翌日の朝に俺とアニエスは迎えに来た馬車に乗り、城に向かった。

俺は中流貴族のような服にマントを着けた格好で、アニエスは騎士の格好をしている。

本当はメイド服でも着せようかと思ったのだが、給仕の格好では皇帝の前まで行けないだろうと思い、騎士に成った。

騎士なら護衛と言う名目で連れていけるからだ。馬車を降りると、年を取った執事が待っており、城の中へと案内してくれた。

そのまま謁見室に通されて、皇帝と面会した。

謁見室には皇帝とすうにんの重鎮、それを護衛するための騎士が数人。

後は皇族だと思ふ者が数人で、全部入れても二桁に届くぐらいしか居ない。

俺とアニエスは中に入り、部屋を中心辺りで止まる。

「よくぞ参った。

ティキ・オルレアン・ド・ガリアよ」

すると皇帝に挨拶されたので、

「面会に応じて頂き、誠にありがとうございます」

と挨拶を返し、お辞儀をする。

後ろでアニエスも俺と同じようにお辞儀をした所で

「そこの者！無礼であろう！」

といきなり怒鳴られた。

俺が前を見ると、皇帝の横に居る男が、アニエスに向かって言った

ようである。

「？何か？」

とアニエスもいきなりで驚いたのか、不思議そうにしている。

「何か？では無い！

陛下の御前だぞ！」

と言う所で俺とアニエスは気付いた。

詰まりは、つひます跪け！って事か。

「・・・私はティキ様に仕える騎士で、剣であり、楯であります。そして、私が忠誠を誓うのもティキ様以外に有りません」

・・・詰まりは、

“ティキが跪いて無いのに何で私が跪かない？

私を跪かせたいなら、先ずはティキを跪かせろ”

って事だな。

その答えを聞いた重鎮は、

「き、貴様！」

と怒鳴ろうとするが

「よい」

と言う皇帝の言葉で止まってしまった。

「陛下、しかしそれでは・・・」

「その者の申す事は正しいであろう。
騎士が忠誠を誓う相手以外に跪くのも可笑しな話だ」

「・・・はい」

と皇帝に言われ、その重鎮は悄々（すごすご）と引き下がった。
しかし、その顔には苦渋の色が見えた。

見れば周りの騎士や重鎮達も皆、顔を顰めている。

・・・ただその中に一人だけ、面白そうに俺達を見ている皇族がいた。

「ティキ殿は中々に良い騎士を手に入れたようだな。
だが、まだ幼くしかも女だ。

力の方はどうなのだ？」

と皇帝に聞かれた。

まあ、アニエスは１３で見た目はただのか弱い少女だからな。

「見た目はアレですが、大丈夫ですよ。

そこの騎士ごときには負けません。

もちろん、メイジ相手でもね」

「こら、ティキ。

アレって何だ、アレって」

俺がアニエスについて、大丈夫だと答えると、護衛の騎士達の顔が
余計に厳つく成った。

こんな小娘に負けるか！って事かな？

因みにアレ扱いしたらアニエスが後ろからボソツと俺だけに聞こえるように文句を言っ
て来てるが、今は無視だ。

「・・・陛下。」

ティキ殿は自らの騎士の実力を信じているようです。
私としては彼女の实力を見てみたいのですが・・・」

「・・・と言うと？」

「私がアニエスさんに決闘を申し込みたいのです」

と、王の側にいた騎士がアニエスに対して宣言した。

「・・・ティキ、何故か今から決闘になるみたい何だけど」

「そうだな」

謁見室の中心辺りで向かい合う、おっさんと少女。

それを遠巻きに見つめる観客。

そんな中で少女はすぐ後ろにいる自分の主に声を掛ける。

「そして、その原因が私の後ろでニコニコ笑いながら楽しそうに見ているんだが？」

「気のせいじゃ無いから？」

少女は自分の後ろの主を見るとその顔は真面目な顔に見える。

そう、戦場に出かける主人を見送る妻のように。

「では、私は今からこんな格好をして闘わないといけないのだが、どう思う？」

「・・・ドンマイ！（笑）」

男は心配そうに見つめ・・・

ブッ！ククク・・・

堪えきれずに吹き出した。

男、ティキは咄嗟に少女、アニエスから視線を外し、手で顔を隠し、笑うのを我慢している。

アニエスの格好は、先程の騎士の格好から変わり、何故かドレスだった。

さっきまでは、武骨なフルメイル・・・とまでは言わないが大部分を鉄で覆われた鎧を着ていたのに対し、今は青い生地を元にしたドレスだ。

一応は動きやすいように裾は膝よりも少し下までしか無いのでこのままでも戦えるだろう。

さっきまでの鎧を着ている時と違い、随分と似合っていて、可愛かった。

・・・ただ、何故か頭にウサミミを付け、腰から猫の尻尾をしているので、シニールと言うか、何とも微笑ましい、と言うか、毎日顔を合わせている俺としては爆笑ものなのだが、流石に今此処ですると後々大変なので必死に堪えていたのだ。

まあ、ついさっき吹き出したけどな。

アニエスがゲルマニアの騎士に決闘を申し込まれた後、アニエス達は闘おうとしたのだが、俺がちよいと提案を出した。

と言っても簡単な事で、アニエスを着替えさせると言う事だ。

アニエスはさっきも言ったようにフルメールなのだ。

アニエスなら大丈夫だろうが、フルメールの鎧は大変重い。

13歳の少女がこれを着て動き回るなんてしたら、2分も保たないだろう。

だから、このままでは不利だ！っと言い、アニエスを着替えさせたのだ。

しかし、俺達は着替え等持つて来ていない。

そこで、ゲルマニア側から借りる事にし、アニエスは呼ばれたメイドと一緒に部屋を出て行った。

その間に此処に来た目的を終わらせる事にした。

俺の前にいる皇帝に、今のガリアは王位継承の準備に忙しく、またこれを期に国内を一度綺麗にする事にした、と伝えた。

国内を綺麗にするってのは、別に国中を掃除する事じゃ無い。

表向きは国内に居る犯罪者、手配されて居る者や泥棒等を現行犯等で捕まえたり、人に害をなす亜人や害獣等も一緒に討伐する事で国内の治安を上げると言う事だ。

裏側的には国に仕える役人の横領や横流し等を取り締まり、発覚すれば厳重注意と被害に応じた弁償、酷い場合だと国外追放等々される。

後はスパイが国に入り混んで居ないかも調べる。

まあ、これにより、国内が忙しくなるので、しばらくの間は国外に手を出せない、と言う事を伝えた。

コレに皇帝は了承し、俺のもう一つの目的である土の精霊との契約まで（あ、勿論この事は黙ってたよ）の滞在の許可を貰った。

そして、40分程世間話をしていたのだが、

「……来ませんね」

「……ああ」

「……逃げた、とか？」

「いやいや、彼女は自信満々でしたのでそれは無いかと」

「では、何かトラブルが？」

「まあ、もうしばらく待ってみましょう」

と、みんなで話していた。

俺はその話の輪から離れ、壁にもたれ掛かった。
するとそこに、俺が一人になるのを待っていたかのように一人の男が近付いて来た。

「ティキ殿、俺はアルブレヒトだ。
これからもよろしく頼む」

俺の目の前で握手を求めてくる男は先程、俺達を面白そうに見ていた男だ。

名前からして、ゲルマニア皇国アルブレヒト第三皇子だろう。

「……ガリア王国のティキ・オルレアン・ド・ガリア公爵です。
よろしく願います、アルブレヒト皇子」

アルブレヒト皇子は一応、始祖の血を継いでないとかで、ガリア王国王子の俺よりも下に見られているが、本当は俺と同じような立場

だ。

さらに精神年齢はさて置き、肉体年齢的には相手の方が一回りも上だ。

それなりの敬意をもって接するべきだろうと俺は思う。

「ああ。

この間のパーティーには行けなくて申し訳なかった。

こちらでゴタゴタしている事が有つてな。

それを片付けてる間にパーティーが終わってしまつてな」

「いえ、大丈夫ですよ。

私が公爵に成った祝いと銘打ってますが、実際に行っていたのは湖の近くで3日間思い思いに過ごしてただけですから」

まあ、実際にしたのは俺の御披露目だけで、後は夜に会食しただけだしな。

後の時間は貴族達の好きにさしてたから。

「そう言つて貰えれば助かる。

それで、公爵就任後1ヶ月と立っていないお前が来たのはどうしてだ？」

「もう直ぐ起きるであろう皇帝の覇権争いにガリアを巻き込まないためです。

先程も申した通り、ガリアも王の世代交代の準備で忙しいので」

「それは知っている。

しかし、何故それを伝えに来たのがお前なのだ？

他にも適任は居るだろう？」

「それも先程言いましたが、私の休暇がてらに旅行をしようと思い

まして。

その道^{すが}縫^ぬらに言伝を任されまして」

「そうだとでもだ。

公爵就任したとは言え、まだ15だ。

そんな子供に国に関わる事をさせる程、ガリアは人不足では在るまい」

どうやらまだ15の俺が来たのに疑問を持っているようだ。
だけどな〜

「・・・一応は10の時からある程度の書類仕事はして居ましたが・
・・・」

昔から仕事させられてたから、俺からしたら正直そこまで気になる事じゃ無いと思うぞ。

「ふむ、そうか。

ではお忍びで来る必要があるのか？

この国でお前が来た事を知っているのは今此処にいる者と一部の高官だけだ。

そこまで隠してお前がここに来るのには何か目的があるからじゃないか？」

「・・・無用なトラブルを避ける為かもしれませんよ？

それにさつきも言いましたが、休暇での旅行なので・・・」

「今のお前なら隠れて来るより、寧ろ大々的に宣伝して旅行をした方がいいだろう。

何故ならお前を狙っている貴族達は皆無なのだから。

今は皆、お前を見定めようとし、手は出し。

それ所か取り入ろうとするだろう。

詰まりお前が貴族に狙われる心配が無い。

そうなると旅をしている間に狙われるのは盗賊からぐらいだ。

ならば宣伝しながら来れば、盗賊に襲われても直ぐ貴族達に助けて貰えるはずだ。

そっちのほうがよっぽど安全だと思うが？」

「・・・」

「それをあえてせずに御忍びできたのは何か人には言えない目的があると考えるのが自然だ」

「・・・あれ？何故かかなり追い詰められて無いか？俺？

でも、俺の目的は別に疚しい（やましい）事じゃない。

ただ土の精霊と契約する事だ。

確か、トレスティンも盟約を結んで、モンモランシ家がティアとの交渉役のはずだし。

「・・・あ。そう言えばトレスティンと盟約を結んでるティアと勝手に契約してる俺ってかなりヤバくないかな？

「・・・まあ、精霊と仲良くする事自体は悪い事じゃ無いから大丈夫だろ。

多分。

けど、精霊と契約しに来た事なんて大々的に言う事でもない筈だ。

どちらかと言えば黙っている方が良く、と俺は思う。

「・・・もしそうだとして、あなたは私に何を望んでるんですか？」

「何、簡単な事だ。

お前の目的の事等はどうでもいい。」

黙っててやる。

その代わりに俺に力を貸せ」

アルブレヒトは断る事は許さない、というような空気で俺に言うて来た。

・・・ハア、本当に厄介事に巻き込まれた。

それから10分程アルブレヒトと世間話をしていた。

因みにアルブレヒト皇子の手伝いとやらの話では無い。

此処で話すと周りの奴らに聞かれる恐れがあるからだ。

だから、その件は後で話す事にし、最近の身の上話をしていたのだ。

そんな折りに、やっとノックがされ、アニエスが入って来た。

「お、やっと帰ってき・・・た・？」

と、俺だけでは無く、アルブレヒトや皇帝達まで呆然としていた。件のアニエスは顔を赤くし、伏せながら部屋の真ん中まで入って来る。

「あ、アニエス？

一応聞いてく。

・・・そのウサミミはお前の趣味か？」

と俺が聞くと、

「違う！-！」

と怒鳴り返された。

「これは皇帝の妃様に無理やり付けられたんだ！！

初めは動きやすい服に着替えてただけなのに、半分位まで着替えた所で妃様が来られて行きなり着せ替え人形にさせられて、長い間ずっと服を着ては脱いで、着ては脱いでつてしてて、そろそろ決闘に行きたいと言ったら“一人不思議の国のアリスの格好で行きなさい！”って訳の分からないこと言つて、青いドレスを着るまでは良かったけどその後にウサミミに猫の尻尾を無理やり付けさせられて、外そうとしたら、何故か周りのメイドから全力で止められて、妃様は“それを外したらあなたの負けよ！！”つとか言いだして、さっきまでずっとお願いしてたのについに外してくれなくて、ついにここまで連れて来られたの！！」

と長いセリフを感覚も開けずに早口で話してくれた。

そして、可愛らしい服にウサミミと猫尻尾をユラユラと揺らし、顔を赤らめ涙目で訴えて来るアニエスはとても可愛らしく、皇帝や重鎮、騎士等々のおっさんどもがアニエス同様に顔を赤くし、穴が空く程、アニエスを凝視していた。

・・・・・・このロリコンどもめ。

え？俺もって？

バカだな、13のアニエスに15の俺。

たがら俺がアニエスにどんな感情を抱こうてロリコンにはならんだ！！

まあ、いらん話しは置いて、妃が言っていた“一人不思議の国のアリス”つてのは、青いドレスがアリス、ウサミミが慌て者のウサギ、猫尻尾がチェシャー猫の積もりなのか？

この国の妃は一体どんな趣味何だ？

いや、可愛いから良いけどさ。

でも、この国の妃もアニエスを着せ替え人形にするとは・・・
妃って人種は女の子を着せ替え人形にするのが絶対条件なのか？
それとも、アニエスは着せ替え人形にされる運命なのか？

「・・・あゝ、悪かった。

とりあえず、今は我慢してくれ。

後で何かご褒美やるから」

「うゝゝゝ。

わかった」

このままじゃ、本気で泣きそうだったからちよつとエサを垂らして
やったら、しばらく唸つてから食い付いた。

はっはは、子供なんて所詮こんなもんよ！！

・・・後で財布の中身確認しとこ。

「じゃあ、ササット決闘を終わらして来い。

挨拶も終わったから決闘が終わったら帰るぞ。

それに、決闘が終わればそのウサミミと猫尻尾も取れるからな」

「さあ、今すぐ決闘を始めよう！！」

と俺がアニエスに教えてやると、機嫌よく決闘相手の所まで歩いて
行った。

「あゝ、では確認をしときます。

魔法あり、武器あり、マジックアイテムありの何でもあります。ただ、相手を殺さないように。

勝利条件は相手を気絶させる、行動不能にする、降伏させるかのどれかです。

後はこっちに流れ弾がこないようにしておいて下さいね。

一応こっちでも防御しますが、何が起きるか分かりませんからね」

「分かった」

「分かりました」

相手の騎士とアニエスはそれぞれ返事をして対峙した。

「では・・・

始め！！」

ガキン！！

と審判役の騎士が合図を出すと同時に、二人は飛び出し、剣鞘から引き抜き切り結ぶ。

騎士の剣はメイジの騎士がよく使う、杖剣だけどな。

二合三合と剣を打ち合うと、鏑迫り合いに纏れ込む。

しばらく押し合うと、力で強い騎士は押し切ろうと、力を入れ、一気に剣を押し。

力で勝てないと分かっているアニエスは押されると同時に後ろに跳び、距離を取る。

そして、二人はもう一度対峙して睨み合う。

「ほう、中々やるじゃ無いか、お前の騎士は」

「そりゃまあ、小さい頃から鍛えられてますからね」

俺はずっと横にいるアルブレヒトと話しながら決闘を見ている。

俺達が話している間に騎士はアニエス向かって走り、襲い掛かる。

「ファンタジーなドレス姿の少女に襲いかかるオッサン。

・・・端からみたらただの変態ですね」

「・・・街で見かければ即逮捕だな」

へんた・・・騎士の上段からの切り下ろしを、アニエスは半身になり避け、反撃とばかりに剣を振る。

騎士に当たる直前に騎士は剣を引き戻し何とか受ける。

そこから騎士は剣を返して反撃するが、アニエスはそれも避け、反撃する。

ここでアニエスの戦法は正面からの斬り合いでは無く、相手の攻撃は避けるか受け流す事により自らのダメージを減らし、反撃する作戦のようだ。

オマケに避けたり受け流すにより、相手に隙が出来ると言う事で、かなり有利に事を進めてる。

騎士の方もそれに気付いているようで、大振りな攻撃を減らし、小さなモーションで攻撃しているが、かなりやりずらそうだ。そして、動かない状況に騎士がじれて、遂に魔法を使った。

「クッ、エアハンマー！」

剣を避けた所をエアハンマーに襲われたアニエスは、自分からも後ろに跳び、吹き飛ばされた。

「ふむ、これからは魔法も使うようだな。
どうする？ 奴は風のトライアングルだぞ？
アニエスは魔法を使えるのか？」

「使えませんよ」

「・・・何？」

騎士が魔法を使うのを見て心配になったのか、俺に確認してくるが、返事を聞いて驚いたようだ。

「いや、正確には違うんですけどね。
魔法は使えます。

でも、あまり人前では使わないほうが良いと思います」

「・・・それは、詰まり、先住「ではありません」・・・そうか」

「この話はまた後で。
誰かに聞かれると面倒なので」

「分かった」

これは流石に人前で話す事じゃ無いからな。
他の貴族達が貴族以外でも魔法が使えるって知ったら大変な騒ぎになるからな。

「今、魔法が使えないのは分かった。
だが、どうするのだ？
魔法も無く、メイジに勝てるか？」

「・・・だから、マジックアイテムOKにしたんですよ」

「・・・何？」

「アニエスはあるマジックアイテムを持っています。それも強力な力のある、物をね。それを使えば問題在りませんよ」

「・・・そうか」

俺の返事を聞き、アルブレヒトは何か考える様に黙ってしまった。その間も決闘は進み、騎士は魔法の大技を使うようだ。

「これでどうだ！エア・ストーム！」

騎士を中心に風が起こり、渦巻きが起こる。

風はドンドン強くなり、遂には数メートル前も見えなくなった。

「勝負を掛けてきたな」

「そうでしょうね」

俺は風の精霊に頼み、俺とアルブレヒトに来る風を捌いて貰い、無風状態を作った。

しばらく待ってみると風は段々と落ち着き、辺りが見えるようになって来た。

俺達から少し離れた所に皇帝達は居り、無傷のようだ。

多分、周りにいる騎士達が風を受け止めたのだろう。

皇帝達の前で杖剣を構えていた。

エア・ストームを放った本人は部屋の真ん中にいて、肩で息をして

いた。

そして、肝心のアニエスの居た所には・・・

黒い塊が在った。

「なんだ、あれは？」

と隣にいるアルブレヒトが俺に聞いて来た。

その間に黒い塊は溶けるように無くなっていき、中からアニエスが出て来た。

「あれは“黒叡の指輪”って言って、闇を操れるマジックアイテムです」

・・・本当は忘却欠片だけだね。

「闇よ有れ！」

とアニエスが左手薬指に付いた指輪を振る。

するとアニエスの足もとから影が狼のような実体を持って騎士に襲いかかった。

・・・因みに、何故薬指に付けたのかを聞いた所、顔を赤らめて「私の自由でしょ！」との事。

「くっ！」

と騎士は獣に対し杖剣を振り、魔法を使い対峙する。

しかし、獣は一体だけでは無く六体おり、その全てを相手するのは難しいようだ。

次第に動きが遅れだし、そして右腕と左足を獣に噛み付かれた。

これにより一瞬動きが鈍るが他の獣と一瞬に魔法で一気に吹き飛ばし・・・

「私の勝ちだ」

いつの間にか後ろに回り込んでいたアニエスにより、剣を突きつけられていた。

「ま、参った」

そして、決闘が終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4847t/>

ゼロの使い魔～ガリア王家に転生！～

2011年12月5日20時11分発行